玉名市文化財調査報告　第8集

東南大門遺跡

市営住宅南大門団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成12年3月

玉名市教育委員会

序　文

玉名市教育委員会では、玉名市築地において、市営住宅南大門団地建替工事に伴い敷地内に所在する東南大門遺跡の発掘調査を実施いたしました。

今回の調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構、遺物を検出し、特に弥生時代中期の甕棺墓群と、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構及び大量の遺物は、当時の玉名地方を検討する上で大変貴重な資料となると思われます。

この報告書が、文化財保護の推進並びに学術研究の一助となればまことに喜びに堪えません。

最後に、本発掘調査及び報告書作成を実施するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました皆様方に対しまして厚くお礼申し上げます

平成12年3月31日

玉名市教育委員会

教育長　三　次　昭　也

例　　言

1．本書は、市営住宅南大門団地建替工事に伴う、玉名市築地地内に所在する東南大門遺跡の発掘調査報告書である。
2．確認調査、発掘調査は、玉名市教育委員会社会教育課江原浩司が担当し、報告書作成は田中康雄が担当した。
3．本書掲載の遺構実測図の作成は、（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、一部を江原が行った。
4．遺物の実測図は、田中、末永崇、中尾健照が作成し、一部を（有）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。製図は遺物を中尾、遺構を中尾、西川さゆり、平本静子、早川イツエが行った。
5．本書の執筆、編集は田中が行った。
6．調査時の写真撮影は江原が行った。
7．出土遺物の整理作業は玉名市教育委員会で行った。
8．出土遺物は玉名市教育委員会で保管している。

凡　　例

1．各遺構の記号は次のとおりに標記する。
　　Ｋ：甕棺墓
　ＳＫ：土坑
　ＳＤ：溝跡
　ＳＣ：石棺墓
　　Ｍ：木棺墓
2．遺構の寸法数字はｍ単位、遺物の寸法数字はcm単位を原則とする。
3．遺構図に用いた方位は、すべて真北（国土座標北）である。

目　次

序文
例言・凡例
本文目次
挿図目次
表目次
図版目次

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
Ⅰ　調査経過・調査組織 …… 1
第２章　地理的・歴史的環境 …… 3
Ⅰ　地理的環境・歴史的環境 …… 3
第３章　調査 …… 5
Ⅰ　調査の方法 …… 5
Ⅱ　遺構・遺物 …… 8
１　弥生時代中期 …… 8
遺構 …… 8
（1）甕棺墓 …… 8
遺物 …… 21
（1）甕棺 …… 21
（2）石製品 …… 35
（3）鉄製品 …… 42
２　弥生時代後期～古墳時代 …… 43
遺構 …… 43
（1）石棺墓 …… 43
（2）木棺墓 …… 43
（3）大型溝 …… 43
（4）土坑 …… 43
遺物 …… 48
（1）土器 …… 48
３　時期不明の遺構 …… 79
第４章　考察 …… 80

挿　図　目　次

Ｆｉｇ．１　東南大門遺跡位置図 …… 2
２　東南大門遺跡周辺遺跡分布図 …… 4
３　東南大門遺跡遺構配置図（全体） …… 6
４　東南大門遺跡遺構配置図（調査Ｉ区） …… 7
５　Ｋ－０１・０２・０３・０４甕棺墓 …… 9
６　Ｋ－０５・０６・０７・０８・０９・１０・１１甕棺墓 …… 10
７　Ｋ－１２・１３・１４・１５・１６・１７甕棺墓 …… 12
８　Ｋ－１８・１９・２０・２１甕棺墓 …… 13
９　Ｋ－２２・２３・２４・２５甕棺墓 …… 15
10　Ｋ－２６・２７・２８・２９・３０・３１甕棺墓 …… 17
11　Ｋ－３２・３３・３４・３５・３６・３７・３８甕棺墓 …… 19
12　Ｋ－３９・４０・４１・４２甕棺墓 …… 20
13　Ｋ－０１・０２・０３・０４甕棺 …… 22
14　Ｋ－０５・０６・０７甕棺 …… 24
15　Ｋ－０８・０９・１０・１１・１２甕棺 …… 25
16　Ｋ－１３・１５・１６・１７・１８甕棺 …… 28
17　Ｋ－１９・２０甕棺 …… 29
18　Ｋ－２１・２２・２３甕棺 …… 32
19　Ｋ－２４・２５・２６甕棺 …… 33
20　Ｋ－２７・２８・２９甕棺 …… 36
21　Ｋ－３０・３１・３２・３３甕棺 …… 37
22　Ｋ－３４・３５・３６甕棺 …… 38
23　Ｋ－３７・３８・３９甕棺 …… 39
24　Ｋ－４０・４２甕棺 …… 40
25　石製品 …… 41
26　鉄製品 …… 42
27　Ｍ－０１・０２木棺墓、ＳＣ－０１石棺墓 …… 44
28　ＳＤ－０８大型溝 …… 45
29　ＳＤ－０９大型溝 …… 46
30　ＳＫ－３５土坑 …… 47
31　土器１ …… 51
32　土器２ …… 52

Ｆｉｇ．33 土器３ …… 53
34 土器４ …… 54
35 土器５ …… 55
36 土器６ …… 56
37 土器７ …… 60
38 土器８ …… 61
39 土器９ …… 62
40 土器１０ …… 63
41 土器１１ …… 67
42 土器１２ …… 68
43 土器１３ …… 69
44 土器１４ …… 71
45 土器１５ …… 72
46 土器１６ …… 73
47 土器１７ …… 77
48 土器１８ …… 78

表　目　次

第１表　東南大門遺跡遺物観察表（甕棺） …… 81
第２表　東南大門遺跡遺物観察表（石製品） …… 83
第３表　東南大門遺跡遺物観察表（鉄製品） …… 83
第４表　東南大門遺跡遺物観察表（土器） …… 84

図　版　目　次

ＰＬ．１　Ｋ－０１・０２・０３甕棺墓 …… 99
２　Ｋ－０４・０５・０６甕棺墓 …… 100
３　Ｋ－０７・０９・１０甕棺墓 …… 101
４　Ｋ－１１・１２・１３甕棺墓 …… 102
５　Ｋ－１４・１５・１６甕棺墓 …… 103
６　Ｋ－１７・１９・２１甕棺墓 …… 104
７　Ｋ－２２・２３、２４、２５・２６甕棺墓 …… 105
８　Ｋ－２７・２８・２９甕棺墓 …… 106
９　Ｋ－３０甕棺墓・Ｋ－３０甕棺墓副葬品出土状況・Ｋ－３１甕棺墓 …… 107
10　Ｋ－３２・３４・３６甕棺墓 …… 108

ＰＬ．11　Ｋ－３７、４０甕棺墓・Ｋ－３７副葬品出土状況・Ｋ－３８甕棺墓 …… 109
12　Ｋ－３９、４０、４１甕棺墓 …… 110
13　ＳＤ－０８大型溝内遺物出土状況１ …… 111
14　ＳＤ－０８大型溝内遺物出土状況２ …… 112
15　ＳＤ－０８大型溝内遺物出土状況３ …… 113
16　ＳＤ－０８大型溝完掘状況 …… 114
17　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況１ …… 115
18　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況２ …… 116
19　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況３ …… 117
20　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況４ …… 118
21　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況５ …… 119
22　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況６ …… 120
23　大型溝内遺物出土状況 …… 121
24　ＳＫ－３５土坑内遺物出土状況・ＳＫ－３５土坑完掘状況 …… 122
25　ＳＣ－０１石棺墓検出状況・Ｍ－０２木棺墓検出状況・発掘調査作業風景 …… 123

第1章 はじめに

I　調査経過

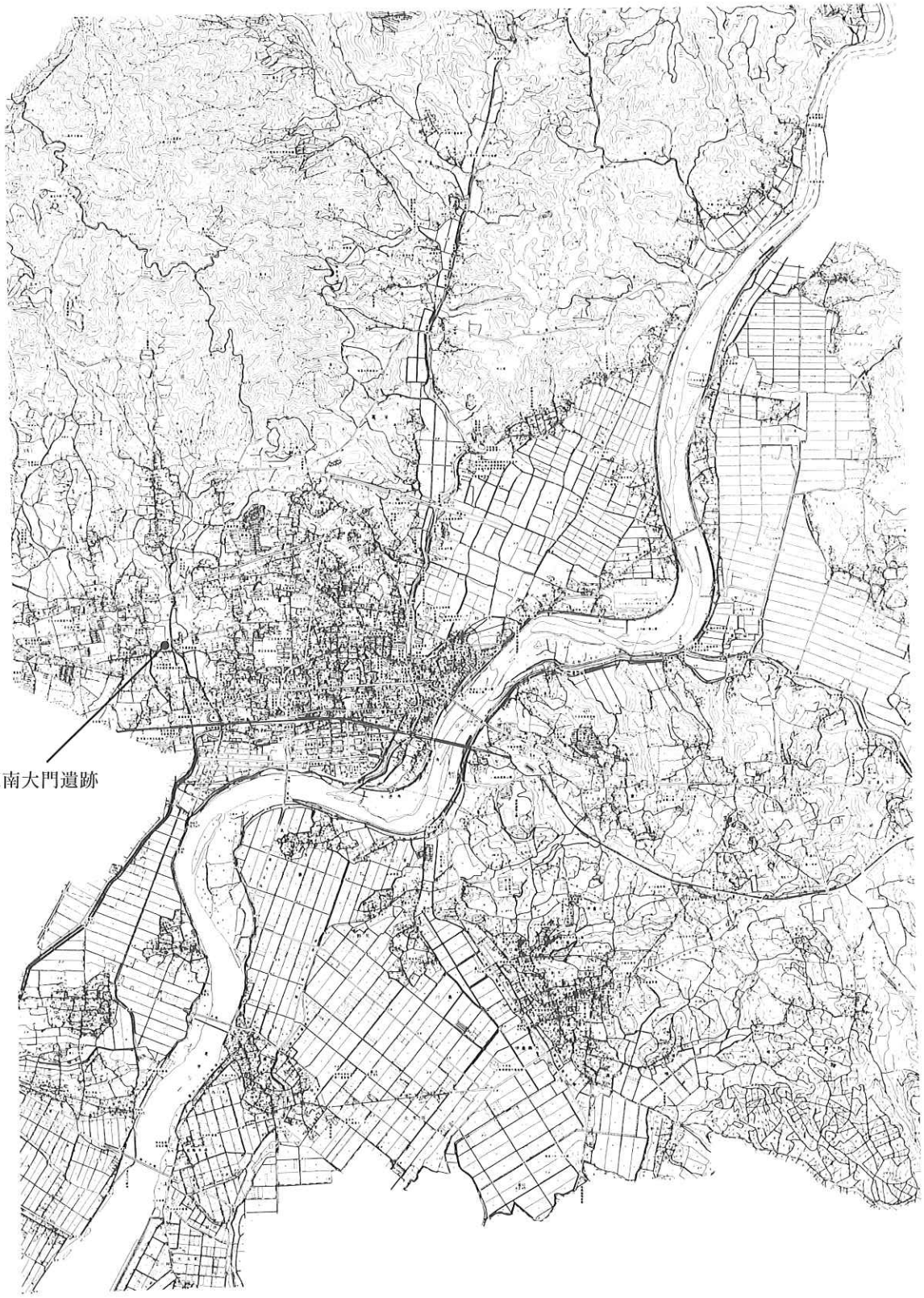
玉名市においては、平成３年度に市営住宅の老朽化に伴う建替基本計画が策定され、それに伴い熊本県玉名市築地２１１０番地に所在する市営住宅南大門団地についても建替が行われることとなった。

しかし、当地は東南大門遺跡の範囲内であることから、平成５年度に玉名市役所監理課と協議を行い、建物解体後埋蔵文化財の確認調査を行うこととなった。その後平成６年４月２５・２６日に造成対象となる４，９４８㎡について確認調査を行い、うち２，８００㎡について本格的な発掘調査が必要であるとの結論に達した。この結果に基づき、平成６年１０月１１日から平成７年３月１０日にかけて発掘調査を行った。

II　調査組織

事業主体　玉名市役所監理課
調査主体　玉名市教育委員会
調査責任者　教育長　生森基哉（調査時）
　　〃　　三次昭也（整理・報告書作成時）
調査総括　社会教育課長　村上好一（調査時）
　　〃　　隈部了裕（整理・報告書作成時）
　　〃　　西川待義（　　〃　　）
調査担当　主事　江原浩司（確認調査・本調査・整理担当）
　　技師　田中康雄（整理・報告書作成担当）

現場作業員
木村剛、清田耕一、草野貴美代、楠田一記、五野冨美子、坂本政春、末永崇、高岡博子、高田ミサオ、田添良子、田口徳松、谷口小夜子、谷口義孝、築森カス子、西由紀子、西浦道男、西川美智子、西口辰夫、西依元三郎、平島千代子、丸山静代、森下等、山西二夫　敬称略
整理作業員
堀内貴久子、坂崎郷子、五野冨美子、新居みどり、山口聡絵、田中晶子、西川さゆり、平野輝代、平本静子、早川イツエ、中川藍、寺本要、近江左江　敬称略
調査協力者
三島格、田邊哲夫、小田富士雄、甲元眞之、柳沢一男、西健一郎、村上恭通、蒲原宏行、杉井　健、松本健郎、高木正文、高谷和生、勢田廣行、髙木恭二、中原幹彦、中村幸史郎、坂本重義、益永浩仁、荒木純治、宮崎敬士、竹田宏司、岩谷史記、敬称略



Ｆｉｇ．１　東南大門遺跡位置図　　S=1／50,000

第２章 地理的・歴史的環境

Ⅰ　地理的環境・歴史的環境

東南大門遺跡が所在する玉名市は、熊本県の北部、菊池川の下流域に位置する。市の中央部を菊池川が南に向かって貫流し、有明海に注いでいる。菊池川の周辺部には玉名平野が拡がり、その北部は筒ヶ岳（標高５０１ｍ）を主峰とする小岱山地、丘陵地、及びこれに続く台地・段丘と接している。また、平野の東部では木葉川を境として北側で国見山（標高３８３ｍ、鹿本郡鹿央町）を主峰とする国見山地の丘陵及びその南端部に位置する木葉山（標高２８６ｍ）と接し、南側で金峰火山群の熊野岳（二ノ岳　６８５ｍ）、三ノ岳（６８１ｍ）を主峰とする金峰山地とこれに続く丘陵性台地に接している。

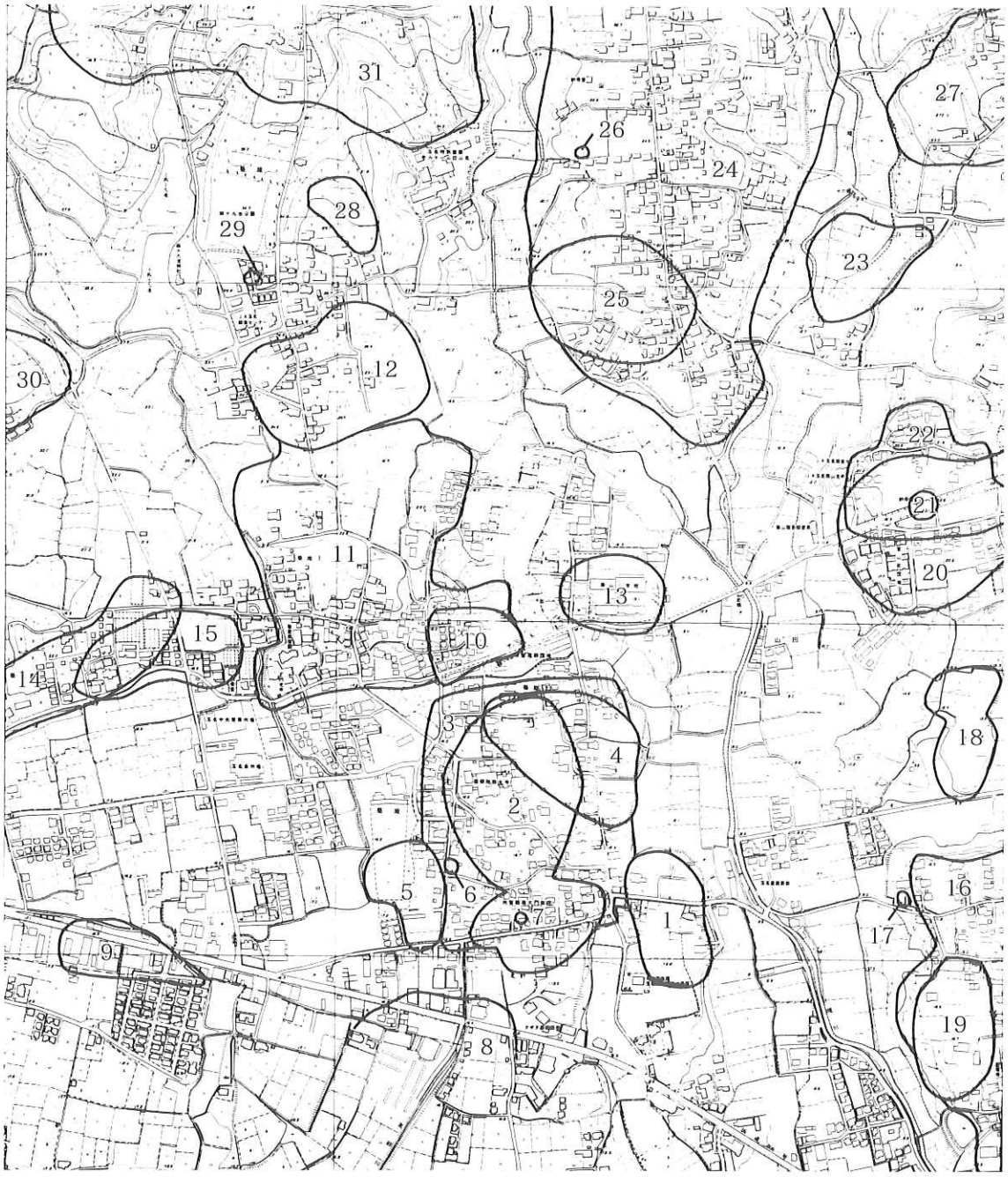
東南大門遺跡は、玉名市の西部、小岱山の南東部を源流とする境川の右岸に面した標高１５～１６ｍの段丘突出部の南東端部に位置する。段丘の東側は境川の開析よる谷底平野が拡がっており、段丘との比高差は約４ｍ程度である。

当段丘上には、弥生時代から中世にかけての遺跡が密集している。東南大門遺跡の北西側に所在する南大門遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡、土坑が確認されており、当段丘上に弥生時代の集落が所在していたことが窺われ、その他に箱式石棺、竪穴式石室墳、土坑群、製鉄遺構が確認されている。また現況で部分的に土塁状遺構が残存しており、蓮華院誕生寺境内で掘建柱建物跡が確認されていることから、当地が鎌倉時代中期に建立された浄光寺の寺域であると考えられている。

段丘東側、境川両岸の谷底平野を挟んだ対岸の台地上には、平嶋遺跡、高岡原遺跡等の弥生時代後期の集落跡が確認されており、また古墳時代の高岡古墳、中世の高岡城跡が遺跡地図に掲載されている。北側は小岱山麓から南に拡がる丘陵からの緩斜面地で、弥生時代の甕棺群が確認されている古閑遺跡、弥生時代の遺物の散布がみられる築地東遺跡、古墳時代の土師器、須恵器が確認されている八段遺跡、縄文時代から中世にかけての遺物が確認されている狐ん路遺跡、平畑遺跡が所在する。

参考文献

「玉名市史　資料編３　自然・民俗」　玉名市史編纂委員会　１９９３
玉名市歴史資料集成　第６集　「菊池川下流域遺跡詳細分布調査事業報告書（１）」
玉名市教育委員会　１９８９
田添夏喜「浄光寺跡寺域確認調査」４．浄光寺跡周辺の遺跡各説　玉名市教育委員会　１９８９



1　東南大門遺跡
2　南大門遺跡
3　浄光寺蓮華院境内遺跡
4　蓮華遺跡
5　平町遺跡
6　小路遺跡
7　南大門窯跡
8　築地市場遺跡
9　今見堂遺跡
１０　築地東遺跡
１１　八段遺跡
１２　築地那木野遺跡
１３　古閑遺跡
１４　狐ん路遺跡
１５　平畑遺跡
１６　春出遺跡
１７　春日出山伏塚
１８　ホカンヤカタ遺跡
１９　田島遺跡
２０　高岡原遺跡
２１　高岡古墳
２２　高岡城跡
２３　山田中島遺跡
２４　山田神社門前遺跡
２５　五郎丸遺跡
２６　山田下馬場古墳
２７　山田松尾平遺跡
２８　四十九遺跡
２９　四十九古墳
３０　西の山古墳群
３１　西田遺跡

Ｆｉｇ．２　東南大門遺跡周辺遺跡分布図　　S＝1／10,000

第３章　調　査

Ⅰ　確認調査

平成６年４月２５日から２６日にかけて、確認調査を行った。造成予定地に２２ヶ所の試掘坑を設定し、表土を重機で除去し、それ以下を重機および人力で掘り下げた。その結果１３ヶ所の試掘坑で遺構遺物が検出された。

以上の結果から、埋蔵文化財が確認された範囲では、工事に先だって発掘調査が必要との判断がなされた。

Ⅱ　調査の方法

確認調査の結果から、発掘調査が必要であると判断された範囲について、調査区を２ヶ所設定し、敷地中央部から西側を調査Ⅰ区、東側を調査Ⅱ区とした。

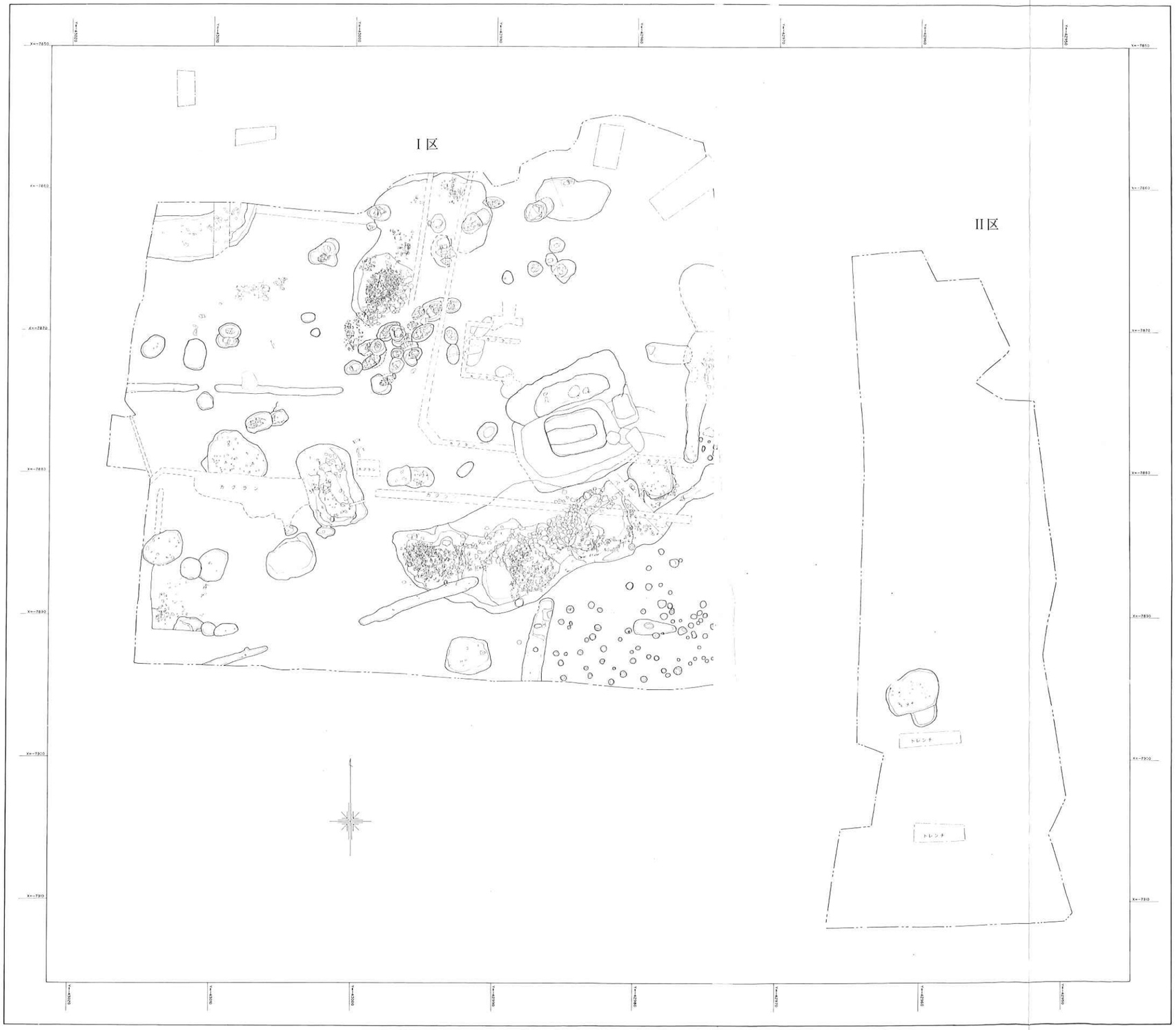
調査区内は、旧市営住宅建設の際に大きく地形の改変を受けており、遺物包含層は残存していない。確認した層位は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土層
Ⅱ層　黒褐色土層　堅く引き締まっており、土器細片を含む。住宅建設の際の整地層と思われる。
Ⅲ層　褐灰色土層　やや締まり、あまり粘性を有しない。上面で遺構を検出。

このうち調査では表土のみを重機で掘削した。グリッドの設定は、国土座標に基づき１０ｍ単位のグリッドを設定した。

表土剥ぎ後、Ⅱ層上面より人力による掘削を行った。当初Ⅱ層を遺物包含層と考えていたようであるが、遺物が土器細片のみであり、土が非常に堅く引き締まっていることから、宅地造成の際の整地層であると考えられる。Ⅱ層除去後、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。調査区全体がⅢ層上面まで削平を受けていることから、時期に関係なく遺構はすべてⅢ層上面で確認された。

遺構の掘り下げ後、甕棺墓は１／１０スケール、その他の遺構は１／２０スケールで実測を行った。調査時の写真撮影については、３５㎜のリバーサルおよびモノクロフィルムにより撮影を行った。



Ｆｉｇ．３　東南大門遺跡遺構配置図（全体）　S=1／300

Ｆｉｇ．４　調査Ｉ区遺構配置図　　S=1／150

II　遺構・遺物

I　弥生時代中期

遺構

（1）甕棺墓

この時期の遺構は、４２基の甕棺墓のみである。調査区の中央部から北側にかけて分布しているが、中央部やや北側に１９基が集中しており、それを取り囲むように２～５基程度のまとまりが7箇所でみられる。

それぞれの集中部では、各遺構が複雑に切り合っており、後世の遺構により部分的に破壊されているものもある。また従来所在していた市営住宅建設の際に大部分の墓壙及び甕棺が削平を受けている状況である。

甕棺の構造としては、大部分が合口棺であるが、単棺も数例みられ、単棺については大形棺及び壺棺である。しかし、削平の影響を受けていることから、合口であった可能性も否定できない。

詳しい内容については、以下遺構番号に従って示す。

Ｋ－０１甕棺墓（Ｆｉｇ５）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の形状は上半部が削平を受けているため不明である。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.１９ｍ、短軸１.０ｍ、深さ０.７７ｍを測る。鉢（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－５３°－Ｗ、埋設角度は２８°である。

Ｋ－０２甕棺墓（Ｆｉｇ５）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の形状は大部分が削平を受けているため不明である。墓壙残存部で長軸１.０ｍ、短軸１.０３ｍ、深さ０.６１ｍを測る。鉢（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－７６°－Ｅ、埋設角度は２０°である。

Ｋ－０３甕棺墓（Ｆｉｇ５）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の上半部及び上棺の底部が多少削平を受けている。墓壙残存部から、平面形状は円形を呈するものと思われ、長軸１.５３ｍ、短軸１.４９ｍ、深さ０.７５ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で主軸方位はＮ－１２３°－Ｗ、埋設角度は２２°である。

Ｋ－０４甕棺墓（Ｆｉｇ５）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙及び上・下棺の大部分が削平を受けている。Ｋ－０６，２７、２８甕棺墓の墓壙を切っており、これらより新しいものと思われる。墓壙残存部から平面形状は円形を呈するものと思われ、長軸１.１６ｍ、短軸１.１６ｍ、深さ０.４３ｍを測る。上棺が鉢の合口棺であるが、下棺は残存状況が悪く器種は不明である。主軸方位はＮ－４°－Ｗ、埋設角度は不明である。

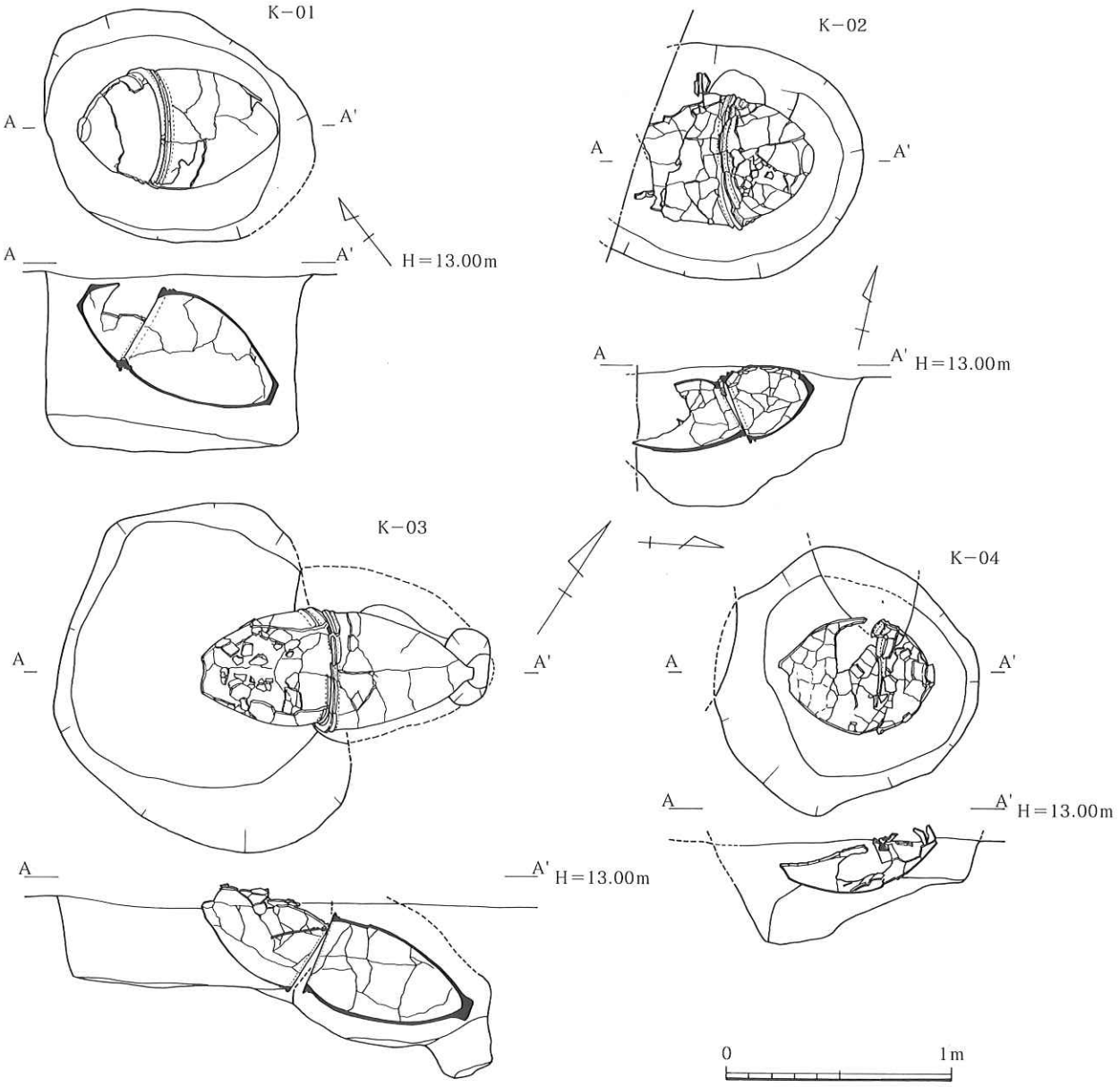


Fig. 5　K−01・02・03・04甕棺墓

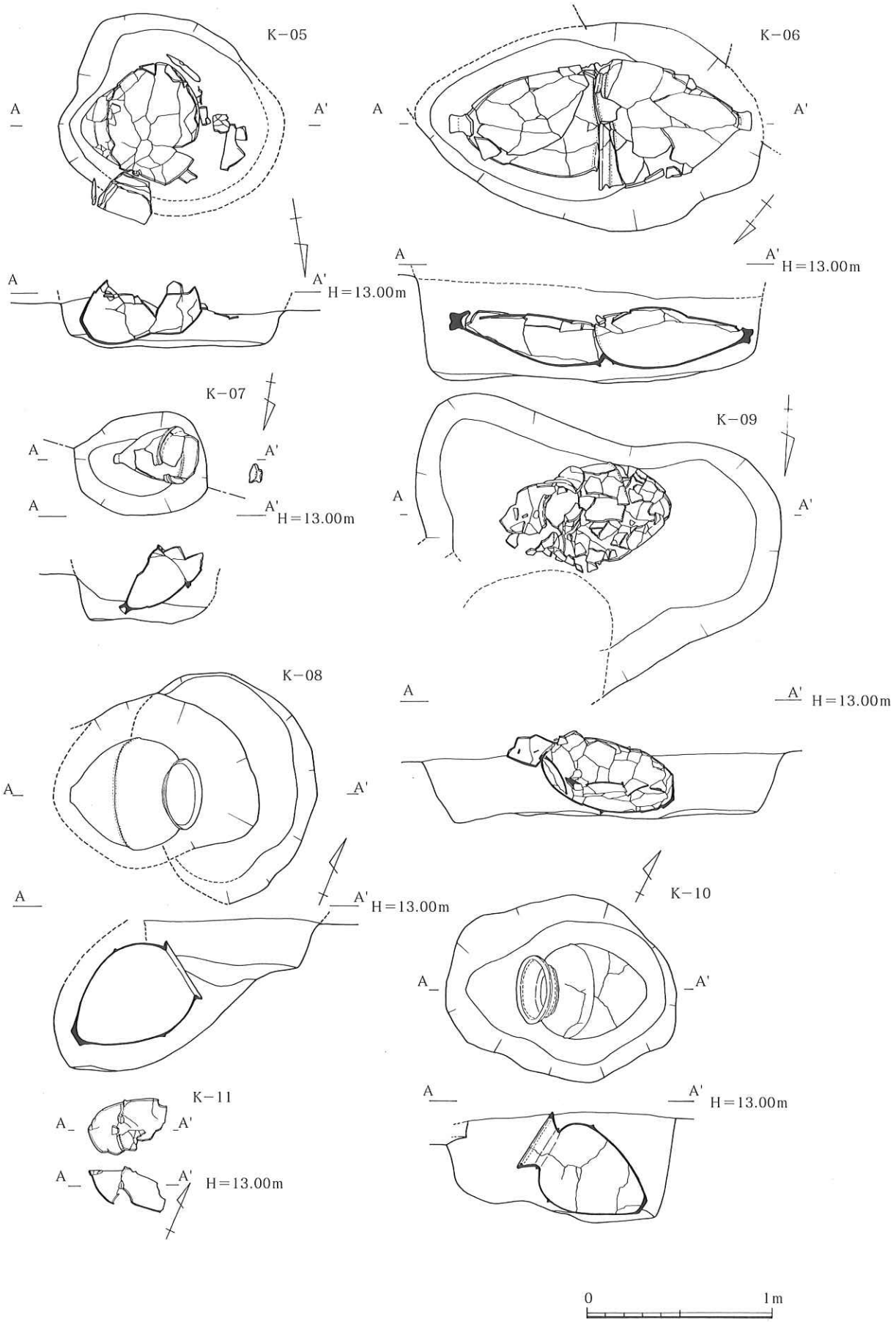


Fig. 6 K−05・06・07・08・09・10・11甕棺墓

Ｋ－０５甕棺墓（Ｆｉｇ６）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙及び上・下棺の大部分が削平を受けている。Ｋ－０６、３７甕棺墓の墓壙を切っており、これらより新しいものと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸１.２３ｍ、短軸１.０６ｍ、深さ０.２２ｍを測る。鉢（上）と壺（下）による合口棺であるが、下棺は、口縁部から肩部にかけて意図的に破壊してあるものと思われる。また、墓壙内及び墓壙際より鉄剣が２点出土しているが、削平が激しく、現位置を保っているかは不明である。主軸方位はＮ－８１°－Ｗ、埋設角度は不明である。

Ｋ－０６甕棺墓（Ｆｉｇ６）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙上半部がＫ－０４、０５甕棺墓の墓壙により切られていることから両者より古いと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.８９ｍ、短軸１.１２ｍ、深さ０.５６ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方向はＮ－１２９°－Ｗ、埋設角度は１９°である。

Ｋ－０７甕棺墓（Ｆｉｇ６）

調査区北側際に位置する。墓壙上半部及び上棺の大部分が削平を受けている。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸０.７１ｍ、短軸０.５３ｍ、深さ２.７ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－８１°－Ｅ、埋設角度は４１°である。

Ｋ－０８甕棺墓（Ｆｉｇ６）

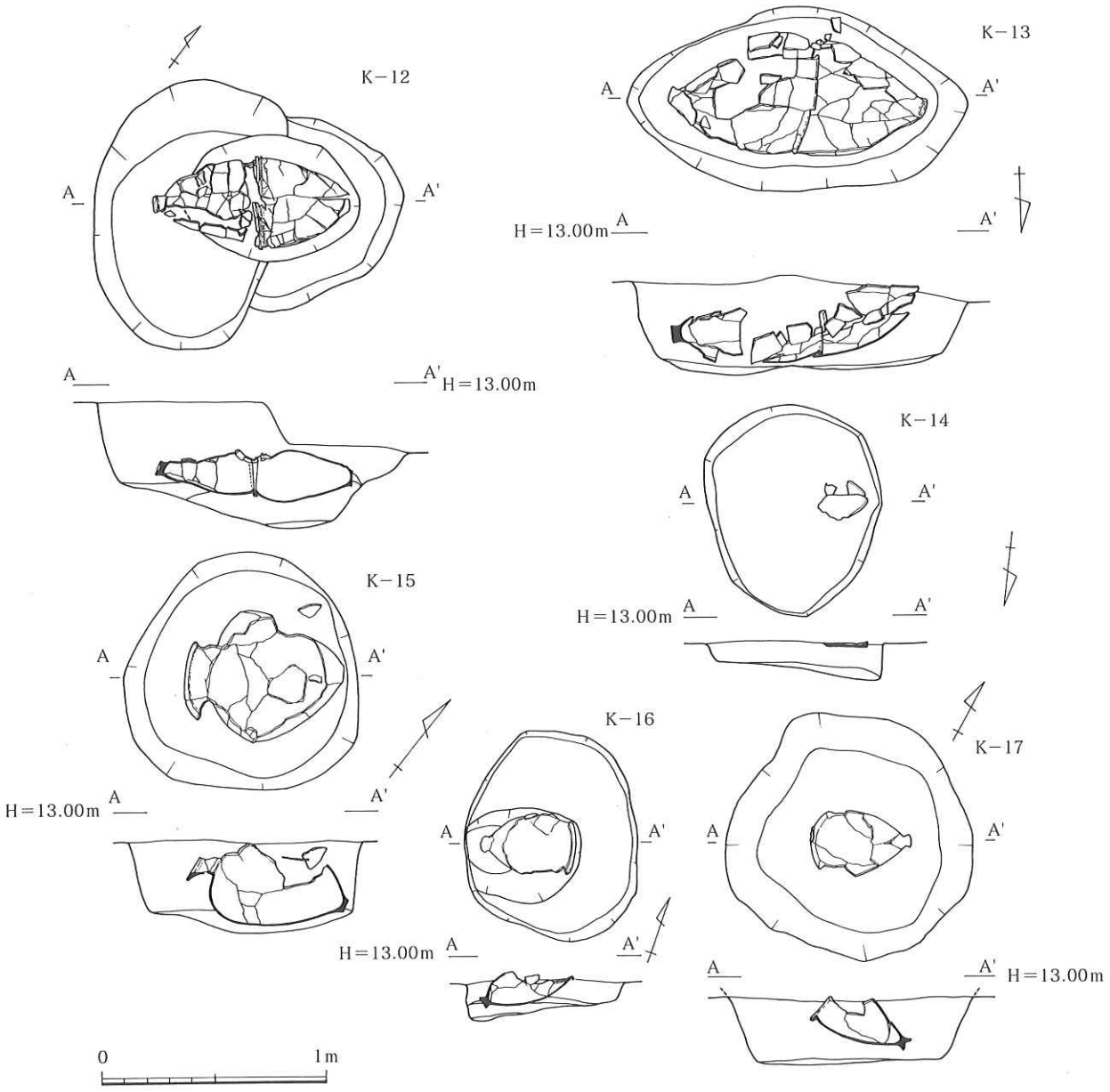
調査区北側やや西よりに位置する。墓壙上半部が削平を受けている。Ｋ－０９甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸１.２４ｍ、短軸０.９６ｍ、深さ０.８２ｍを測る。甕１基が据えられているが、口縁部周辺に土器細片が多数確認されており、合口棺であった可能性も考えられる。主軸方位はＮ－６８°－Ｅ、埋設角度は３３°である。甕館内より一部人骨片が確認されたが、残存状況が悪く部位は特定できなかった。

Ｋ－０９甕棺墓（Ｆｉｇ６）

調査区北側やや西よりに位置する。墓壙上半部及び上棺の大部分が削平を受けており、下棺もその影響を受けている。Ｋ－０８甕棺墓の墓壙に切られておりこれより古いと思われる。墓壙残存部の形状は、隅丸の長方形を呈し、長軸１.９８ｍ、短軸１.１８ｍ、深さ０.３２ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－８７°－Ｅ、埋設角度は不明である。

Ｋ－１０甕棺墓（Ｆｉｇ６）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙上部が多少削平されているものと思われる。Ｋ－２８甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙形状は楕円形を呈し、長軸１.２５ｍ、短軸１.０ｍ、深さ０.５９ｍを測る。その残存状況から壺による単棺と思われる。主軸方位はＮ－１１６°－Ｗ、埋設角度は３２°である。



Ｆｉｇ．７　Ｋ−１２・１３・１４・１５・１６・１７甕棺墓

Ｋ−１１甕棺墓（Ｆｉｇ６）

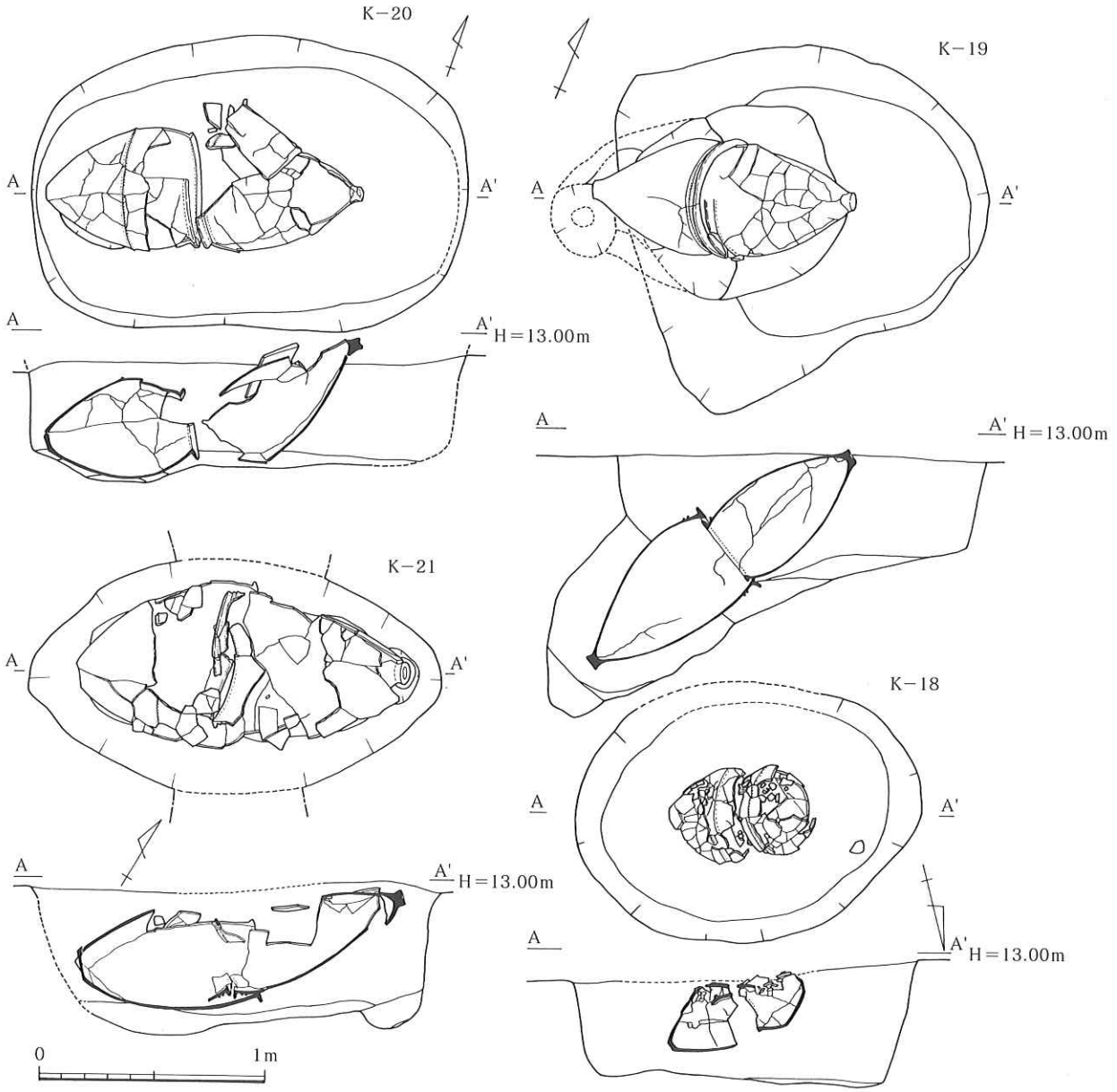
調査区中央部やや北側の集中部に位置する。削平が激しく墓壙は確認できなかった。また本体についても、上、下棺の一部のみしか確認されていない。残存状況から合口棺と思われる。

Ｋ−１２甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。Ｋ−４０甕棺墓の墓壙を切っており、これより新しいと思われる。墓壙形状は不定型な楕円形を呈し、長軸１.４ｍ、短軸０.９５ｍ、深さ０.５４ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ−１２６°−Ｗ、埋設角度は３°である。

Ｋ−１３甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区北側際やや東よりに位置する。墓壙及び甕棺上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.５３ｍ、短軸０.８ｍ、深さ０.４１ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ−８８°−Ｗ、埋設角度は５°である。



Ｆｉｇ．８　Ｋ−１８・１９・２０・２１甕棺墓

Ｋ−１４甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けている。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸０.９３ｍ、短軸０.８ｍ、深さ０.１６ｍを測る。埋設形態及び棺の器種は不明である。

Ｋ−１５甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び甕棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸１.０６ｍ、短軸１.０４ｍ、深さ０.４ｍを測る。上半部を欠失した壺１基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向はＮ−１２９°−Ｗ、埋設角度は２６°である。

K－１６甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けている。Ｋ－１９甕棺墓の墓壙 を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸０.９３ｍ、短軸０.８７ｍ、深さ０.１７ｍを測る。上半部を欠失した小形甕１基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向はＮ－７１°－Ｅ、埋設角度は２８°である。

K－１７甕棺墓（Ｆｉｇ７）

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けている。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸１.１２ｍ、短軸１.０６ｍ、深さ０.２８ｍを測る。上半部を欠失した小形甕１基が据えられているが、遺構の削平状況から埋設形態は不明である。主軸方向はＮ－１１９°－Ｗ、埋設角度は３２°である。

K－１８甕棺墓（Ｆｉｇ８）

調査区西側やや北よりに位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。Ｋ－３１甕棺墓の墓壙を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.５３ｍ、短軸１.１４ｍ、深さ０.５ｍを測る。小形の甕（上）と口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺（下）による合口棺である。主軸方向はＮ－７５°－Ｗ、埋設角度は２６°である。

K－１９甕棺墓（Ｆｉｇ８）

調査区北側やや東よりに位置する。墓壙の上部を多少削平されている。墓壙残存部の形状は、隅丸方形ぎみの円形を呈し、その西壁からさらに横穴を掘り込んでいる。長軸１.６５ｍ、短軸１.４３ｍ、深さ１.１４ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－６８°－Ｅ、埋設角度は３９°である。

K－２０甕棺墓（Ｆｉｇ８）

調査区西側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。Ｋ－３０甕棺墓の墓壙を切っており、これより新しい。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.９６ｍ、短軸１.２８ｍ、深さ０.５３ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－７１°－Ｅ、埋設角度は１７°である。

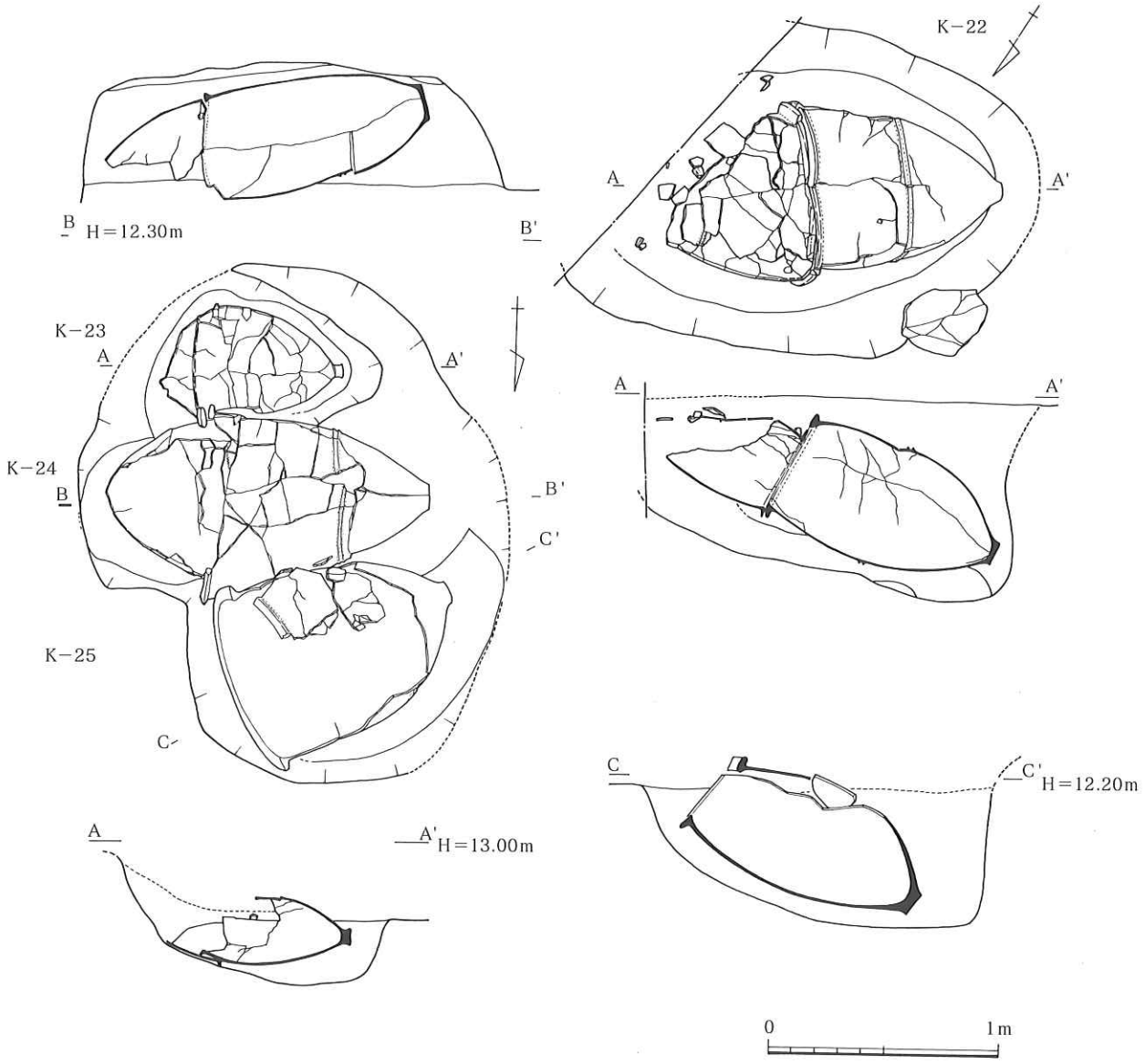
K－２１甕棺墓（Ｆｉｇ８）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。Ｋ－３８甕棺墓の墓壙を切っており、これより新しい。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.８５ｍ、短軸０.９２ｍ、深さ０.６１ｍを測る。甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－６０°－Ｅ、埋設角度は２２°である。

K－２２甕棺墓（Ｆｉｇ９）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の東側及び上半部、棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.７ｍ、短軸１.４１ｍ、深さ０.８６ｍを測る。

甕（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方向はＮ－５７°－Ｅ、埋設角度は２３°である。



Ｆｉｇ．９　Ｋ−２２・２３・２４・２５甕棺墓

Ｋ−２３・２４・２５甕棺墓（Ｆｉｇ９）

調査区北側中央部に位置する。Ｋ−２３・２４・２５が密接して所在するが、墓壙及び棺上半部が削平を受けているため、切り合いが確認できず、同一墓壙内に所在するような状況となっている。このため、三者の新旧関係は不明である。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸２.２３ｍ、短軸１.８５ｍ、深さ０.５８ｍを測る。

Ｋ−２３甕棺墓は、鉢（上）と甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ−８９°−Ｅ、埋設角度は３°である。

Ｋ−２４甕棺墓は、口縁部を打ち欠いた甕もしくは壺（上）と大形甕による合口棺である。主軸方向はＮ−８９°−Ｅ、埋設角度は１３°である。

Ｋ−２５甕棺墓は、大形甕１基が据えられているが、削平の状況から埋設形態は不明である。主軸方位はＮ−５９°−Ｅ、埋設角度は２９°である。

Ｋ－２６甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区北側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。現況で長軸２.２１ｍ、短軸１.１８ｍ、深さ０.６８ｍの不定型な隅丸方形の形状を呈するが、墓壙残存部の状況から、円形の墓壙西壁から横穴を掘り込んだ形状であろうと思われる。斜めに掘り込まれた横穴部と思われる部分に大形甕１基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はＮ－５１°－Ｅ、埋設角度は２７°である。

Ｋ－２７甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。また、Ｋ－２８甕棺墓の墓壙を切っているためこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸１.６１ｍ、短軸０.９５ｍ、深さ０.４９ｍを測る。小形甕（上）と中形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－１０５°－Ｗ、埋設角度は１１°である。

Ｋ－２８甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区中央部やや北側の集中部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。またＫ－０４・２７の墓壙に切られており、これらより古いと思われる。墓壙の形状は、残存状況から楕円形を呈するものと思われる。残存部で長軸２.１８ｍを測る。口縁部を打ち欠いた甕もしくは壺（上）と大形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－５３°－Ｅ、埋設角度は７°である。甕棺内より一部人骨片が確認されたが、残存状況が悪く部位は特定できなかった。

Ｋ－２９甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区北側中央部に位置する。ＳＤ－０９により墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は、楕円形を呈し、長軸１.２４ｍ、短軸１.１５ｍ、深さ０.７５ｍを測る。甕１基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はＮ－６８°－Ｅ、埋設角度は４９°である。

Ｋ－３０甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区西側中央部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けており、墓壙西側をＫ－２０甕棺墓により切られている。墓壙残存部の形状は隅丸方形を呈し、短軸１.０３ｍ、深さ０.５５ｍを測る。大形甕１基がほぼ水平に据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。

主軸方位はＮ－６６°－Ｅである。棺内より磨製石剣３点及び磨製石剣の先端部２点が出土している。

Ｋ－３１甕棺墓（Ｆｉｇ１０）

調査区西側やや北よりに位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。また、墓壙北側をＫ－１８甕棺墓に切られており、これより古いと思われる。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸１.５６ｍ、短軸１.１４ｍ、深さ０.７３ｍを測る。口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺（上）と口縁部の大部分を意図的に打ち欠いた甕（下）による合口棺である。主軸方位はＮ－９３°－Ｅ、埋設角度は５１°である。

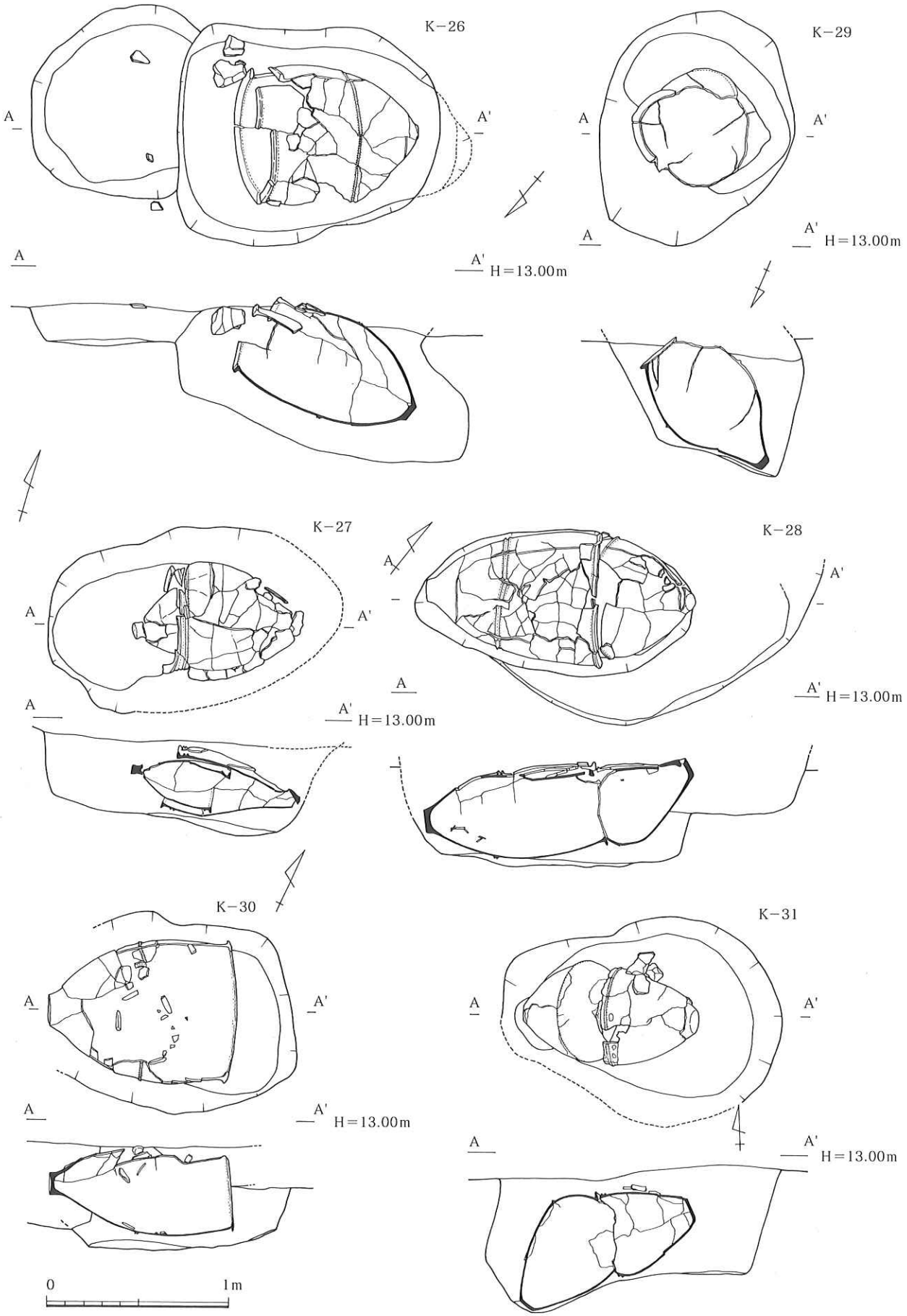


Fig. 10 K−26・27・28・29・30・31甕棺墓

Ｋ－３２甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区北側際に位置する。ＳＤ－０９により墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.６７ｍ、短軸１.１５ｍ、深さ０.７ｍを測る。中形甕１基が据えられているが、遺構の削平状況から単棺であるかは不明である。主軸方位はＮ－９３°－Ｅ、埋設角度は５１°である。

Ｋ－３３甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の大部分が削平を受けているため、墓壙の形状、規模及び棺の埋設形態、器種は不明である。主軸方位、埋設角度も不明である。

Ｋ－３４甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。Ｋ－２２甕棺墓の墓壙を一部切っており、これより新しい思われる。墓壙の形状は楕円形を呈し、長軸１.０ｍ、短軸０.６８ｍ、深さ０.５１ｍを測る。小形甕（上）と小形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－５４°－Ｅ、埋設角度は７°である。

Ｋ－３５甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区の北東部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸２.１８ｍ、短軸１.３ｍ、深さ０.７７ｍを測る。口縁部を意図的に打ち欠いた甕もしくは壺（上）と大形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－４４°－Ｅ、埋設角度は３２°である。

Ｋ－３６甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区の北東部に位置する。墓壙の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸０.９８ｍ、短軸０.６ｍ、深さ０.３１ｍを測る。ほぼ水平に据えられた小形甕（上）と小形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－１１２°－Ｗである。

Ｋ－３７甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。Ｋ－０５、２１甕棺墓により墓壙が切られており、これらより古いと思われる。またＫ－４０甕棺墓とも切り合っているが、新旧関係は不明である。

墓壙の残存状況から形状は楕円形を呈するものと思われ、長軸１.９５ｍ、短軸１.０９ｍ、深さ０.７４ｍを測る。ほぼ水平に据えられた中形甕（上）と中形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ－１０５°－Ｗである。甕館内より磨製石剣１点が出土している。

Ｋ－３８甕棺墓（Ｆｉｇ１１）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。Ｋ－３９甕棺墓により墓壙が切られており、またＫ－４０甕棺墓を切っている。このことから、Ｋ－３９甕棺墓より古く、Ｋ－４０甕棺墓より新しいと思われる。墓壙残存部の形状は円形を呈し、長軸０.８９ｍ、短軸０.８２ｍ、深さ０.４１ｍを測る。小形甕（下）と上甕の一部が残存している。主軸方位はＮ－１１４°－Ｗ、埋設角度は３４°である。

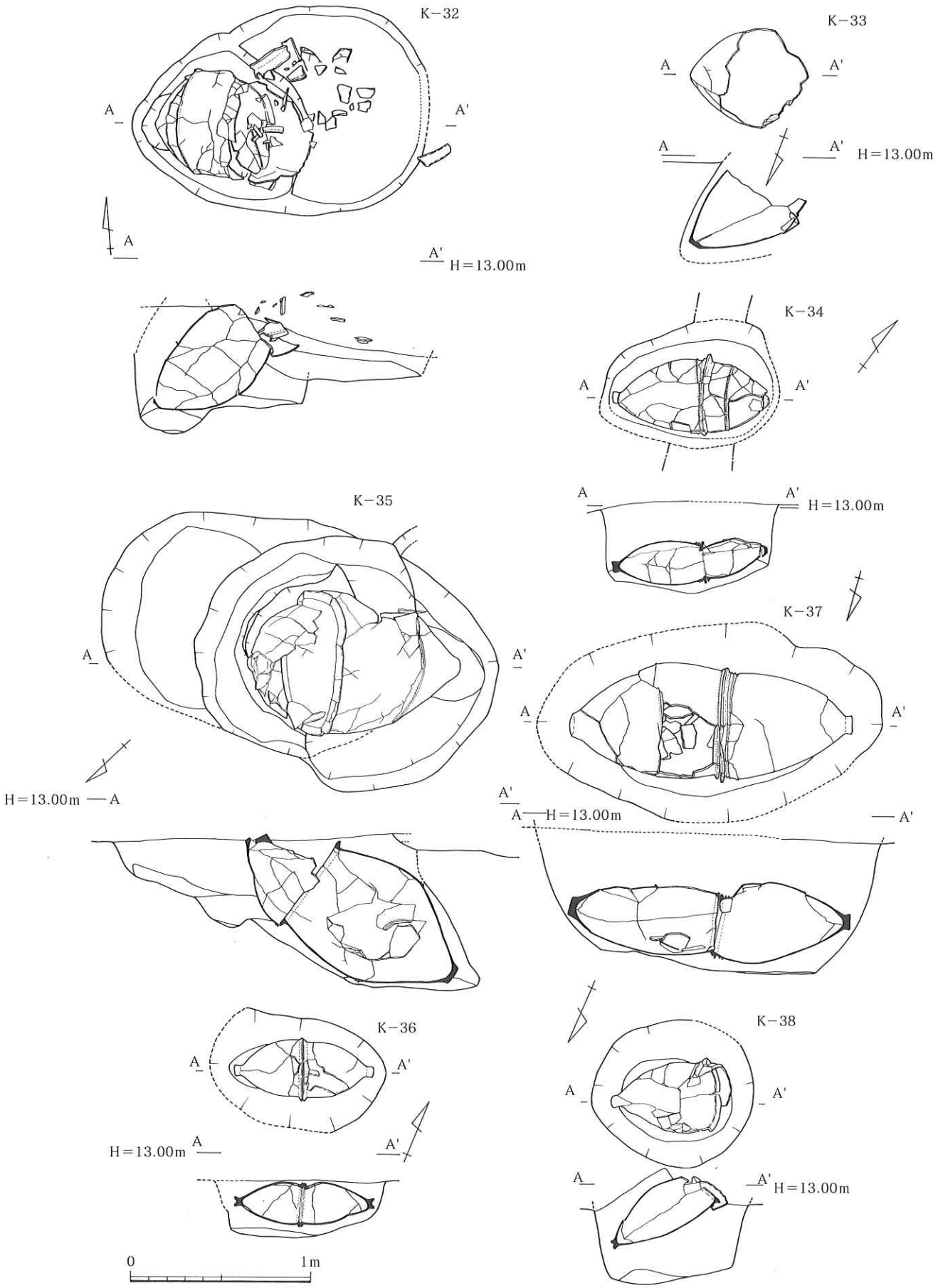
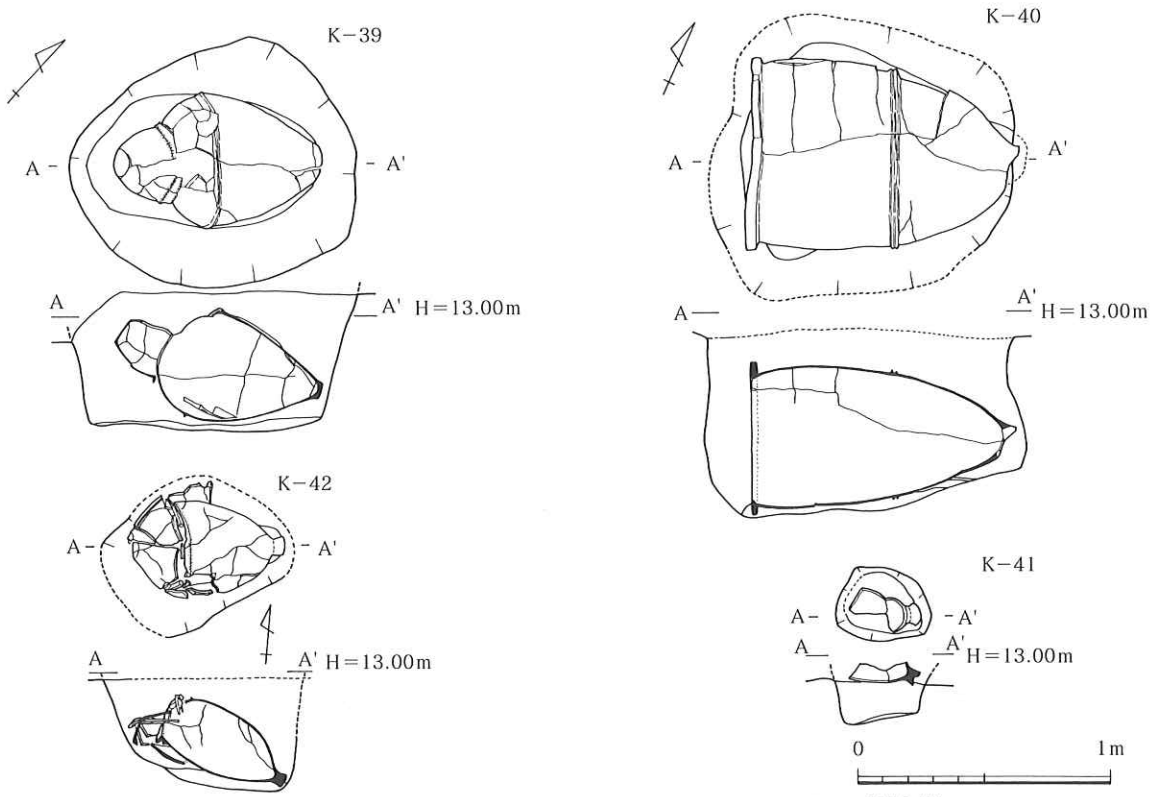


Fig. 11 K−32・33・34・35・36・37・38甕棺墓



Ｆｉｇ．12　Ｋ−３９・４０・４１・４２甕棺墓

Ｋ−３９甕棺墓（Ｆｉｇ１２）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙上部が削平を受けている。また、Ｋ−３８甕棺墓を切っておりこれより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸１.１５ｍ、短軸０.９３ｍ、深さ０.５５ｍを測る。小形鉢（上）と意図的に頸部を打ち欠いた壺（下）による合口棺で、主軸方位はＮ−１３２°−Ｗ、埋設角度は１３°である。

Ｋ−４０甕棺墓（Ｆｉｇ１２）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。Ｋ−１２・２１・３８甕棺墓により墓壙が切られており、これらより古いと思われる。また、Ｋ−３７甕棺墓とも切り合っているが新旧関係は不明である。墓壙残存部の状況から形状は隅丸方形を呈するものと思われ、長軸１.２２ｍ、短軸１.０５ｍ、深さ０.７２ｍを測る。大形甕１基がほぼ水平に据えられており、単棺と思われる。主軸方位はＮ−１１４°−Ｗである。

Ｋ−４１甕棺墓（Ｆｉｇ１２）

調査区北側中央部に位置する。ＳＤ−０９により墓壙及び棺の大部分が削平を受けているが、一部残存している墓壙がＫ−２９甕棺墓を切っており、これより新しいと思われる。墓壙残存部の形状は楕円形を呈し、長軸０.３８ｍ、短軸０.２８ｍ、深さ０.１７ｍを測る。小形甕の底部が一部残存するのみであるため、埋設形態、主軸方位、埋設角度は不明である。

Ｋ−４２甕棺墓（Ｆｉｇ１２）

調査区中央部やや北よりの集中部に位置する。墓壙及び棺の上半部が削平を受けている。墓壙残存部の形状は不定型な楕円形を呈し、長軸０.７８ｍ、短軸０.５６ｍ、深さ０.４５ｍを測る。鉢（上）と小形甕（下）による合口棺で、主軸方位はＮ−９５°−Ｗ，埋設角度は３１°である。

遺物

遺物包含層が消失しているため、弥生時代中期の遺物は、甕棺墓の棺として用いられた甕、壺、鉢、及び甕棺墓内の副葬品のみである。

（1） 甕棺

Ｋ－０１甕棺（上鉢・下甕　Ｆｉｇ１３－１・２）

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁はやや内傾し、断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付し、一部に刻目を有する。調整は摩耗により不明である。

下棺は中形の甕形土器である。底部形状は欠損のため不明である。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かってややすぼまる。台形状の口縁はやや内傾し、内側にわずかに張り出す。口唇部には刻目を施す。また口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付し、これらにも刻目を施す。外面はハケ目の後ナデ、内面はハケ目による調整が施されており、内外面とも部分的に煤が付着している。

Ｋ－０２甕棺（上鉢・下甕　Ｆｉｇ１３－３・４）

上棺は鉢形土器で、底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁は上面がややくぼみ、内側へ多少張り出し、口唇部は丸みを帯びる。口縁直下には断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目による調整が施されている。

下棺は中形の甕形土器で、胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部は上位に最大径を持ち、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は台形状を呈し、上面がややくぼみ、内側へ張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は摩耗により不明である。

Ｋ－０３甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１３－５・６）

上棺は中形の甕形土器で、胴部下位から底部かけて欠損している。胴部は上位に最大径を持ち、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は断面三角形で内傾し内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付する。内面に一部ハケ目が残存しているが、外面は摩耗が激しく不明である。

下棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみでやや厚みがあり裾がわずかに開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。

口縁は上面がややくぼんだ逆Ｌ字状で、内傾し内側に多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後一部ナデ調整を施すが、外面は摩耗により不明である。また内外面とも一部煤が付着している。

Ｋ－０４甕棺（上鉢・下甕　Ｆｉｇ１３－７・８）

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。台形状の口縁は多少内傾し、部分的に上面がわずかにくぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は、胴部中位から口縁にかけて欠損している。平底の底部を持ち、そこから直線的に開く。調整は内外面とも摩耗により不明である。

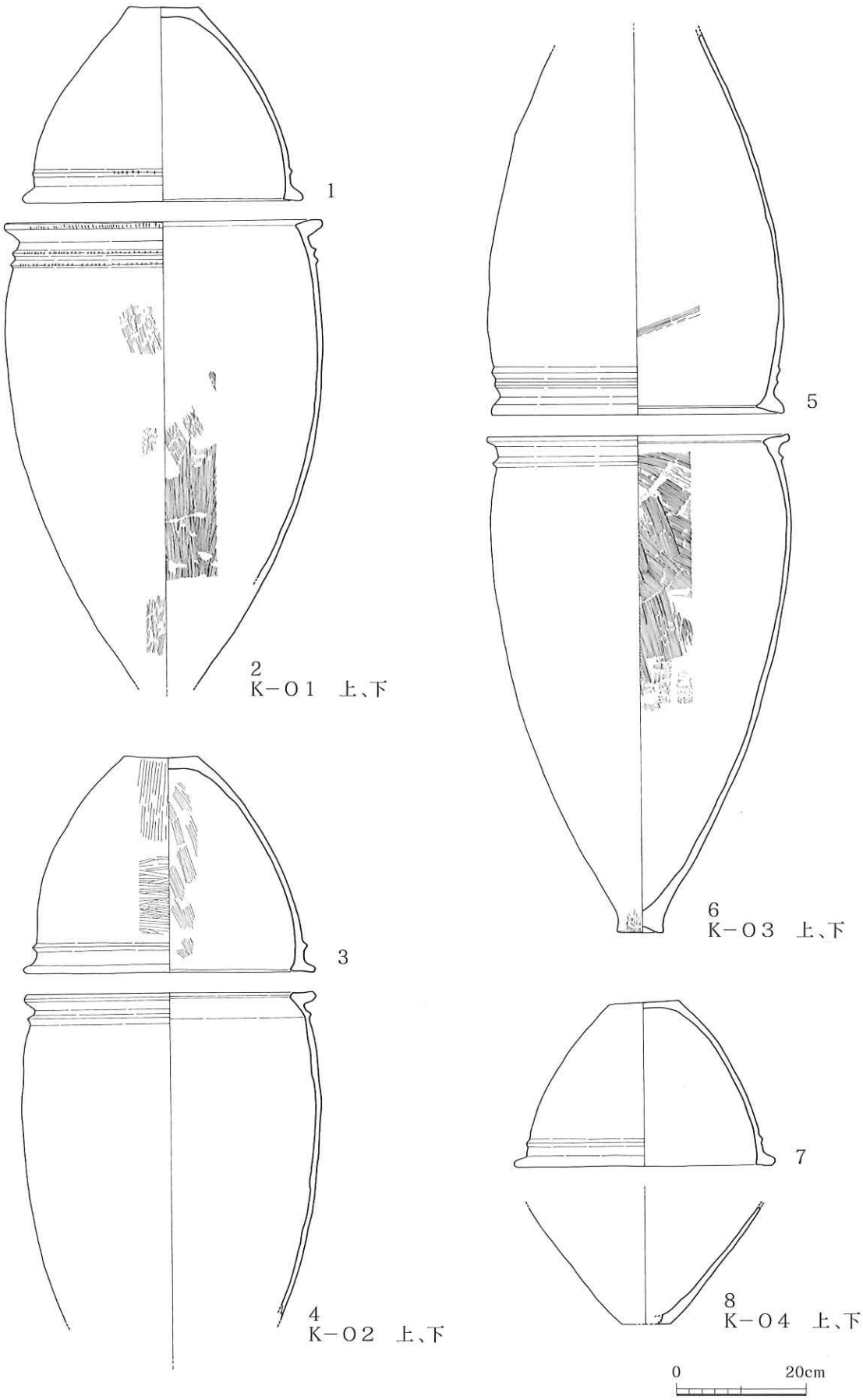


Fig. 13 K−01・02・03・04甕棺

Ｋ－０５甕棺（上鉢・下甕　Ｆｉｇ１４－９・１０）

上棺は鉢形土器で、平底の底部から口縁に向かって、緩やかに内湾しながら開く胴部を持つ。口縁は上面がややくぼみ、口唇部は丸みを帯び、内側に多少張り出す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は胴部上位から口縁にかけて欠損しているため器種は不明である。平底の底部から直線的に開き、胴部上位でもっとも張り出し、そこから口縁に向かって丸みを帯びながらすぼまる。胴部最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整が施されている。

Ｋ－０６甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１４－１１・１２）

上棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってすぼまる。口縁は丸みを帯びた台形状で、内傾し内側へ多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はハケ目調整が施されている。

下棺は中形の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってややすぼまる。丸みを帯びた台形状を呈する口縁は内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ及びハケ目の後ナデ、外面はハケ目による調整を施す。

Ｋ－０７甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１４－１３・１４）

上棺は胴部中位から底部にかけて欠損しているが、おそらく小形の甕形土器と思われる。口縁は扁平で上面がくぼみ外側へ大きく張り出し内側へも張り出す。内外面ともナデ調整を施す。

下棺は小形の甕形土器である。脚台状の底部を有し裾に向かって開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は内側が欠損しているため全体の形状は不明であるが、残存部は扁平で内傾しわずかに外反する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

Ｋ－０８甕棺（Ｆｉｇ１５－１５）

中形の甕形土器である。平底の底部から直線的に開き、胴部中位から上位にかけて丸みを帯び口縁部ですぼまる。口縁はＴ字形で、内傾し上面がややくぼむ。最大径は胴部中位に位置し、刻目を施したやや垂れぎみの台形状の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整を施し、外面には部分的に黒斑が見られる。

Ｋ－０９甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１５－１６・１７）

上棺は小形の甕形土器である。胴部上位から底部にかけて欠損しているため全体の形状は不明であるが、最大径を胴部上位に有し、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は上面がくぼんだ断面三角形を呈し、やや内傾し多少内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともにハケ目の後ナデ調整が施されている。

下棺は甕形土器で、平底の底部から直線的に開き、胴部中位から上位にかけて丸みを帯び、口縁部ですぼまる。口縁は断面三角形を呈し、大きく内傾する。最大径は胴部中位に位置し、刻目を施した断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目、内面はナデによる調整が施されており、外面に一部黒斑や赤彩らしきものが見られる。

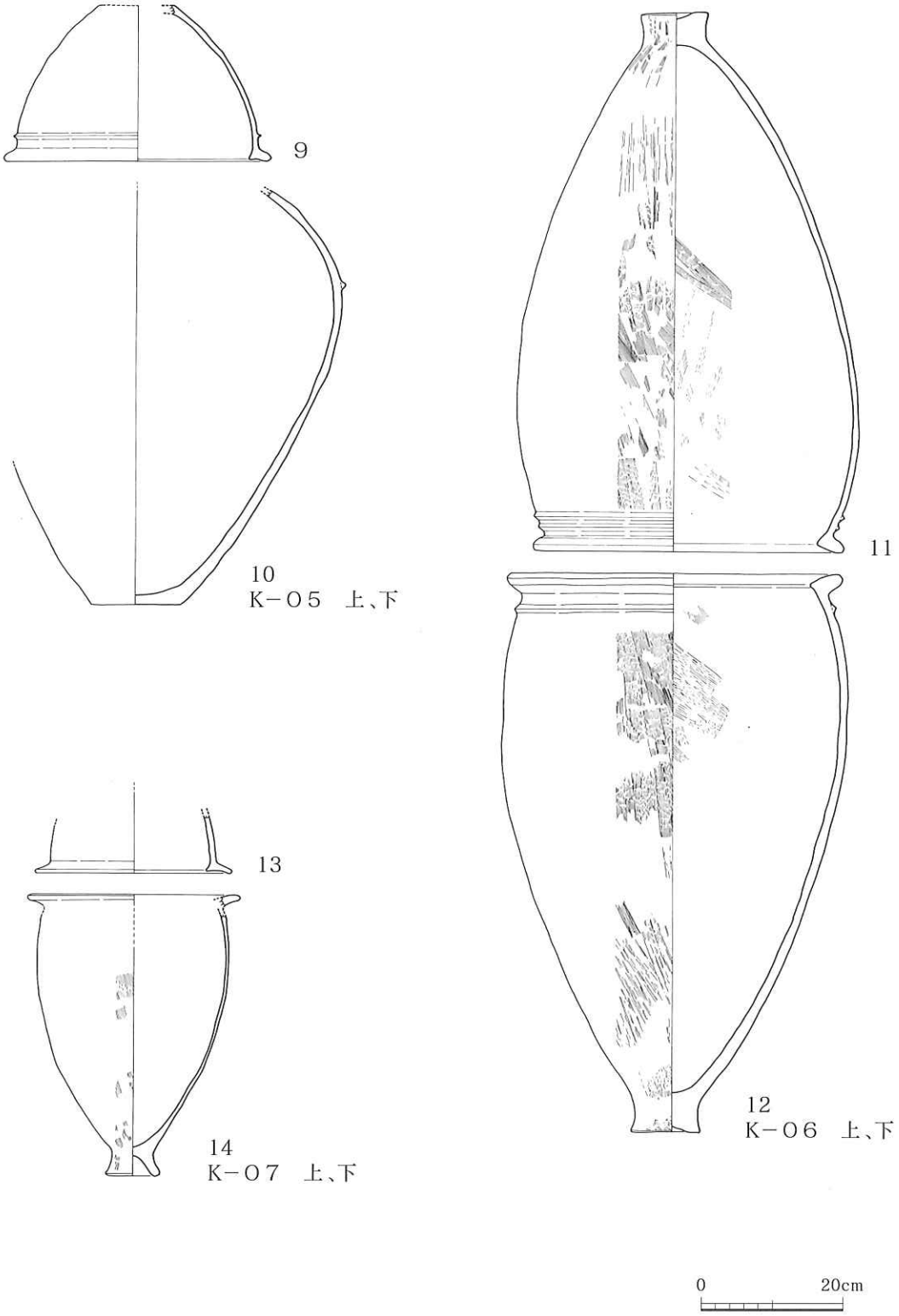


Fig. 14 K−05・06・07甕棺

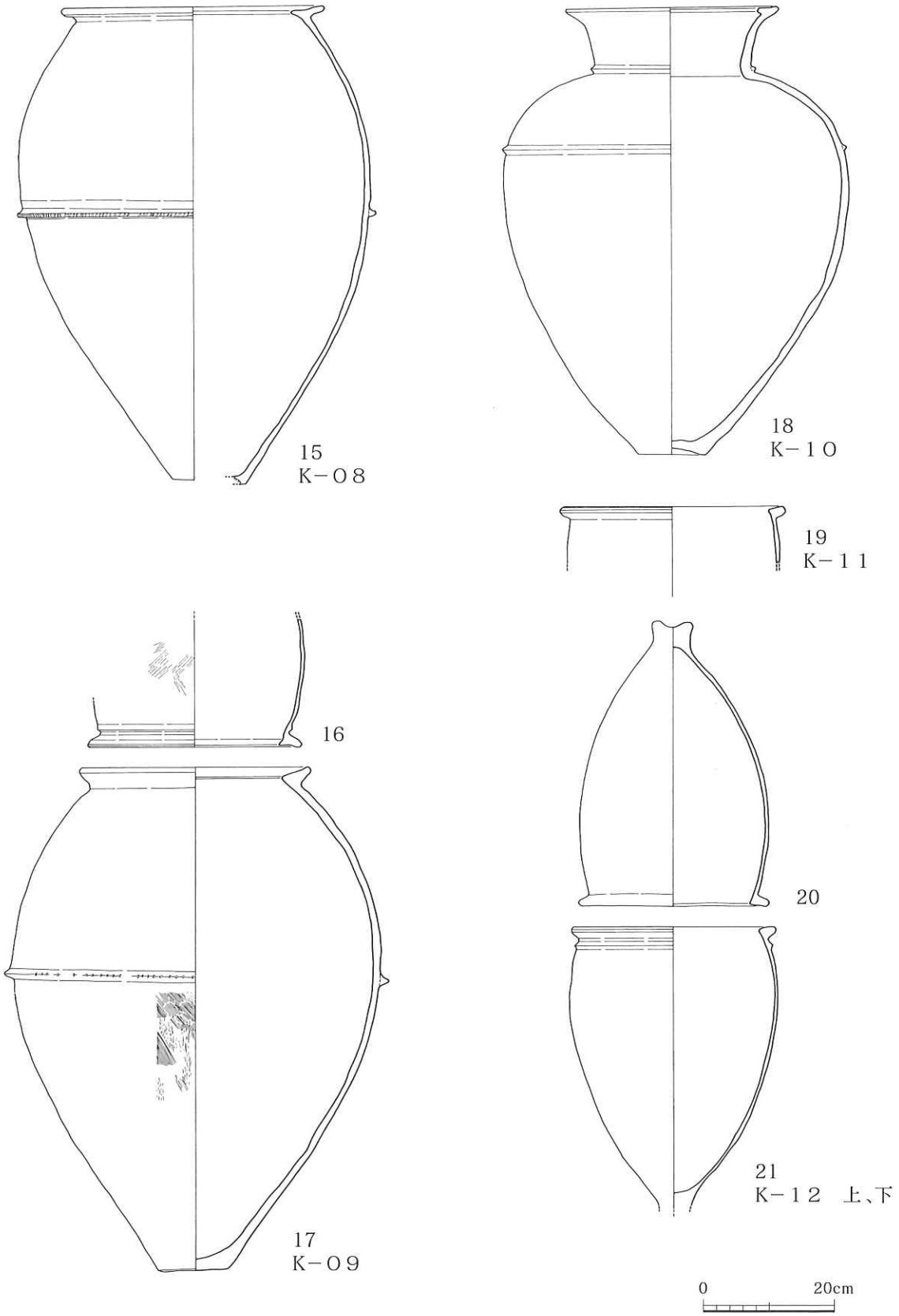


Fig. 15 K−08・09・10・11・12甕棺

Ｋ－１０壺棺（Ｆｉｇ１５－１８）

中型の壺形土器で、やや上げ底ぎみの底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位でもっとも張り出しそこから頸部へ向けすぼまる。頸部からはやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁直下で屈曲し開く。口縁は断面三角形で内側に張り出すいわゆる鋤先形口縁である。胴部上位と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面ともナデによる調整が施されており、外面には部分的に黒斑が見られる。

Ｋ－１１甕棺（Ｆｉｇ１５－１９）

小型の甕形土器と思われるが、胴部中位から底部にかけて欠損しているため全体の形状は不明である。口縁は台形状で、内傾しやや内側に張り出す。調整は内外面とも不明である。

Ｋ－１２甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１５－２０・２１）

上棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底ぎみで厚みがありやや裾が開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かって多少すぼまる。口縁は台形状で、端部が丸みを帯び上面がわずかにくぼむ。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は小型の甕形土器である。最下部を欠損しているが上げ底ぎみの底部を有するものと思われる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径を有しそこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は丸みを帯びた三角形で、やや内傾し内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデ調整を施す。

Ｋ－１３甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１６－２２・２３）

上棺は中型の甕形土器で、底部を欠損している。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって多少すぼまる。口縁は分厚い断面三角形で多少上面がくぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整が施される。

下棺は口縁から胴部中位にかけて欠損しているため、形状は不明であるが、おそらく甕形土器であろうと思われる。底部はやや上底で裾が多少開き、胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。

内外面ともにハケ目の後ナデ調整を施している。

Ｋ－１５壺棺（Ｆｉｇ１６－２４）

中型の壺形土器である。底部は平底でそこからわずかに内湾しながら開く。胴部中位やや上部で最大径となり、そこから内湾しながら頸部に向かってすぼまる。頸部からはやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁直下で大きく開く。口縁は鋤先状口縁でやや外傾する。胴部最大径部と頸部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

Ｋ－１６甕棺（Ｆｉｇ１６－２５）

小型の甕形土器である。底部は脚台状でやや厚みがあり裾が拡がる。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部下位で多少屈曲し外傾ぎみに直線的に立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は断面三角形で上面がわずかにくぼむ。内外面ともナデによる調整を施す。

K－１７甕棺（Ｆｉｇ１６－２６）

小型の甕形土器である。底部は脚台状でやや厚みがあり裾が開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となりそこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は内傾し内側に多少張り出し上面がくぼむ。内外面ともハケ目の後ナデ調整を施す。

K－１８甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１６－２７・２８）

上棺は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部下位からやや内湾しながら開き、胴部中位やや上で最大径となる。そこから口縁に向かって多少内湾しながらすぼまる。口縁は内傾し断面三角形を呈する。胴部の最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗のため不明である。

下棺は胴部上位から口縁にかけて、意図的に打ち欠かれているため器種は不明である。底部は平底でそこから緩やかに内湾しながら開く。胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって屈曲しすぼまる。最大径部には断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗のため不明である。

K－１９甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１７－２９・３０）

上棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かって多少すぼまる。口縁は台形状を呈し、上面がややくぼみ内側に多少張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施し、外面には部分的に黒斑が見られる。

下棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底でやや厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は断面三角形でわずかに内傾する。口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付する。内面はナデ、外面はハケ目による調整を施し、内外面とも部分的に煤状の付着物が見られる。

K－２０甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１７－３１・３２）

上棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位に最大径を有し、そこから口縁に向かって多少すぼまる。口縁は逆Ｌ字状を呈し、やや内傾し上面が多少くぼむ。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。外面はハケ目、内面はハケ目の後ナデによる調整を施し、部分的に煤の付着がみられる。

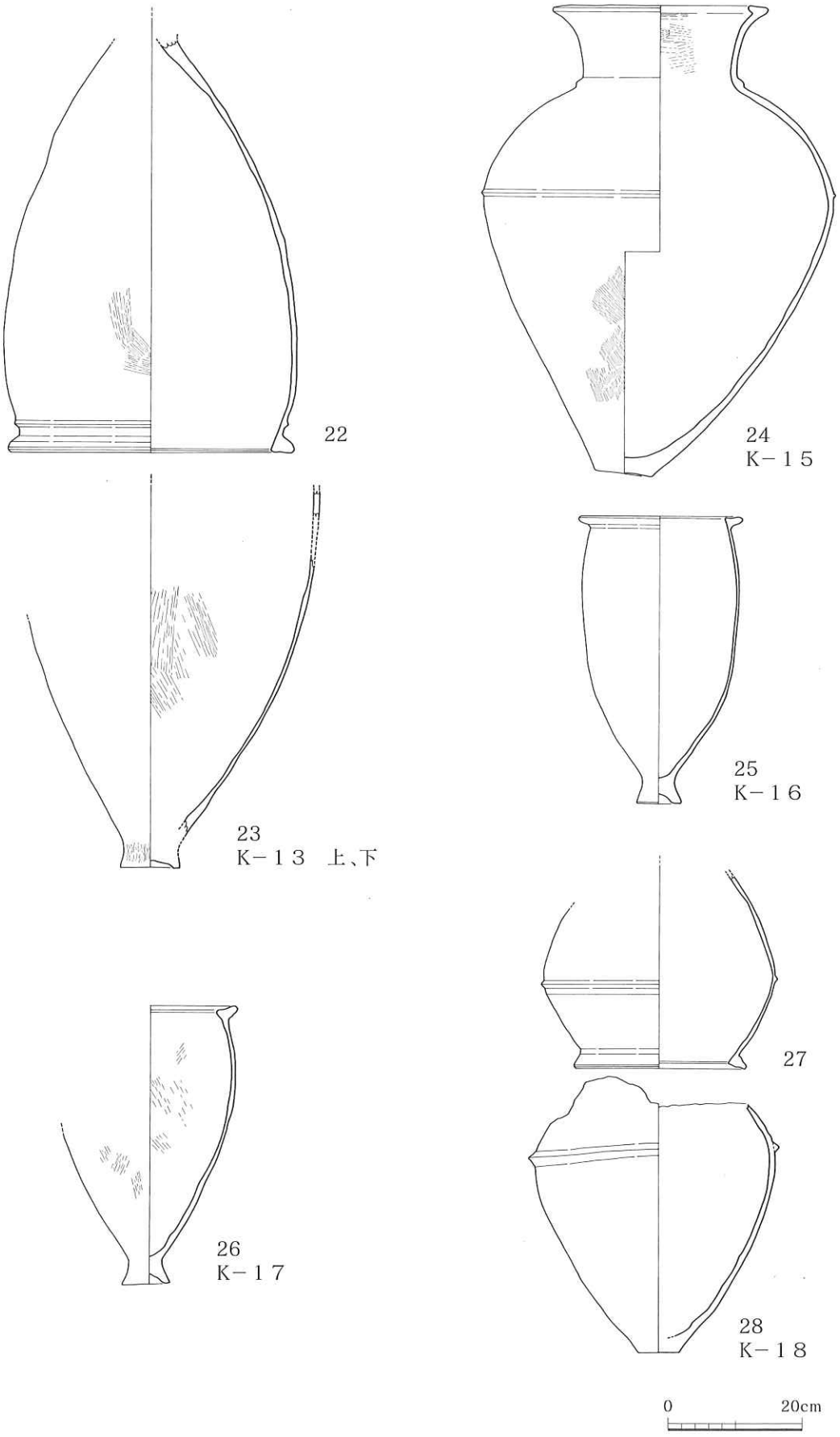
下棺は中型の甕形土器で、平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位やや上部に最大径を有し、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁はくの字状を呈し、内傾し多少内側に張り出す。胴部中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目、外面はハケ目の後ナデによる調整を施し、外面には部分的に黒斑および煤の付着がみられる。

K－２１甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１８－３３・３４）

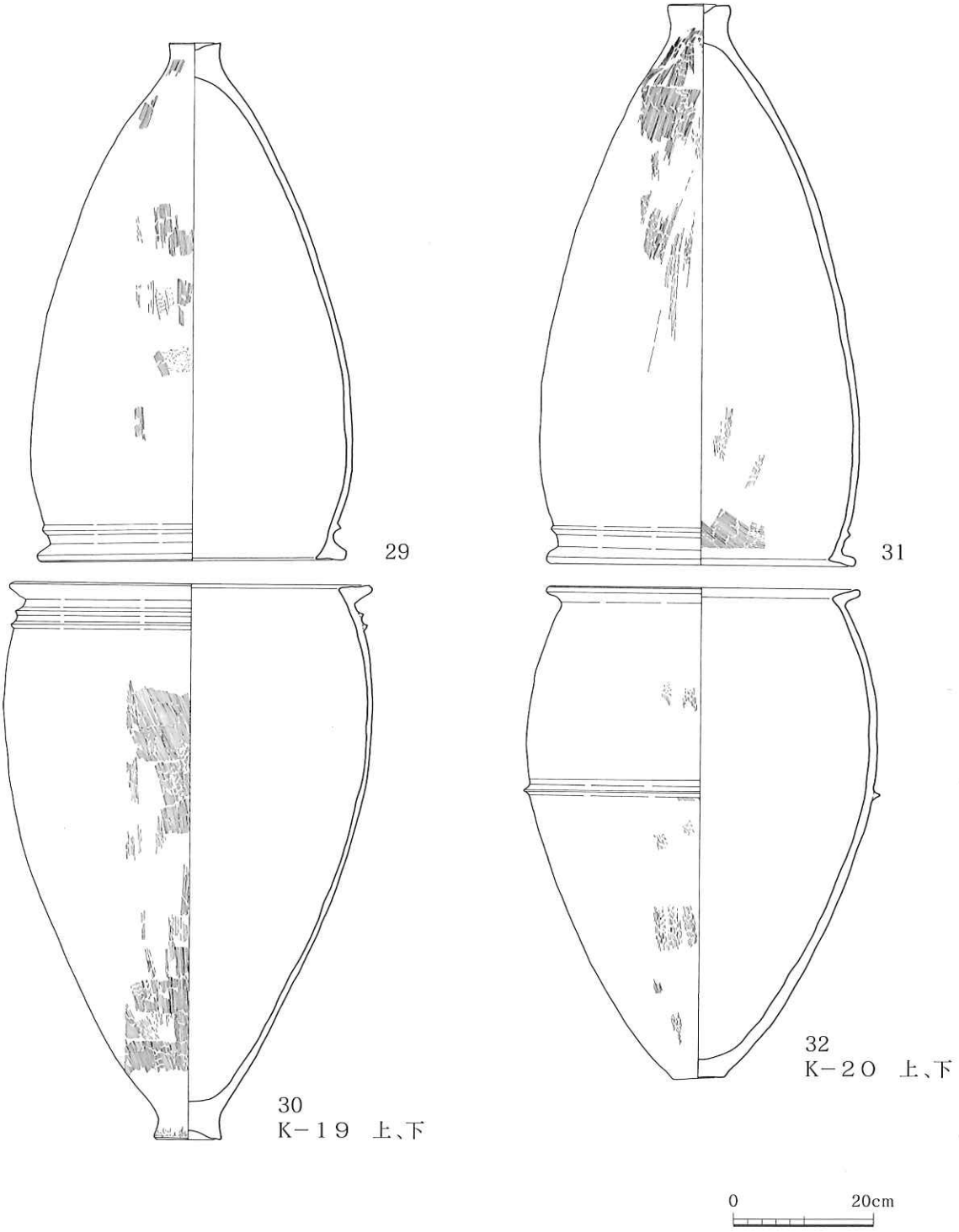
上棺は中型の甕形土器である。底部を欠損しているが、上げ底ぎみの底部を有するものと思われる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位の最大径部から口縁に向かってすぼまる。

口縁は台形状を呈し、わずかに内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。平底の底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径と



Ｆｉｇ．16 Ｋ－１３・１５・１６・１７・１８甕棺



Ｆｉｇ．17　Ｋ−１９・２０甕棺

なり、そこから口縁に向かってややすぼまる。口縁は丸みを帯びた長方形で、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面ともに摩耗のため不明である。

K－２２甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ１８－３５・３６）

上棺は大型の甕形土器である。胴部上位から底部にかけて欠損しているため形状は不明である。

口縁は分厚く断面三角形を呈する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。分厚い平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位でやや外傾しながら直立し、胴部上位で口縁に向かって多少内傾する。口縁は分厚い方形を呈し、内側に多少張り出す。胴部中位にやや垂れぎみの見かけ２条突帯を貼付する。内面はナデおよびハケ目の後ナデによる調整を施すが、外面は摩耗のため不明である。また外面には部分的に黒斑および赤彩痕がみられる。

K－２３甕棺（上鉢・下甕　Ｆｉｇ１８－３７・３８）

上棺は鉢形土器である。底部を欠損しているが、おそらく平底の底部から緩やかに内湾しながら大きく開くものと思われる。口縁は丸みを帯びた三角形を呈し、内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は中型の甕形土器である。底部は上げ底であまり厚みがなく裾がわずかに開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開く。胴部中位やや上で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は上面が多少くぼみ内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

K－２４甕棺（上不明・下甕　Ｆｉｇ１９－３９・４０）

上棺は底部を欠損し、胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているため器種は不明である。

胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位の最大径部で大きく張り出し、そこから口縁に向かってすぼまる。全体的に丸みを帯びており、胴部上位の最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。

調整は内外面ともハケ目の後ナデにより調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。厚みのある平底の底部からやや内湾ぎみに開き、胴部中位からやや外傾ぎみに立ち上がる。さらに胴部上位で口縁に向かってすぼまる。口縁はくの字状を呈し、内側に多少張り出す。胴部下位に見かけ２条突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデによる調整を施す。外面は底部にハケ目が残るがその他は摩耗により不明である。

K－２５甕棺（Ｆｉｇ１９－４１）

大形の甕形土器である。底部はやや上底ぎみで裾がわずかに開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となりそこから口縁に向かって多少すぼまる。口縁は分厚い台形状を呈し多少内傾する。胴部中位やや下に見かけ２条突帯を貼付する。内面はナデ、外面はハケ目の後ナデによる調整を施す。

K－２６甕棺（Ｆｉｇ１９－４２）

大型の甕形土器である。底部はわずかに上げ底で厚みがあり裾は多少すぼまる。底部から内湾しながら開き、胴部中位からはほぼ直立し、口縁直下でややすぼまる。口縁は丸みを帯びた分厚い方

形を呈し、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に見かけ２条突帯を貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はヘラミガキによる調整を施す。

Ｋ－２７甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ２０－４３・４４）

上棺は小型の甕形土器である。底部は上底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁はいわゆるＴ字口縁で内傾する。口縁直下には断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。欠損のため底部の形状は不明である。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は断面三角形でわずかに内傾しやや内側に張り出す。口縁直下に刻目を施した断面三角形の突帯を２条貼付する。

内外面ともナデによる調整を施す。

Ｋ－２８甕棺（上壺・下甕　Ｆｉｇ２０－４５・４６）

上棺は胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているが、その形状から壺形土器と思われる。底部は平底でやや厚みがある。胴部は底部から内湾ぎみに開き、胴部上位で丸みを帯び内湾しながら立ち上がる。最大径は胴部上位の屈曲部に位置し、そこに断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目の後ナデ調整を施す。

下棺は大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾はわずかにすぼまる。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は分厚い三角形を呈し、やや内傾し内側に張り出す。胴部中位やや下に見かけ２条突帯を貼付する。

内面はハケ目およびハケ目の後ナデによる調整を施すが、外面は一部ハケ目が残存するのみで全体的に摩耗が激しく不明である。

Ｋ－２９甕棺（Ｆｉｇ２０－４７）

中型の甕形土器である。胴部はやや厚みがある平底の底部から直線的に開き、胴部中位やや上でもっとも張り出し、そこから口縁に向かってやや内湾しながらすぼまる。口縁はくの字状を呈し内傾し内側に張り出す。胴部中位やや上の最大径部に刻目を施した台形状の突帯を貼付する。内面はハケ目およびナデ、外面はヘラミガキによる調整を施す。

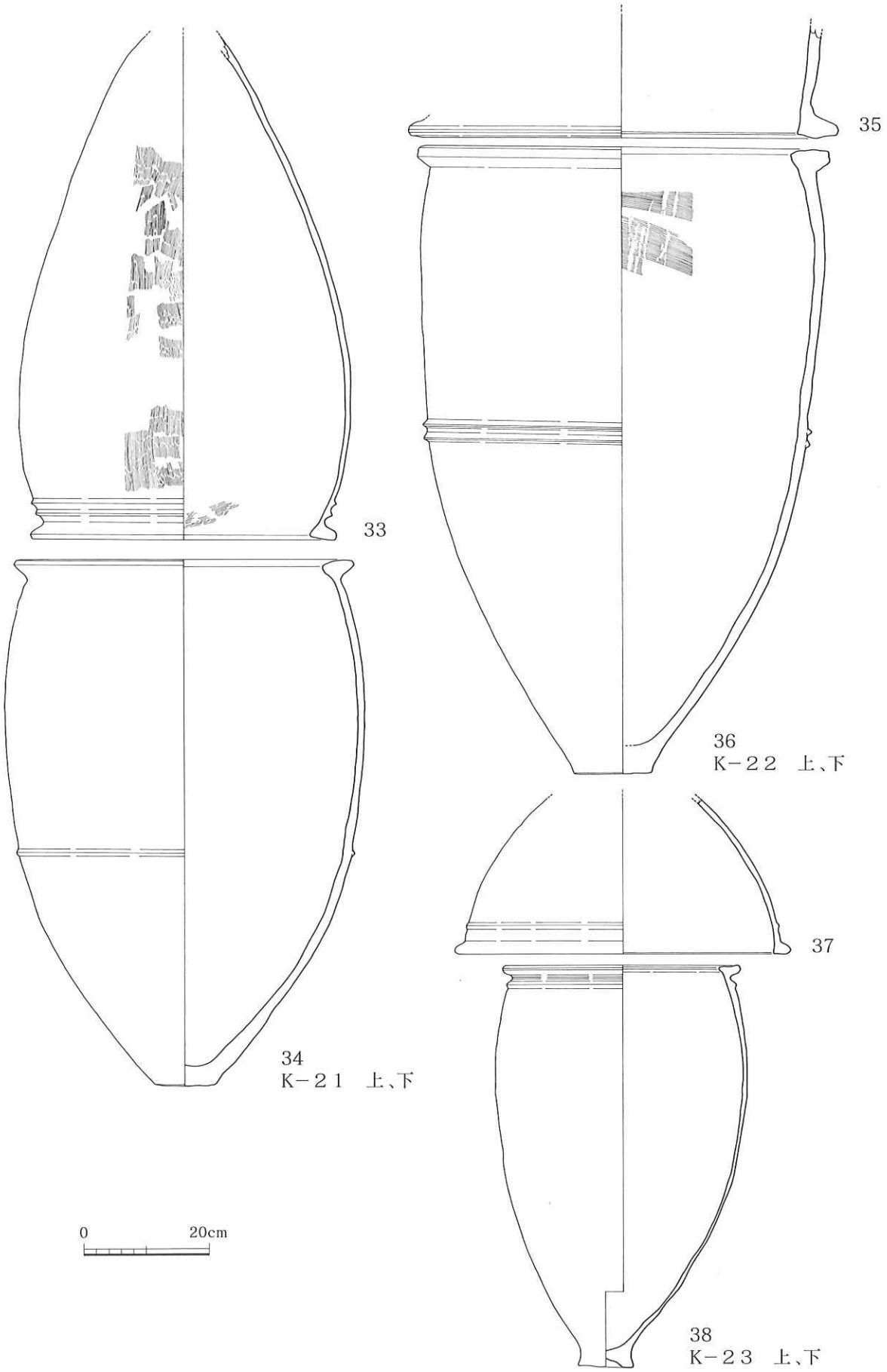
Ｋ－３０甕棺（Ｆｉｇ２１－４８）

大型の甕形土器である。薄い平底の底部から緩やかに内湾しながら開き、最大径となる胴部中位やや上部からはほぼ直立する。口縁はいわゆるＴ字口縁で、外傾し大きく内側に張り出す。胴部中位やや下にＭ字突帯を貼付する。調整は内外面ともナデによる調整を施し、部分的に黒斑がみられる。

Ｋ－３１甕棺（上不明・下甕　Ｆｉｇ２１－４９・５０）

上棺は胴部上位から口縁かけて意図的に打ち欠いているため器種は不明である。平底の底部からやや内湾しながら開く。胴部最大径部で口縁に向かって屈曲し、そこに断面三角形の突帯を２条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。平底の底部からやや内湾ぎみに開き、胴部上位の最大径部で内側に屈曲し、口縁下ですぼまる。口縁はくの字形を呈し、胴部最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はミガキによる調整を施す。



Ｆｉｇ．18　Ｋ－２１・２２・２３甕棺

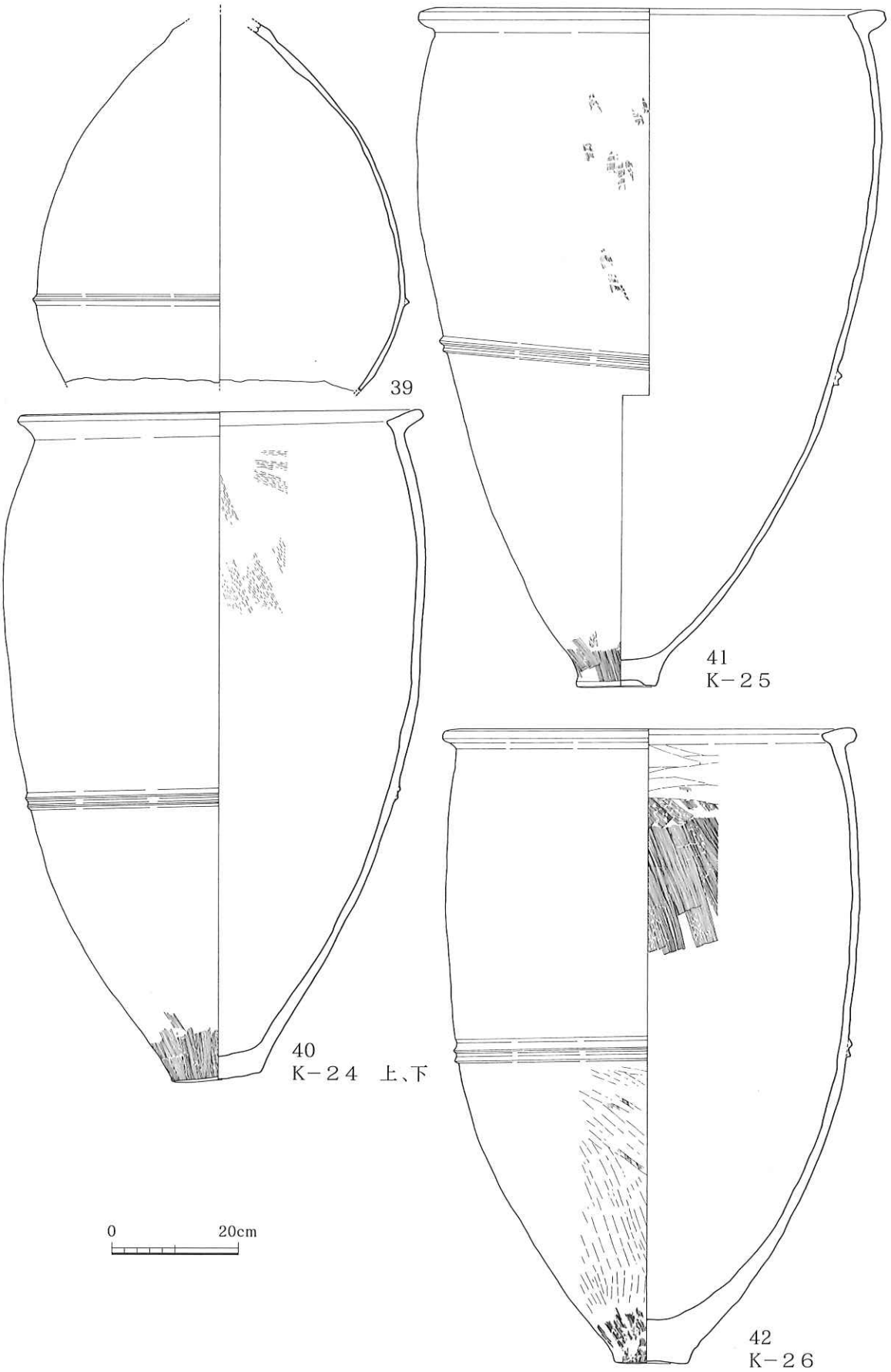


Fig. 19 K−24・25・26甕棺

Ｋ－３２甕棺（Ｆｉｇ２１－５１）

丸みを帯びた甕形土器である。底部は欠損しているが平底と思われる。底部からやや内湾ぎみに開き、胴部中位やや下から胴部中位やや上にかけて丸みを帯び、口縁下ですぼまる。口縁はくの字形を呈する。胴部中位やや下に、刻目を施した下方に垂れぎみの台形状の突帯を貼付する。外面はハケ目およびヘラミガキによる調整を施すが、内面は摩耗により不明である。

Ｋ－３３甕棺（Ｆｉｇ２１－５２）

胴部上位から口縁にかけて欠損しているが、おそらく壺形土器と思われる。平底の底部から直線的に開き、胴部上位の最大径部で内側に屈曲する。最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

Ｋ－３４甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ２２－５３・５４）

上棺は小型の甕形土器である。底部はやや上底ぎみの平底で、そこから胴部中位に向かって多少内湾しながら開き、そこからは口縁に向かってほぼ直立する。口縁はいわゆるＴ字口縁で内傾し内側に張り出す。口縁端部に刻目を施し、上面に線刻による鋸歯文の施文がみられる。胴部中位には刻目を施した断面三角形の突帯を２条貼付する。外面はミガキ、内面はナデによる調整を施し、一部外面に赤彩が残存し、内面には部分的に煤が付着する。

下棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや上に最大径を有し、口縁下ですぼまる。口縁は内傾し断面三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内外面ともハケ目の後ナデによる調整を施す。

Ｋ－３５甕棺（上不明・下甕　Ｆｉｇ２２－５５・５６）

上棺は胴部上位から口縁にかけて意図的に打ち欠いているが壺形土器と思われる。底部は平底でやや厚みがある。丸みを帯びた胴部は底部からやや内湾ぎみに開き、胴部最大径部で内側に屈曲し、そこに断面三角形の突帯を２条貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾がすぼまる。胴部は底部から直線的に開き、胴部中位やや下から胴部上位にかけてほぼ直立し、口縁直下でわずかにすぼまる。口縁は分厚い台形状を呈し多少内傾する。胴部中位やや下に下方に垂れぎみの見かけ２条突帯を１条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

Ｋ－３６甕棺（上甕　Ｆｉｇ２２－５７）

上棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾が多少開く。胴部は底部から内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですぼまる。口縁は丸みを帯びた三角形を呈し、わずかに外反しながら外側に短く張り出す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は調査担当者の不注意により紛失してしまっている。

Ｋ－３７甕棺（上甕・下甕　Ｆｉｇ２３－５８・５９）

上棺は大型の甕形土器である。底部は平底でやや厚みがあり裾はすぼまる。胴部は底部から直線的に開き、胴部中位でやや丸みを帯び、口縁直下で多少すぼまる。口縁は分厚い台形状を呈し上面がわずかにくぼむ。胴部中位に断面三角形の突帯を貼付する。内面はナデ、外面はミガキによる調整を施す。

下棺は中型の甕形土器である。底部はわずかに上げ底ぎみで分厚く裾がわずかに開く。胴部は底

部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですぼまる。口縁は内傾し分厚い断面三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を２条貼付する。内外面ともナデによる調整を施す。

Ｋ－３８甕棺（Ｆｉｇ２３－６０）

小型の甕形土器である。底部は上げ底で厚みがあり裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや上で最も張り出し、そこから口縁に向かってすぼまる。口縁は内傾し丸みを帯びた三角形を呈し、内側にわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。

調整は内外面とも摩耗により不明である。

Ｋ－３９甕棺（上鉢・下壺　Ｆｉｇ２３－６１・６２）

上棺は鉢形土器である。平底の底部から内湾ぎみに開き、口縁は内傾し丸みを帯びた三角形を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。内面はハケ目の後ナデ、外面はナデによる調整を施す。

下棺は口縁を意図的に打ち欠いているが、壺形土器と思われる。平底の底部からほぼ直線的に開き、胴部上位で最大径となり、そこから屈曲しすぼまる。最大径部に断面三角形の突帯を貼付する。

内面はナデおよびハケ目の後ナデ、外面はナデによる調整を施す。

Ｋ－４０甕棺（Ｆｉｇ２４－６３）

大型の甕形土器である。底部は平底で厚みがあり裾からほぼ直立する。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部中位やや下でほぼ直立し、口縁直下でわずかにすぼまる。口縁は内傾し分厚い台形状を呈する。外側に短く張り出し、内側にもわずかに張り出す。胴部中位やや下に見かけ２条突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

Ｋ－４２甕棺（上鉢・下甕Ｆｉｇ２４－６４・６５）

上棺は鉢形土器で、平底の底部から緩やかに内湾しながら開く。口縁はわずかに内傾し台形状を呈する。口唇部に刻目を施しており、外側に短く張り出し、内側にもわずかに張り出す。口縁直下に断面三角形の貼付突帯を貼付し、これにも刻目を施す。調整は内外面とも摩耗により不明である。

下棺は小型の甕形土器である。底部は上げ底で分厚く裾がやや開く。胴部は底部から緩やかに内湾しながら開き、胴部上位で最大径となり、口縁直下ですぼまる。口縁は内傾し、上面がくぼみ内側に張り出す。口縁直下に断面三角形の突帯を貼付する。調整は内外面とも摩耗により不明である。

（２）　石製品

磨製石剣（Ｆｉｇ２５　１～６）

Ｋ－３０甕棺墓出土磨製石剣（１～５）

１及び２は、安山岩製で、先端部及び基部を欠損している。１は長さ１１．２㎝、最大幅３．６㎝、最大厚１．４㎝、２は長さ１０．８㎝、最大幅３．７㎝、最大厚１．４㎝を測る。３及び４は、安山岩製の磨製石剣の先端部である。３は残存部で長さ２．０㎝、最大幅１．９㎝、最大厚０．６㎝、４は残存部で長さ１．９㎝、最大幅１．９㎝、最大厚０．５㎝を測る。５は安山岩製で左刃部及び基部を欠損している。残存部で長さ９．９㎝最大幅２．４㎝、最大厚１．３㎝を測る。

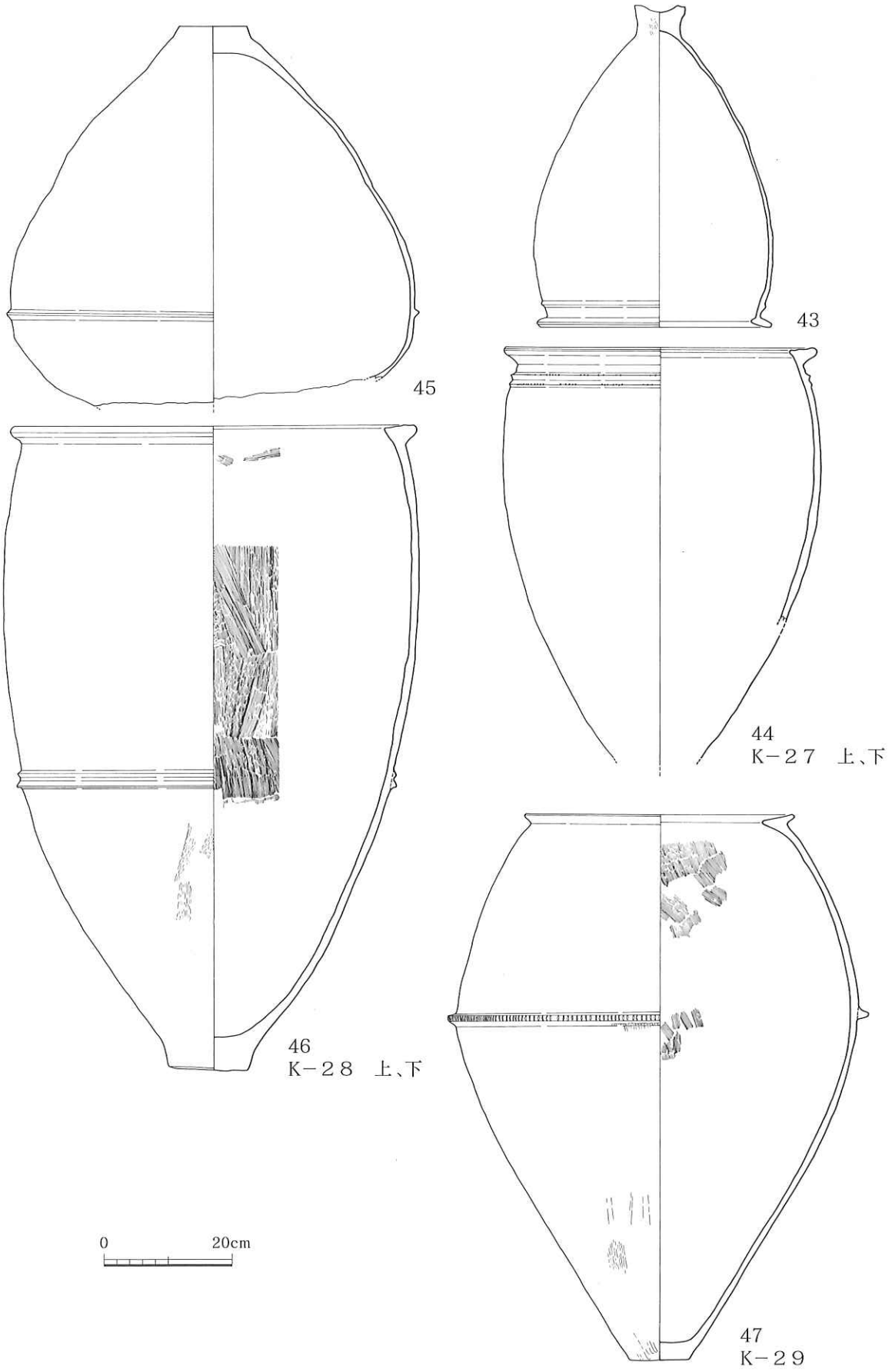


Fig. 20 K−27・28・29甕棺

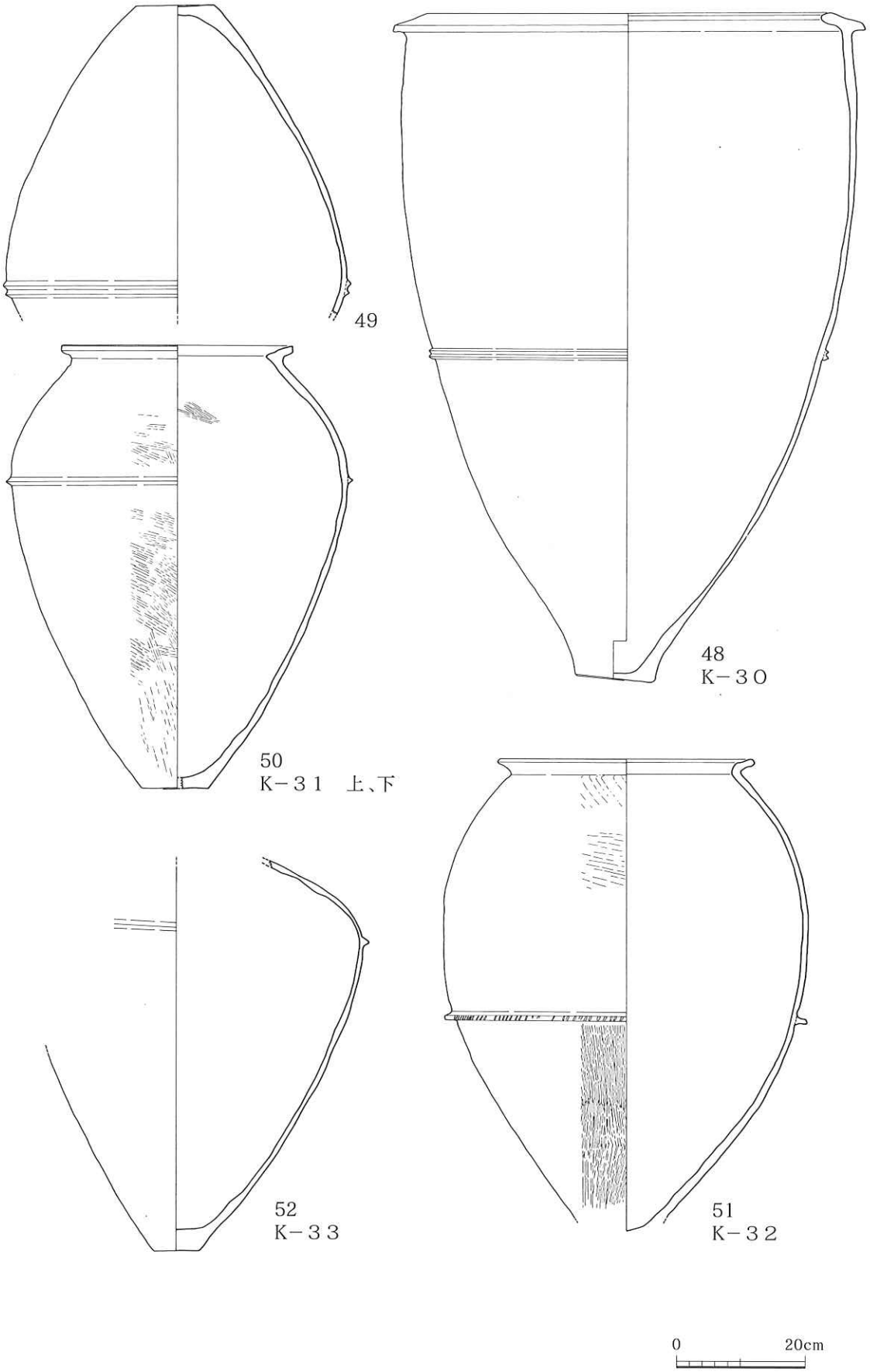


Fig. 21 K−30・31・32・33甕棺

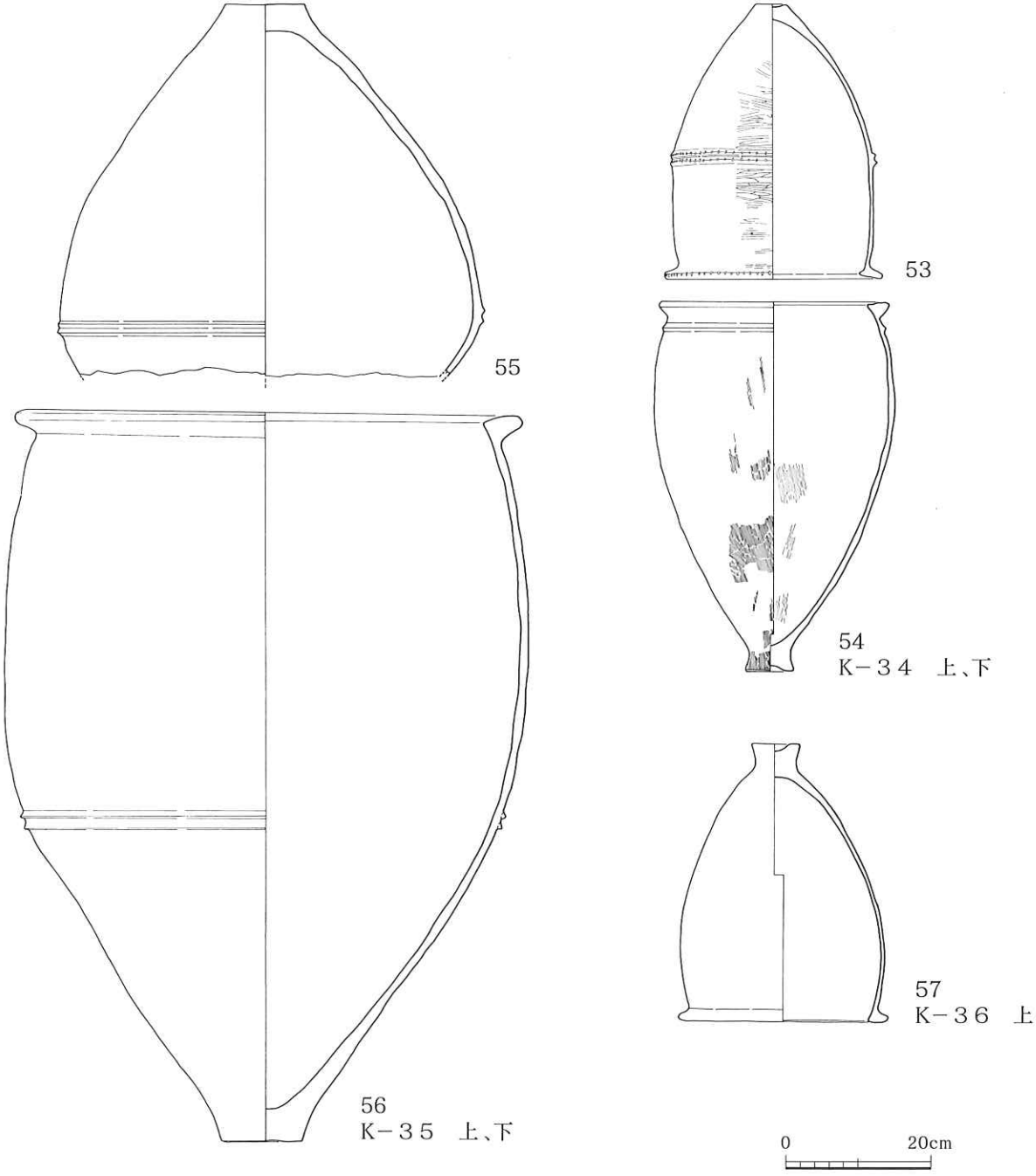


Fig. 22 K−34・35・36甕棺

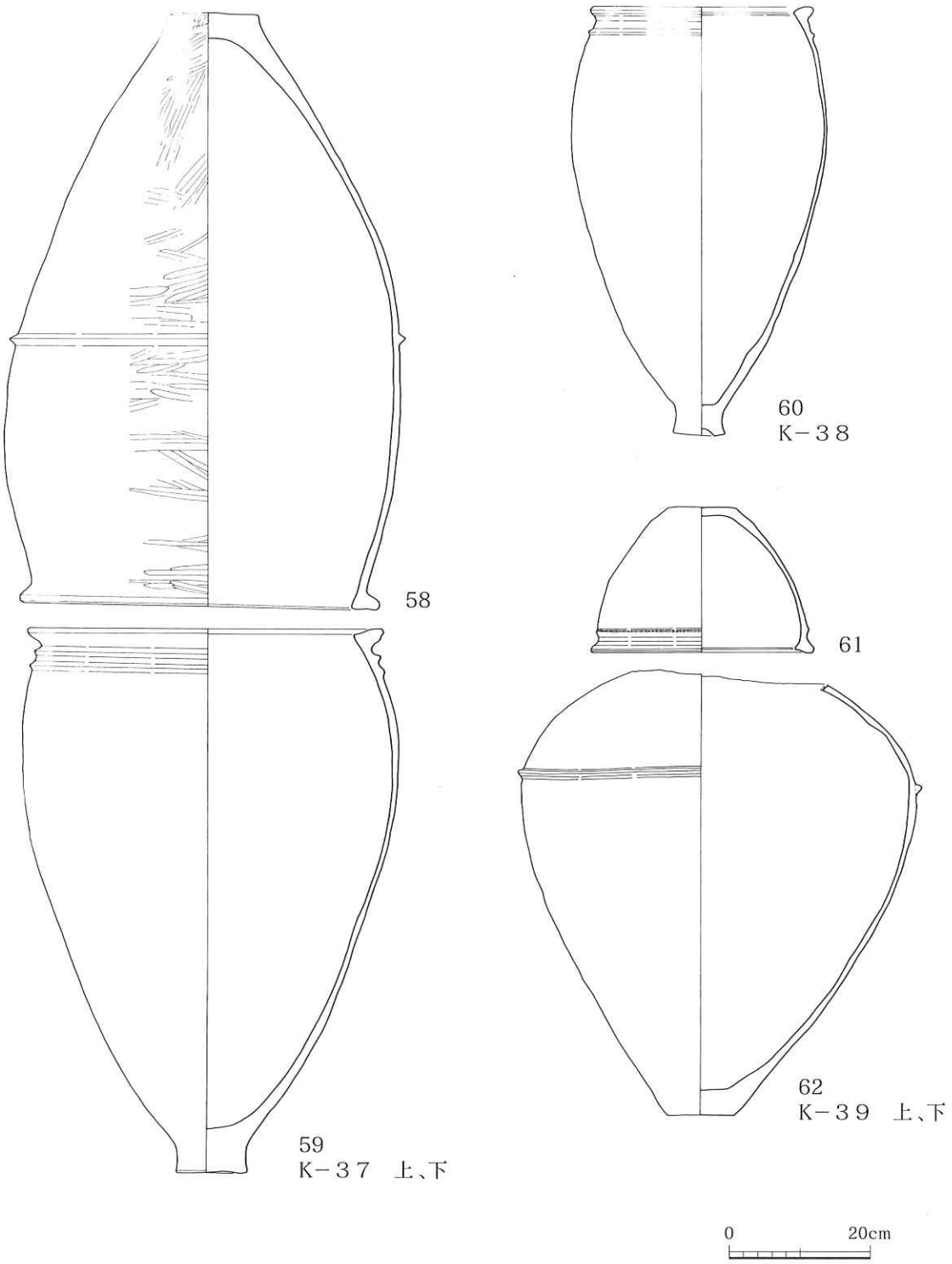
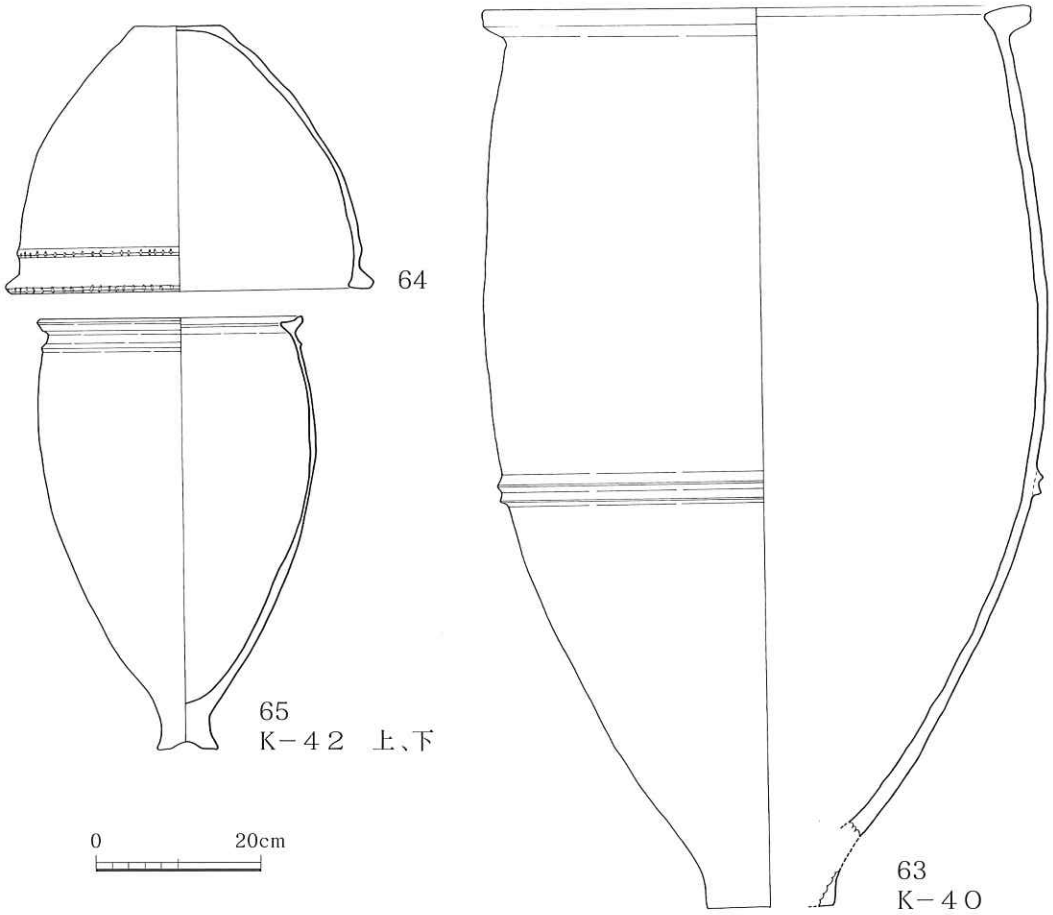
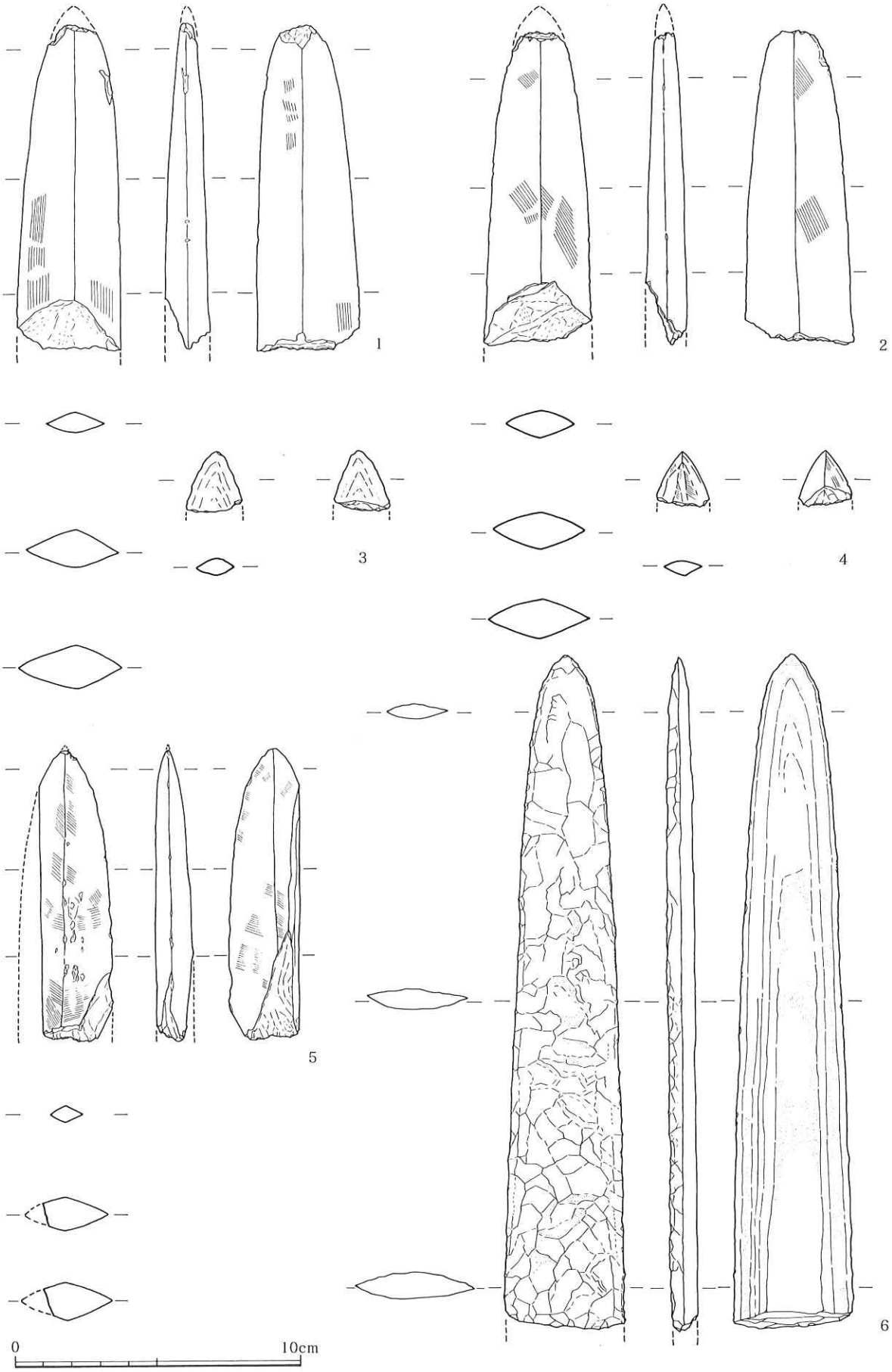


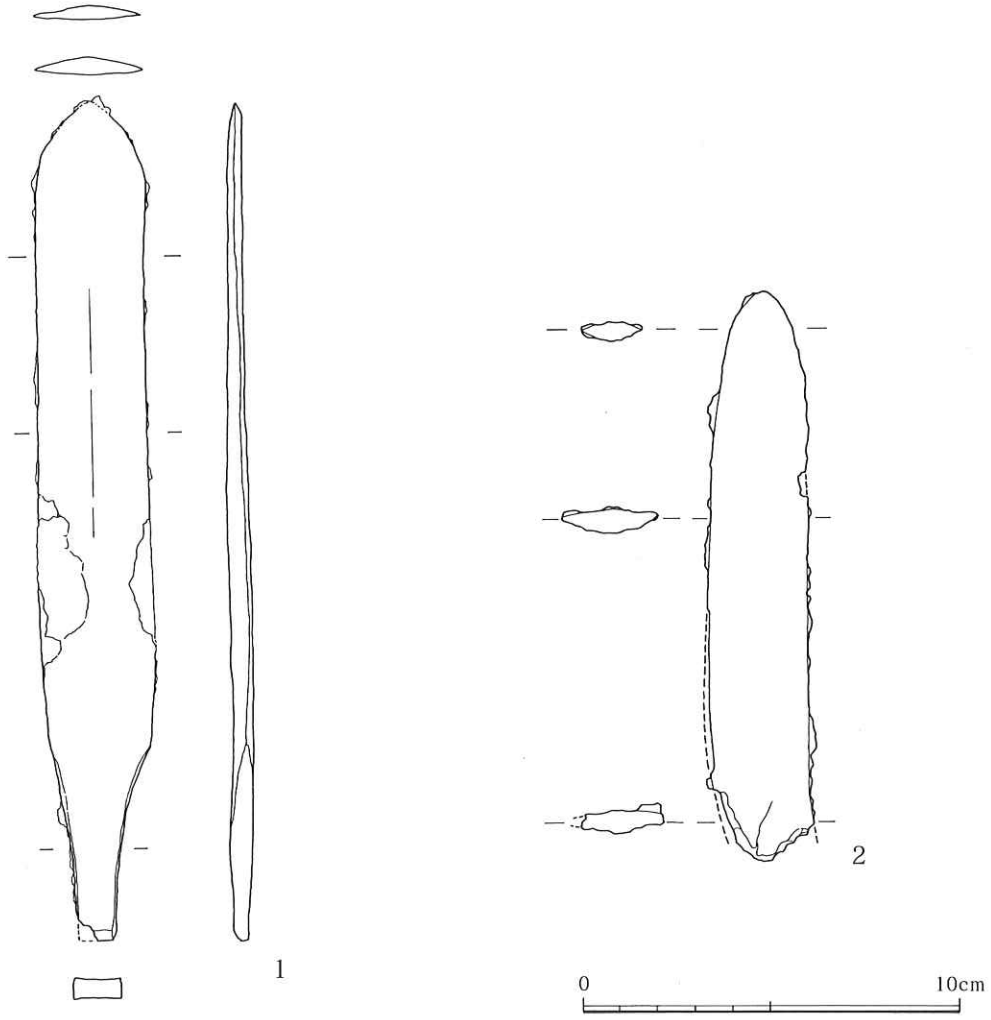
Fig. 23 K−37・38・39甕棺



Ｆｉｇ．24　Ｋ－４０・４２甕棺



Ｆｉｇ．25 石製品



Ｆｉｇ．26 鉄製品

Ｋ－３７甕棺墓出土磨製石剣（６）

６は安山岩製で、ほぼ完形と思われる。長さ２３．２㎝、最大幅４．１㎝、最大厚０．９㎝を測る。

（３）　鉄製品

鉄剣（Ｆｉｇ２６　１，２）

両者ともＫ－０５甕棺墓の墓壙内から出土している。１は長さ２２．０㎝、幅２．８㎝、厚さ０．６㎝を測る。２は、長さ１５．０㎝、幅２．６㎝、厚さ０．６㎝を測る。Ｋ－０５甕棺墓が大きく削平を受けているため、甕棺墓に伴う副葬品であるかどうかは不明である。

２　弥生時代後期～古墳時代

この時期の遺構としては、石棺墓１基、木棺墓２基、大型溝２基、土坑１基が確認されている．特に大型溝２基からは、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての多量の土器が出土した。

各遺構および遺物の詳しい内容は以下のとおりである。

遺構

（1）　石棺墓

ＳＣ－０１（Ｆｉｇ２７）

調査区中央部、ＳＫ－３５の東側際に位置する。削平が激しく石棺材４枚が残存するのみで、副葬品等は確認されていない。

（2）　木棺墓

Ｍ－０１（Ｆｉｇ２７）

調査区中央部やや南よりのＳＤ－０８際に位置する。長さ８．５ｍ、幅３．５ｍ、深さ１．１ｍを測る。大型の木棺墓と思われるが、かなり攪乱を受けており、墓壙内に一部白色粘土と赤色顔料を残すのみで、副葬品等は確認されていない。

Ｍ－０２（Ｆｉｇ２７）

Ｍ－０１甕棺墓の南側に並んで位置する。長さ９．０ｍ、幅４．５ｍ、深さ０．９ｍを測る。Ｍ－０１と同様に、かなり攪乱を受けており、木棺の痕跡及び副葬品は確認されていない。図面から判断して、Ｍ－０１を切っているものと思われるが詳細は不明である。

（3）　大型溝

ＳＤ－０８（Ｆｉｇ２８）

調査区南東側に弧を描くように所在する。調査区東側の部分は削平により一部消失しているものと思われる。長さ約２４ｍ、幅６～７ｍ、深さ約１ｍを測る。遺構中央部北側に４０～５０㎝大の集石部がみられる。遺構内から大量の土器片とそれに混ざって鉄器が出土している。遺構上部は市営住宅建設の際に大きく削平を受けているものと思われる。

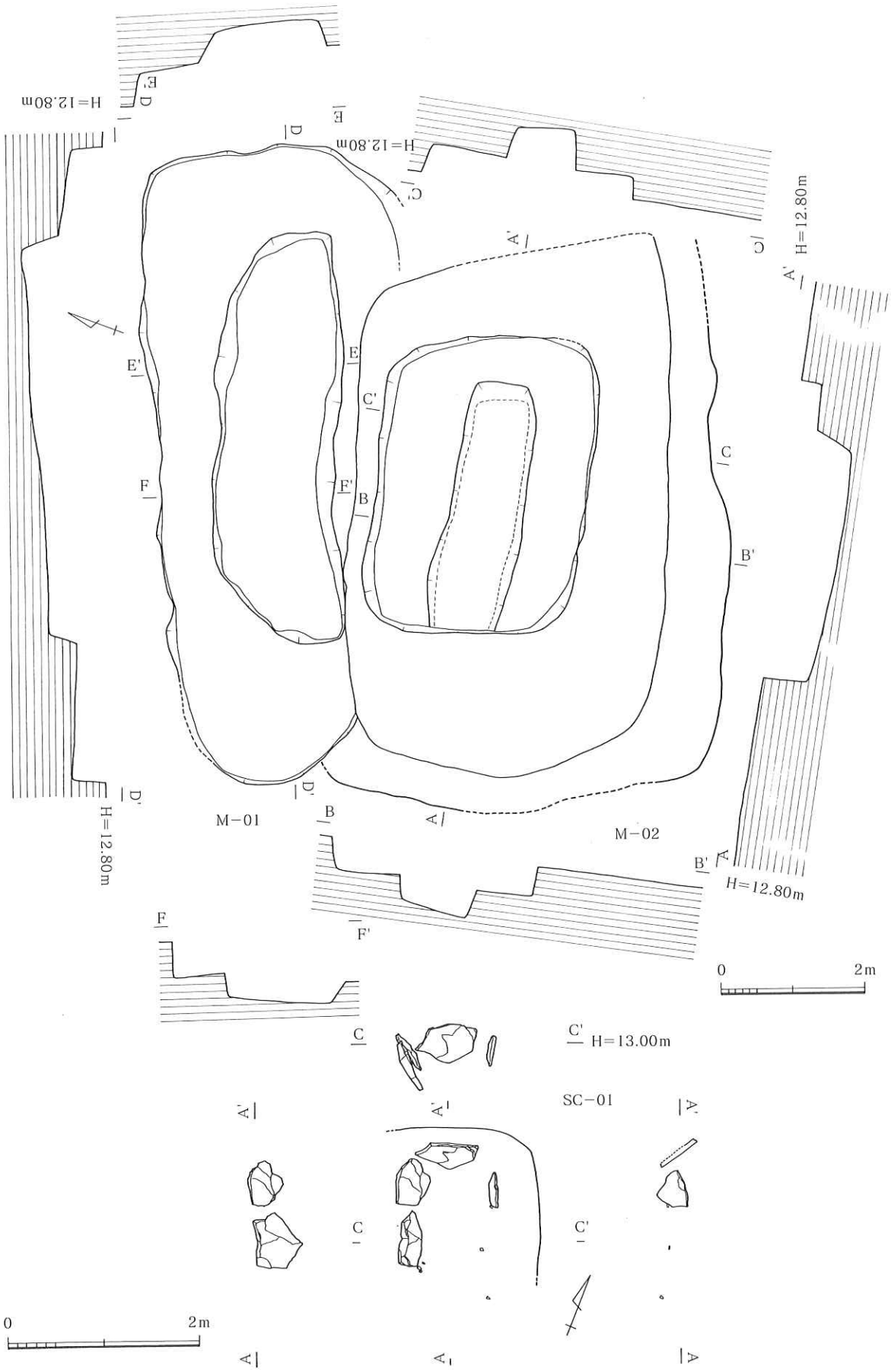
ＳＤ－０９（Ｆｉｇ２９）

調査区北側中央部に位置する。北端部は削平により消失しているものと思われる。残存部で長さ約１２ｍ、幅約５ｍ、深さ約１ｍを測る。遺構南端部東側に４０～５０㎝大の集石がみられる。遺構内から大量の土器片と、それに混ざって鉄器が出土しているが、一部弥生時代中期の甕棺墓群を破壊していることから、甕棺片も多少混入している。遺構上部は市営住宅建設の際に大きく削平を受けているものと考えられる。

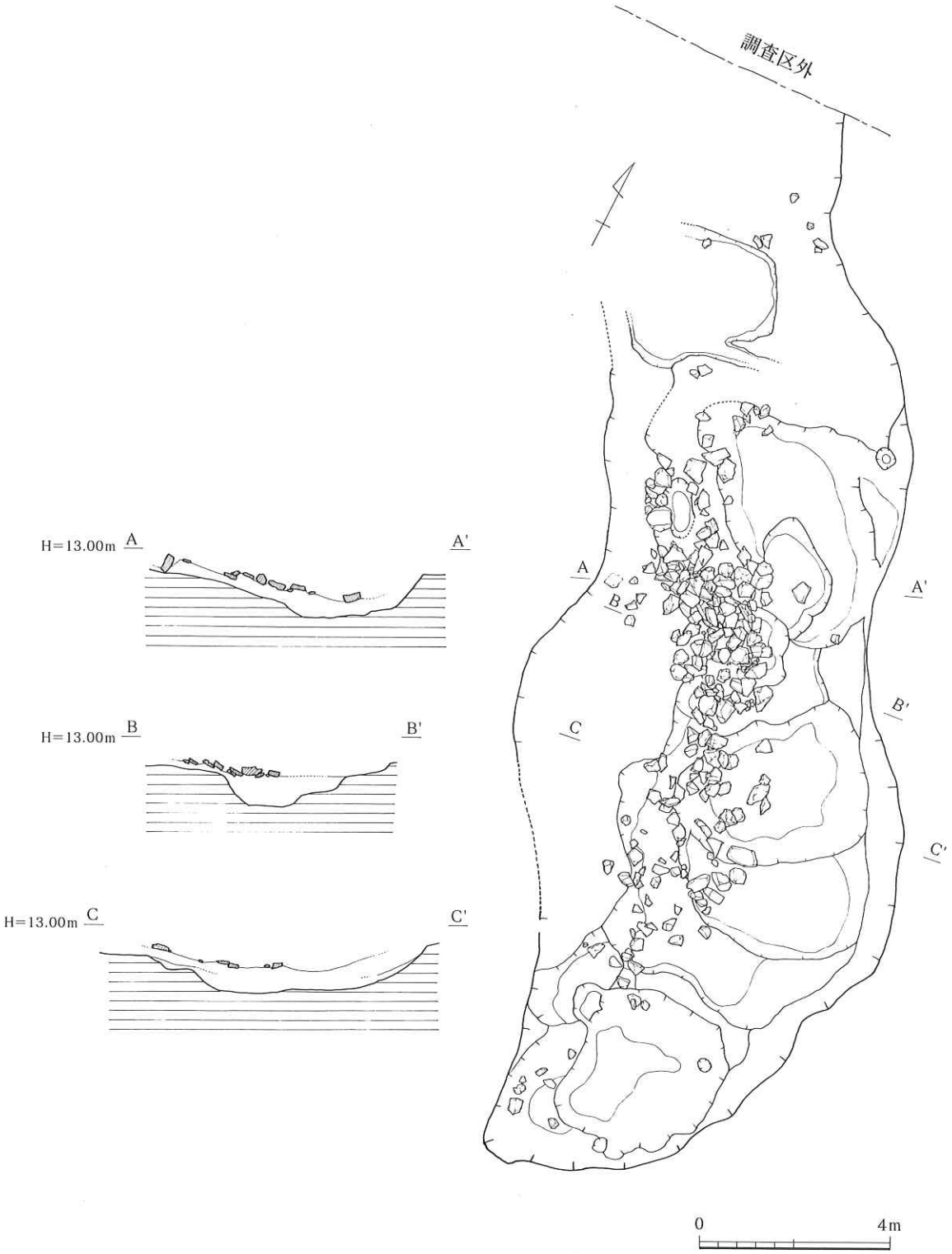
（4）　土坑

ＳＫ－３５（Ｆｉｇ３０）

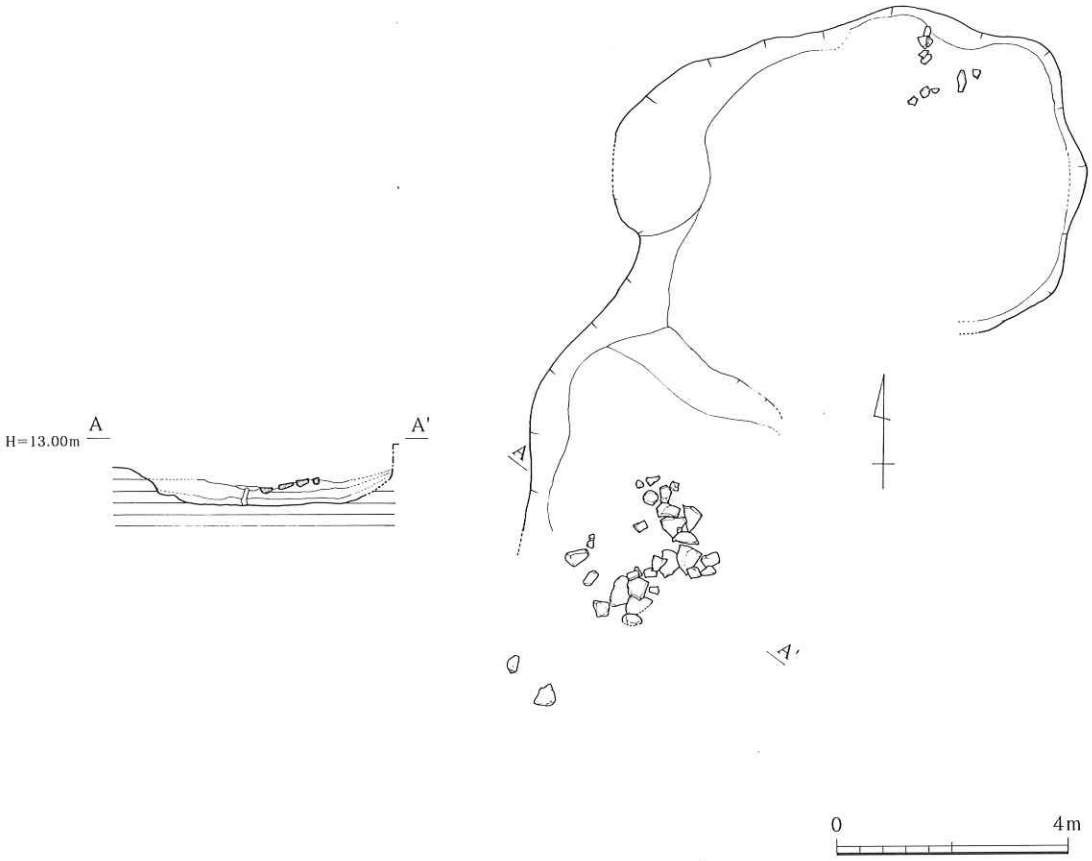
調査区中央部やや南よりの、ＳＤ－０８西端部とＳＤ－０９南端部に挟まれた部分に位置する大型の土坑である。長さ６．１ｍ、幅３．５ｍ、深さ１．５ｍを測り、形状は隅丸の長方形を呈する。遺構内からはＳＤ－０８、０９同様多量の土器片が出土している。



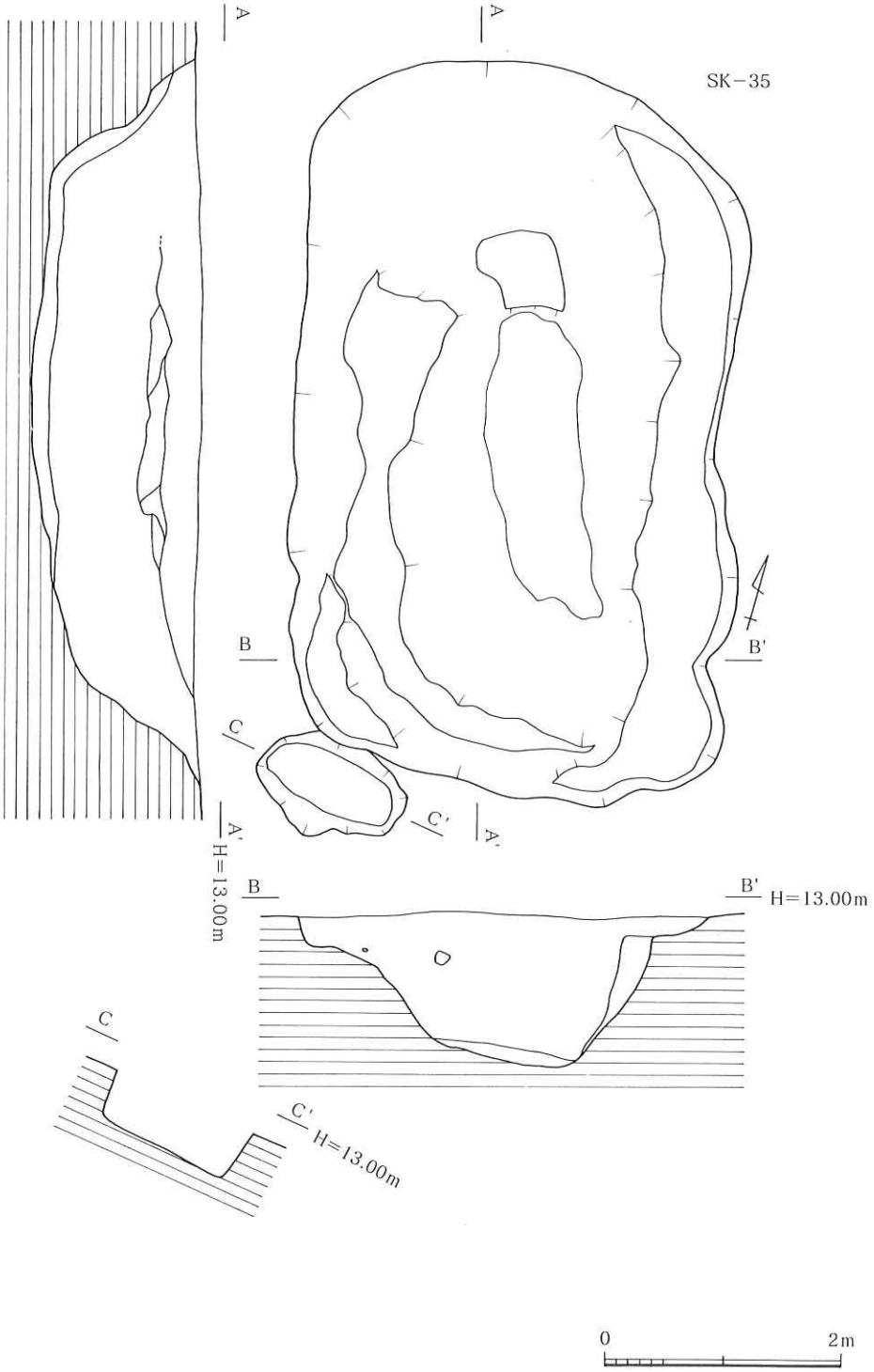
Ｆｉｇ．27　Ｍ−０１・０２木棺墓、ＳＣ−０１石棺墓



Ｆｉｇ．28　ＳＤ－０８大型溝



Ｆｉｇ．29　ＳＤ－０９大型溝



Ｆｉｇ．　30　ＳＫ−３５土坑

遺物

（1） 土器

この時期の土器は、すべてＳＤ－０８、ＳＤ－０９、ＳＫ－３５から出土している。特にＳＤ－０８、０９については、多量の土器が遺構内に密集した状況で確認されている。器種構成としては甕、壺、鉢、高坏、小型丸底壺、小型壺、ミニチュア土器、器台、甑、ジョッキ形土器があげられる。遺物量が膨大であるため、実測可能なものの中から主なものを掲載した。詳細については以下器種及び遺構ごとに示す。

甕（Ｆｉｇ３１～３７　１～１１７）

甕は１１７点掲載している。出土地点の内訳はＳＤ－０８が９７点、ＳＤ－０９が１４点、ＳＫ－３５が6点である。

ＳＤ－０８出土土器（１～３３、３６～６９、７２、７３、７５～９２、９６～９８、１０３、１０６、１１２～１１６）

１は脚付甕である。胴部中位やや上に最大径をもち、頸部はわずかにすぼまる。口縁部はくの字形に屈曲し直線的に開く。端部は角張り外傾する。脚部はハの字に開きあまり高くならない。端部はやや丸みを帯び、外底面との境は不明瞭である。調整は内外面ともハケメによる調整を施すが、胴部下位から脚部にかけて部分的に指頭圧痕がみられる。２～１２は口縁部あるいは胴部下位を欠損しているものが多いが、在地系の脚付甕と思われる。胴部中位あるいはやや上に最大径をもち全体的に丸みを帯びる。口縁部はくの字形に屈曲し、直線もしくはわずかに外反ぎみに開く。端部は角張り外傾する。底部はすぼまり、そこにやや高めのハの字形を呈する脚が付く。脚は端部付近で外側に開き、端部は角張る。調整は内外面ともハケメによる調整を施すが、胴部外面に部分的にタタキ痕が残存するものもある。１３～１５は脚付甕の脚部である。脚は低めでハの字形を呈し、端部付近で外側に開く。口縁端部は角張り、外底面との境は明瞭である。１６は在地系の長胴甕である。あまり丸みをもたない胴部は、中位やや上に最大径をもち頸部は多少すぼまる。口縁部はくの字形に屈曲し直線的に開く。底部は平底で胴部中位から底部に向かってすぼまる。外底面にタタキ痕状のスタンプがみられる。調整は内外面ともハケメによる調整を施す。１７は長胴甕と思われるが、胴部中位以下を欠損しているため脚の有無は不明である。１８～４４は在地系の脚付甕の脚部である。脚はやや高めでハの字形を呈するが、端部付近で外側に開くものと開かないものがある。口縁端部は角張るが一部丸みを帯びるものもあり、外底面との境はやや不明瞭である。４５は口縁部から胴部中位にかけて欠損しているが在地系の脚付甕と思われる。胴部下位はやや丸みを帯びながら開き、直線的にハの字に開く脚が付く。脚部の端部は角張り外底面との境は不明瞭である。
４６～６０は脚付甕の脚部である。脚はやや高めで大きくハの字に開き、口縁端部で外側に開くものと開かないものがある。口縁端部は角張るものと丸みを帯びるものがあり、外底面との境は不明瞭である。６１～６６は在地系の甕と思われるが、すべて胴部中位及び胴部下位以下を欠損しているため脚の有無は不明である。６１～６３は胴部中位から口縁部向かって直線的に多少すぼまり、口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。口縁端部は角張り外傾する。調整は外面がタタキ、内面はハケメによる調整を施す。６４、６５は胴部中位から口縁に向かって丸みを帯びながらすぼまる。口縁部はくの字に屈曲しやや外反気味に開き、口縁端部は角張りわずかに外側につまみ出される。

調整は外面が胴部上位にタタキ、下位にハケメ、内面はハケメによる調整を施す。６６は胴部中位から口縁部に向かって丸みを帯びながらややすぼまり、口縁部はわずかに拡がりながら短く立ち上がる。口縁端部で丸みを帯びやや外側に開く。調整は外側はタタキの後ハケメによる調整を施すが、部分的にタタキ痕が残存している。内側はハケメによる調整を施す。６７～６９は球形の胴部に丸底の底部を有し、口縁部がくの字に屈曲し短く開き端部は角張る。７２は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部がくの字に屈曲するが、わずかに開く程度で口縁端部は丸みを帯びる。７３は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲し薄く外反しながら開き端部は丸みを帯びる。７５は胴部が縦長ぎみの球形で底部は平底気味の丸底である。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き端部は丸みを帯びる。７６、７７は胴部が縦長気味の球形で底部は尖底気味の丸底である。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き端部は丸みを帯びる。７８～８９は胴部中位以下を欠損しているものもあるが、胴部中位やや上が張り出し、底部は尖底気味もしくは平底気味の丸底を有するものと思われる。口縁部は屈曲し直線的もしくはわずかに外反しながら開き端部は角張る。９０～９２はほぼ球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。口縁部はくの字に屈曲して外反気味に開き端部は丸みを帯びる。９６～９８は胴部下位から底部を欠損しているが、胴部中位及びやや上で大きく張り出す胴部に尖底気味の丸底を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的もしくはわずかに外反しながら開く。端部は多少丸みを帯びる。１０３は胴部下位以下を欠損しているが、胴部中位やや上で最も張り出し、底部は尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに内湾しながら開き端部は丸みを帯びる。１０６は胴部中位やや上で最も張り出し、底部は尖底気味の丸底となる。口縁部はくの字に屈曲し内湾しながら開き端部は丸みを帯びる。１１２～１１５は胴部中位以下及び底部を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き、口縁端部は角張る。１１６は山陰系の複合口縁甕である。胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は一次口縁部で短く外反し、二次口縁部はやや開きながら直立する。口縁端部でわずかに外側に開き丸みを帯びる。

ＳＤ－０９出土土器（７０、７１、７４、９９～１０２、１０４、１０５、１０７～１１１）

７０、７１は球形の胴部を有する。７０は底部を欠損しているが、両者とも口縁部がくの字に屈曲し短く開き端部は丸みを帯びる。７４は胴部がやや縦長気味の球形で、底部は丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに外反気味に開き端部は丸みを帯びる。７４は底部を欠損しているが、胴部は縦長ぎみの球形で、丸底の底部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し、やや外反気味に開く。端部はやや丸みを帯びる。９９は胴部下位から底部にかけて欠損しているが尖底気味の丸底を有するものと思われる。胴部は中位で丸みを帯びながら最も張り出し、口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開き端部は丸みを帯びる。１００は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部中位で最も張り出し口縁部に向かってすぼまる。底部はおそらく尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開き端部は丸みを帯びる。１０１は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部中位で丸みを帯びながら最も張り出す。底部は尖底気味の丸底になるものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開くが、端部直下で多少外反する。口縁端部は丸みを帯びる。１０２は口縁部を欠損している。胴部中位で

最も張り出し、底部は尖底気味の丸底になる。１０４は胴部下位以下を欠損している。胴部中位から口縁に向かって丸みを帯びながらすぼまる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに内湾しながら開く。口縁端部は角張る。１０５は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は丸みを帯びる。１０７は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し内湾気味に開く。端部は角張り外傾する。１０８は底部を欠損している。胴部下位から直線的に開き、中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し内湾しながら開く。端部は丸みを帯びる。１０９は胴部中位以下を欠損している。口縁部はくの字に屈曲し、直線的に開く。端部は角張りやや外傾し多少内側につまみ出される。１１０は胴部中位以下を欠損している。胴部中位やや上で最も張り出し口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は角張り外傾する。口縁部直下に波状文を３条施文する。１１１は丸底の底部から丸みを帯びて広がり、胴部中位で最も張り出す。そこから口縁部に向かってやや丸みを帯びながらすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し直線的に開く。端部は角張りわずかに外傾し多少内側につまみ出される。

ＳＫ－３５出土土器（３４、３５、９３～９５、１１７）

３４，３５は甕の脚部である。３４は、脚は低めでハの字に開き端部はやや丸みを帯びる。脚部と外底面の境はやや不明瞭である。３５は３４と同様に脚は低めだが、脚の中位でやや外側に開き端部は角張り外底面と脚部との境はやや不明瞭である。９３は尖底気味の丸底で、胴部は球形を呈する。胴部中位で最大径となり、その後胴部中位やや上から口縁部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し、直線的に開く。口縁端部は丸みを帯びる。９４はやや尖底気味の丸底で球形の胴部を有し、胴部中位やや上で最大径となる。口縁部はくの字に屈曲し外反気味に開き、口縁端部は丸みを帯びる。９５はやや尖底気味の丸底で球形の胴部を有し、胴部中位やや上で最大径となる。口縁部はくの字に屈曲しわずかに外反気味に開く。口縁端部は丸みを帯びる。１１７は山陰系の複合口縁甕である。胴部下位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は一次口縁部で短く外反し、二次口縁部はやや開きながら直立する。端部は丸みを帯びる。

Fig. 31 土器 1

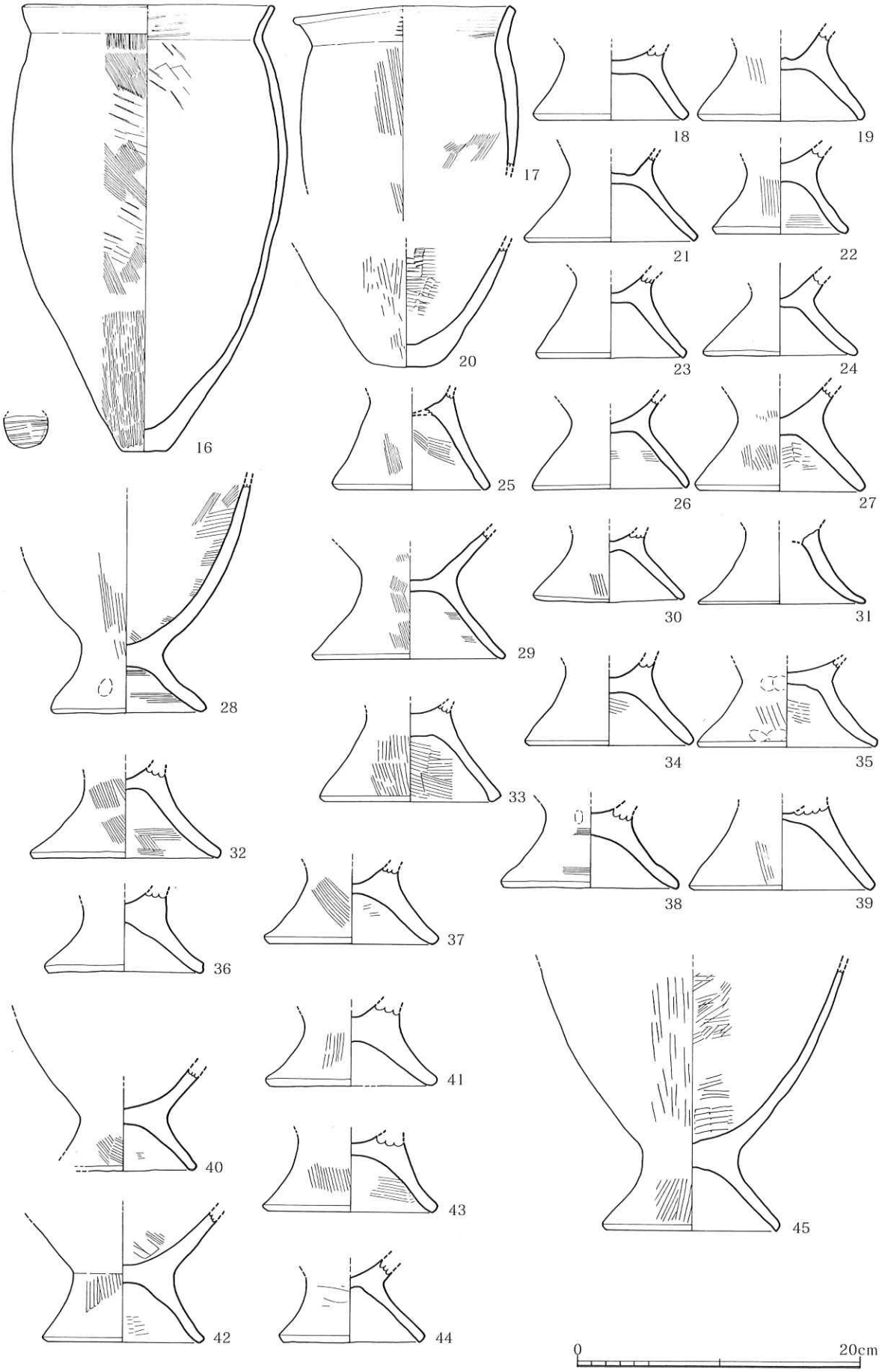

16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
20cm

Fig. 32 土器 2

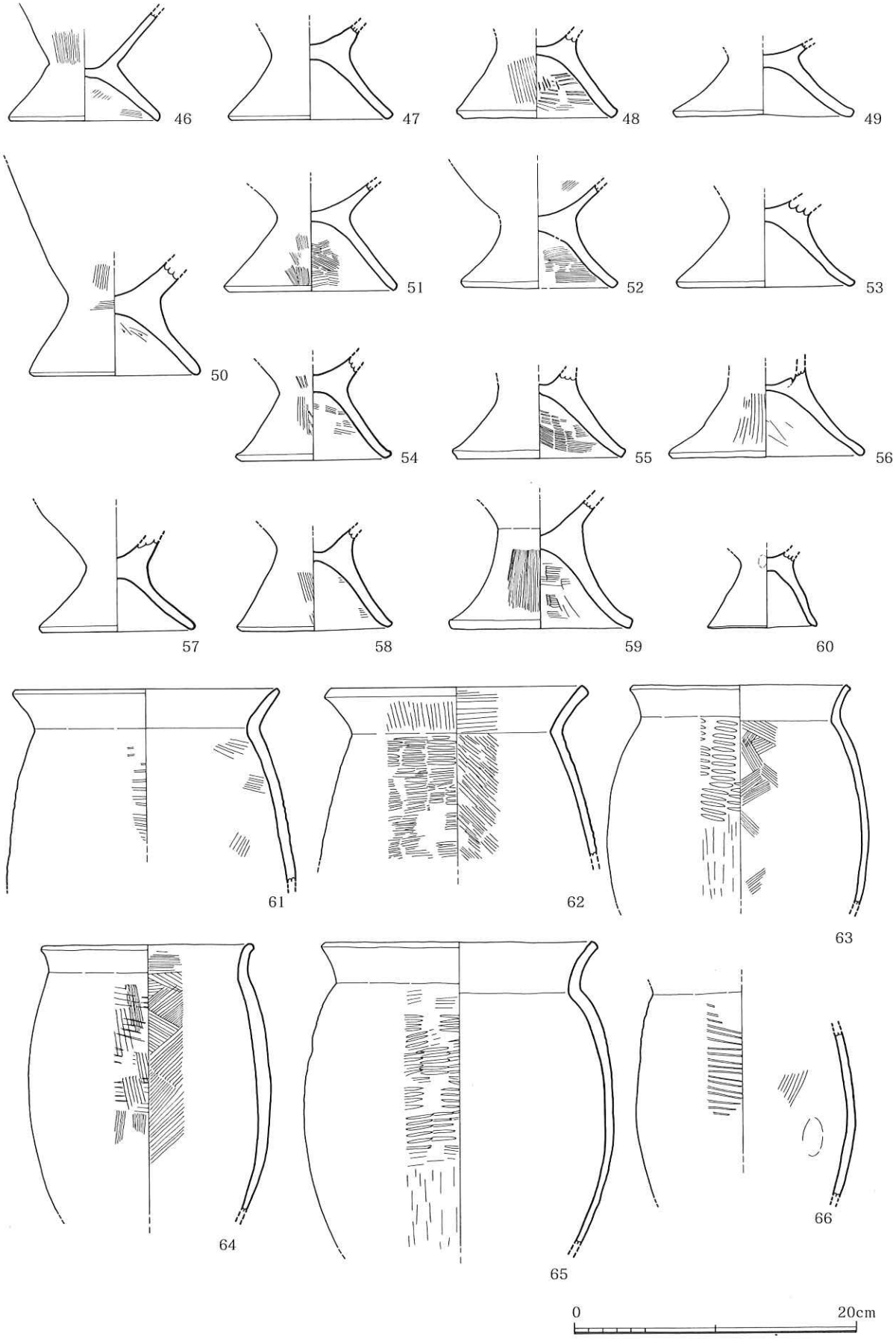


Fig. 33 土器 3

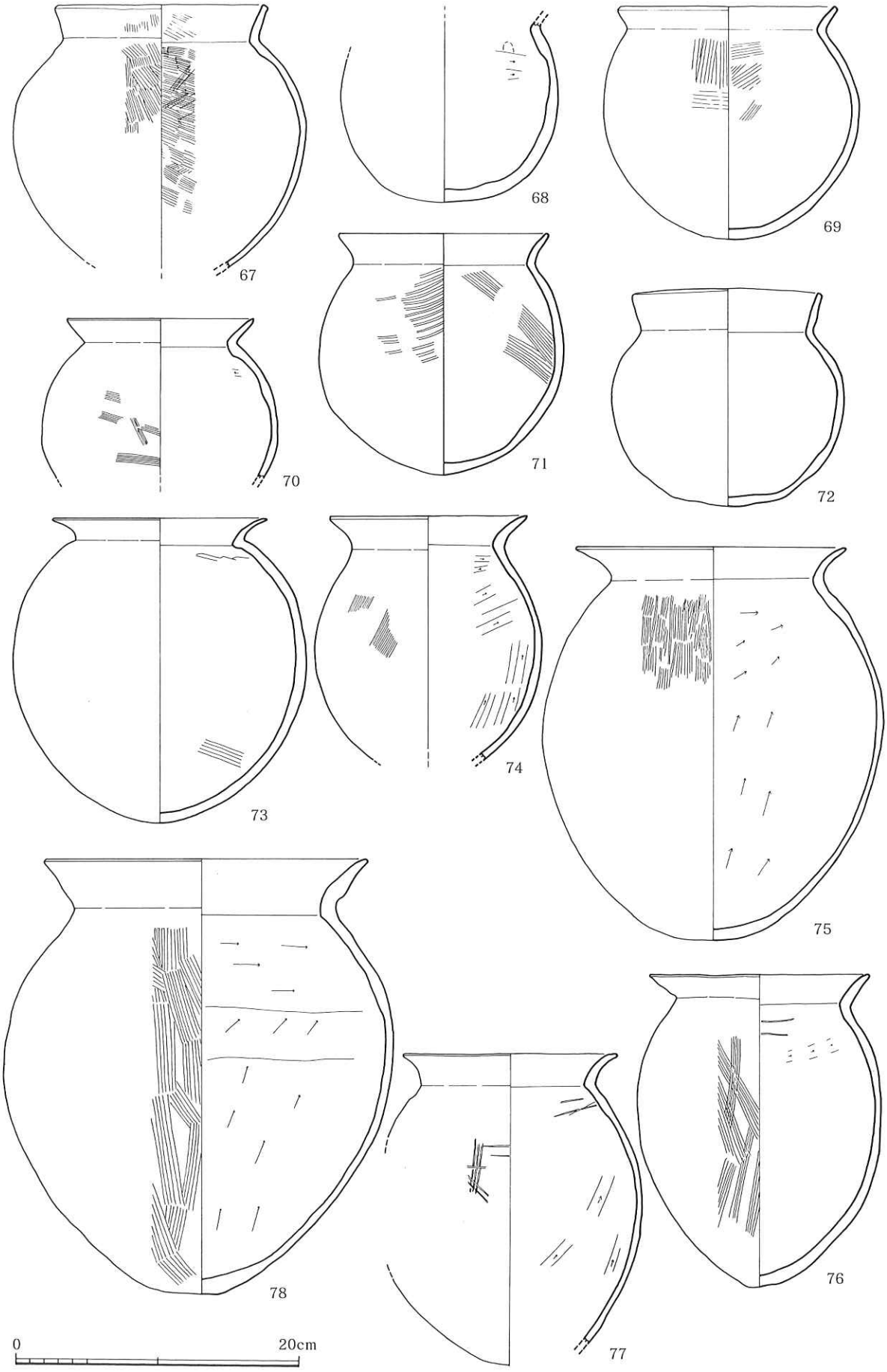


Fig. 34 土器 4

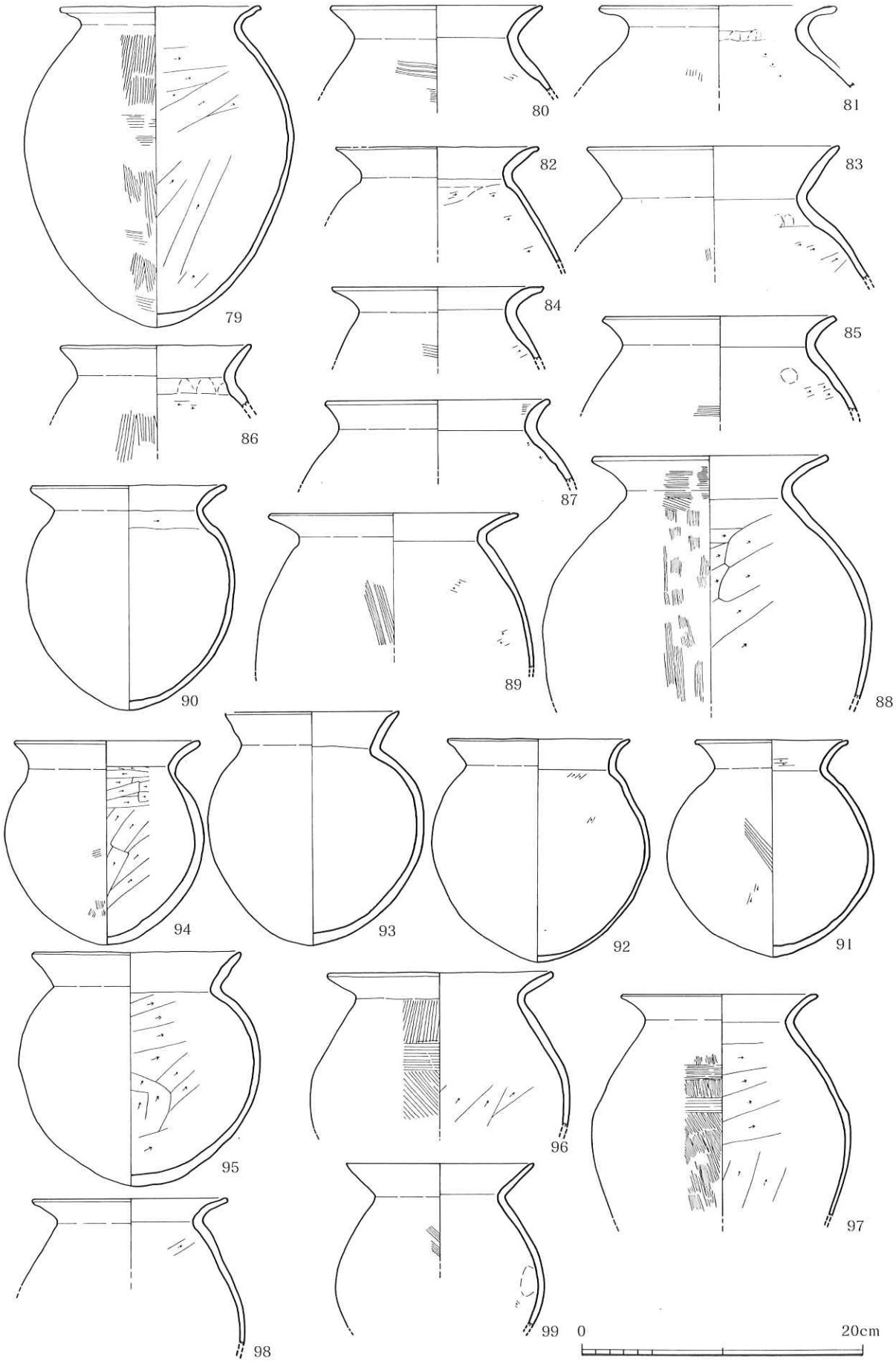


Fig. 35 土器 5

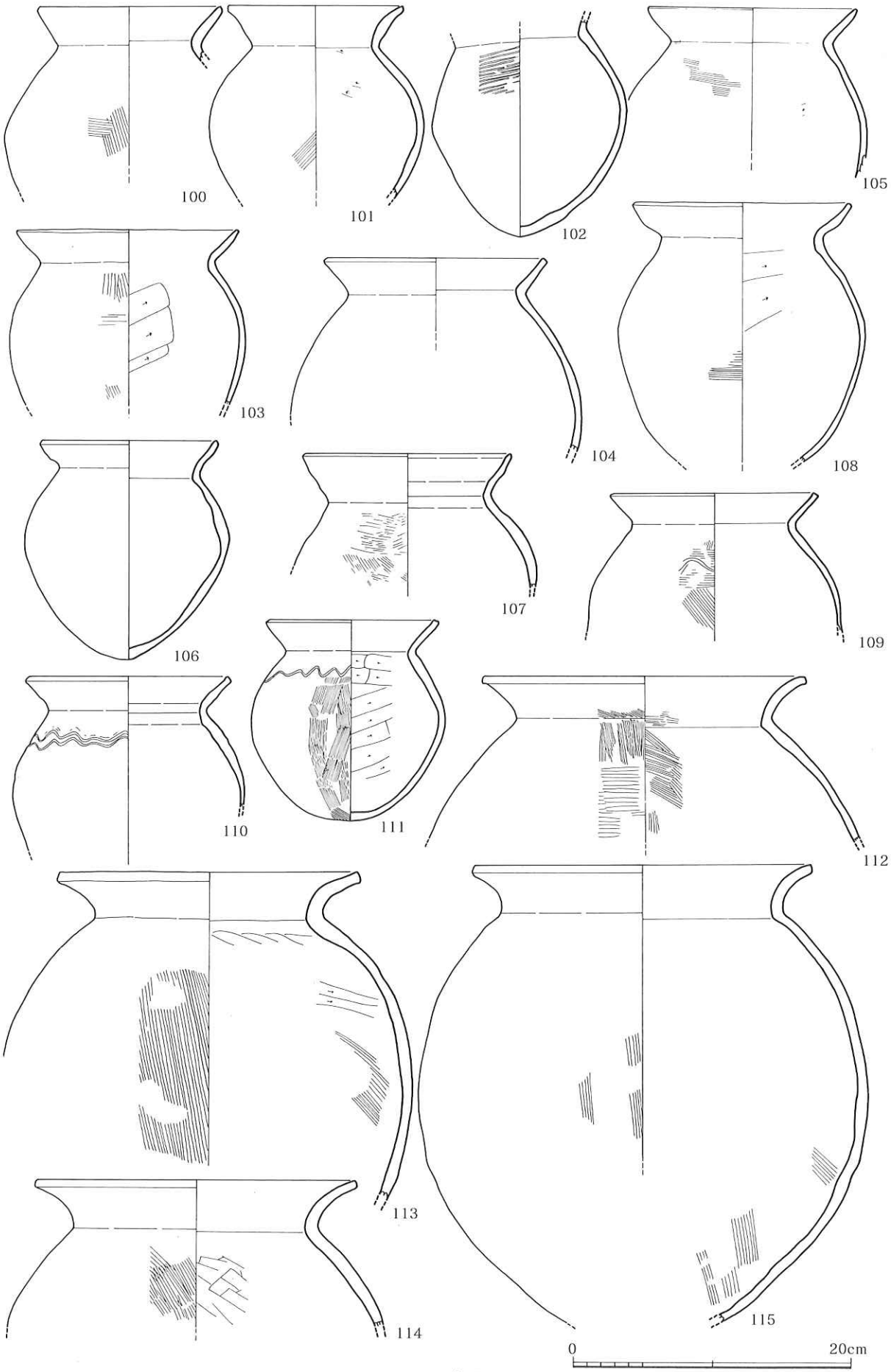

100
101
102
105
103
104
108
106
107
109
110
111
112
113
114
115
0
20cm

Fig. 36 土器 6

壺（Ｆｉｇ３７～４０　１１８～１６７）

壺は５０点掲載している。出土地点の内訳はＳＤ－０８が４０点、ＳＤ－０９が９点、ＳＫ－３５が１点、出土地点不明のものが１点である。大部分が口縁部のみの出土である。

ＳＤ－０８出土土器（１１８～１２５、１２８～１３５、１３９～１４９、１５２、１５６～１６２、１６４）

１１８から１２５は複合口縁壺である。１１８は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部は短くほぼ垂直に立ち上がり、その後くの字に屈曲しラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で最も外側に張り出し、そこから内側へ屈曲し、内湾しながら短く立ち上がる。器壁は厚く端部は丸みを帯びる。口縁部に竹管文と沈線文が交互に施文され、胴部と頸部の境には格子目状の施文を施した帯状の突帯が貼付される。１１９は胴部上位以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はやや内傾気味に短く立ち上がり、そこから大きくラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で最も外側に張り出し、そこから屈曲し内傾気味に短く立ち上がる。器壁は厚く端部は角張り内傾する。口縁部に波状文を２条施文し、頸部には断面三角形の刻目突帯を貼付する。

１２０は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はくの字に屈曲してやや外傾気味に立ち上がり、その後大きくラッパ状に開く。頸部と口縁部の境で外見上は屈曲し、わずかに外反しながらほぼ垂直に立ち上がるが、内面はややくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。

１２１は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部は朝顔状に開き、頸部と口縁部の境では口縁が下方へ突出する。外見上はそこからやや屈曲し外傾気味に短く立ち上がるが、内面はややくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。１２２は、頸部の中位あたり以下を欠損している。頸部残存部は朝顔状に開き、頸部と口縁部の境では口縁が下方へ突出する。外見上はそこからやや屈曲しやや外傾気味に短く立ち上がるが、内面はわずかにくぼむ程度で端部は丸みを帯びる。１２３は胴部中位以下を欠損しているが、残存部から球形の胴部を持つものと思われる。頸部でくの字に屈曲し大きく開く。口縁部下で外見上は複合口縁の形状を呈するが、内面は口縁端部まで直線的に開き端部はやや角張る。１２４は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部から緩やかに開き、中程で屈曲しそこからさらに開く。屈曲部には突帯状の突出が見られる。端部は外傾しやや丸みを帯びる。１２５は１２４と同様の形状を呈するが、中程での屈曲がやや弱く端部が角張る。１２８から１３４は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。１２８は胴部と頸部の境のしまりが弱く、そこから内湾しながら立ち上がり、口縁直下で短く外反する。口縁端部は外傾し角張る。１２９は、頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。口縁端部は下半部がやや外側に突出する。頸部と胴部の境にハケ状工具の端部による刻目を施した断面三角形の突帯を貼付する。１３０は頸部はやや外傾気味に立ち上がり、口縁直下で大きく外反する。口縁端部は角張り斜文を連続して施す。１３１は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。口縁端部は角張り斜文を連続して施す。１３２は頸部は垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。１３３は頸部は垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。端部は角張りやや下方へつまみ出される。胴部と頸部の境にヘラ状工具の先端で列点文が施される。１３４は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し短く開く。端部はやや下

方に突出し斜文を連続して施す。１３５は胴部下位から底部にかけて欠損している。胴部は縦長の球形を呈し、胴部と頸部の境は強くしまる。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁直下で外反し大きく開く。端部はやや上方につまみ出され斜文を連続して施す。胴部と頸部の境にはヘラ状工具の先端で列点文が施される。１３９と１４０は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。１３９は頸部は外傾気味に開き、口縁直下でわずかに外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。１４０は頸部はやや外傾気味に開き、口縁直下でわずかに外反して短く開く。端部は角張り下方にわずかに肥厚する。１４１は胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有すると思われる。頸部は短くほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部はやや丸みを帯び竹管文を連続して施す。胴部と頸部の境にも同様に竹管文を連続して施す。１４２は胴部中位以下を欠損しているが、胴部は縦長気味の球形を呈するものと思われる。頸部は外傾しながら立ち上がり口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張りわずかに下方に突出する。胴部と頸部の境には棒状工具による列点文が施される。１４３から１４８は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。１４３は頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部はやや丸みを帯びる。１４４は頸部は外傾しながら短く立ち上がり、その後わずかに外反して短く開く。端部はやや丸みを帯びる。１４５は頸部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張り下方がわずかに外側へ突出する。１４６は頸部はわずかに外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は角張り中央部がわずかにくぼむ。１４７は頸部はやや外傾しながら立ち上がり口縁部直下で外反して開く。端部は丸みを帯び、胴部と頸部の境には列点文が施される。１４８は頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反して開く。端部は内傾し下方が外側に突出する。胴部と頸部の境には列点文が施される。１４９は胴部中位以下を欠損しているが著しく長胴な胴部を有すると思われる。頸部は外傾しながら短く立ち上がりその後外反して開く。口縁端部は上下に肥厚し中央がややくぼむ。胴部と頸部の境には断面三角形の刻目突帯を貼付し、口縁端部にはハの字状の施文を連続して施す。１５２は胴部下位以下及び頸部から口縁部にかけて欠損しているが、縦長の球形の胴部を有する壺と思われる。１５６から１６０は頸部から口縁部にかけてやや外傾気味に短く立ち上がり口縁部は開かない。口縁端部は丸みを帯びるものが多く、胴部は球形を呈するものと思われる。１６１と１６２は胴部中位以下を欠損しているが扁平な球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境のしまりは強くそこからほぼ直線的に短く開く。端部はやや丸みを帯びる。１６４は球形の胴部に平底気味の丸底を有する。胴部と頸部の境のしまりは強く、頸部はそこからほぼ垂直に短く立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。端部は下方がやや外側へ張り出す。胴部と頸部の境には突帯状の段を有する。

ＳＤ－０９出土土器（１２６、１２７、１３６～１３８、１５３～１５５、１６３、１６５～１６７）

１２６は複合口縁壺である。胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境はよくしまり、頸部はそこから短く直立する。口縁部直下でくの字に屈曲して開き、その後さらに段状に屈曲して開く。口縁端部はやや丸みを帯びる。１２７は複合口縁壺の口縁部である。口縁部直下でほぼ直角に屈曲しそのまま直立する。端部は丸みを帯びる。１３６から

１３８は頸部以下を欠損している。１３６は頸部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で外反し大きく開く。端部は角張り口唇部に部分的に縦方向の沈線を連続して施す。１３７は頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部直下で外反して大きく開く。端部は角張り口縁部内側に二個一組の円形の貼付文を貼付する。１３８はほぼ垂直に立ち上がる頸部から外反して大きく開く口縁部を有する。口縁端部は角張り、口縁部内側に二個一組の円形の貼付文を五箇所に貼付し、その間に櫛描の文様を施文する。１５３と１５４は、胴部上位以下を欠損しているが球形の胴部を有するものと思われる。頸部は強くしまり、そこからやや外反気味に開く。端部はやや丸みを帯びる。１５５は胴部中位以下を欠損しているが球形の胴部を有するものと思われる。頸部でくの字に屈曲しやや内湾しながら開き端部は角張る。１６３は胴部上位以下を欠損しているが、扁平な球形の胴部を有するものと思われる。胴部と頸部の境のしまりは強く、そこからほぼ直線的に開く。口縁端部はやや丸みを帯びる。肩部に櫛描波状文を施し、その上に櫛描文をほぼ水平に施す。１６５と１６６は長頸壺と思われる。１６５は底部は丸底で、胴部は中位で大きく外側へ張り出し頸部との境で強くすぼまり、断面形状はそろばん玉状を呈する。頸部はそこからほぼ直立するものと思われるが、頸部から口縁部にかけて欠損しているため詳細は不明である。１６６は底部は平底気味の丸底で、胴部はやや扁平気味の球形を呈する。胴部と頸部の境のしまりは強く、頸部はやや外傾気味に立ち上がる。口縁部の形状は欠損のため不明であるが、頸部からそのまま直線的に立ち上がるものと思われる。１６７は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はほぼ垂直に長く立ち上がり、口縁直下で屈曲しやや内湾気味に短く開く。端部は角張る。

ＳＫ－３５出土土器（１５０）

１５０は胴部上位以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。胴部と頸部の境のしまりは強く、そこからやや外傾気味に立ち上がり、口縁部直下で外反し短く開く。口縁端部は角張りやや下方に突出する。胴部と頸部の境には断面三角形の突帯を貼付し、その上下に列点文を施す。

出土地点不明土器（１５１）

１５１は頸部以下を欠損しているため胴部及び底部の形状は不明である。頸部はやや外傾気味に立ち上がり口縁部直下で外反して短く開く。端部は上下にわずかに肥厚し口唇部には縦方向の沈線を連続して施す。胴部と頸部の境には断面三角形の突帯を貼付し、その下方に列点文を施す。

鉢（Ｆｉｇ４０～４３　１６８～２７０）

鉢は１０３点掲載している。出土地点の内訳はＳＤ－０８が５４点、ＳＤ－０９が３８点、ＳＫ－３５が６点、出土地点不明のものが５点である。

ＳＤ－０８出土土器（１６８～１８０、１８６、１９９～２０１、２０３、２０５、２０６、２１５、２１６、２１８、２２２、２２４、２２５、２２７、２２９、２３０、２３７、２４０～２４６、２５２～２５５、２６０～２７０）

１６８から１７２は、丸底もしくはやや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部は短く、直立もしくはわずかに開き、端部は丸みを帯びる。１７３、１７４は、やや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部はわずかに丸みを帯びる。１７５から１７８は、やや尖底気味の丸底に、浅く扁平な胴部を有する。口縁部は屈曲して内湾気

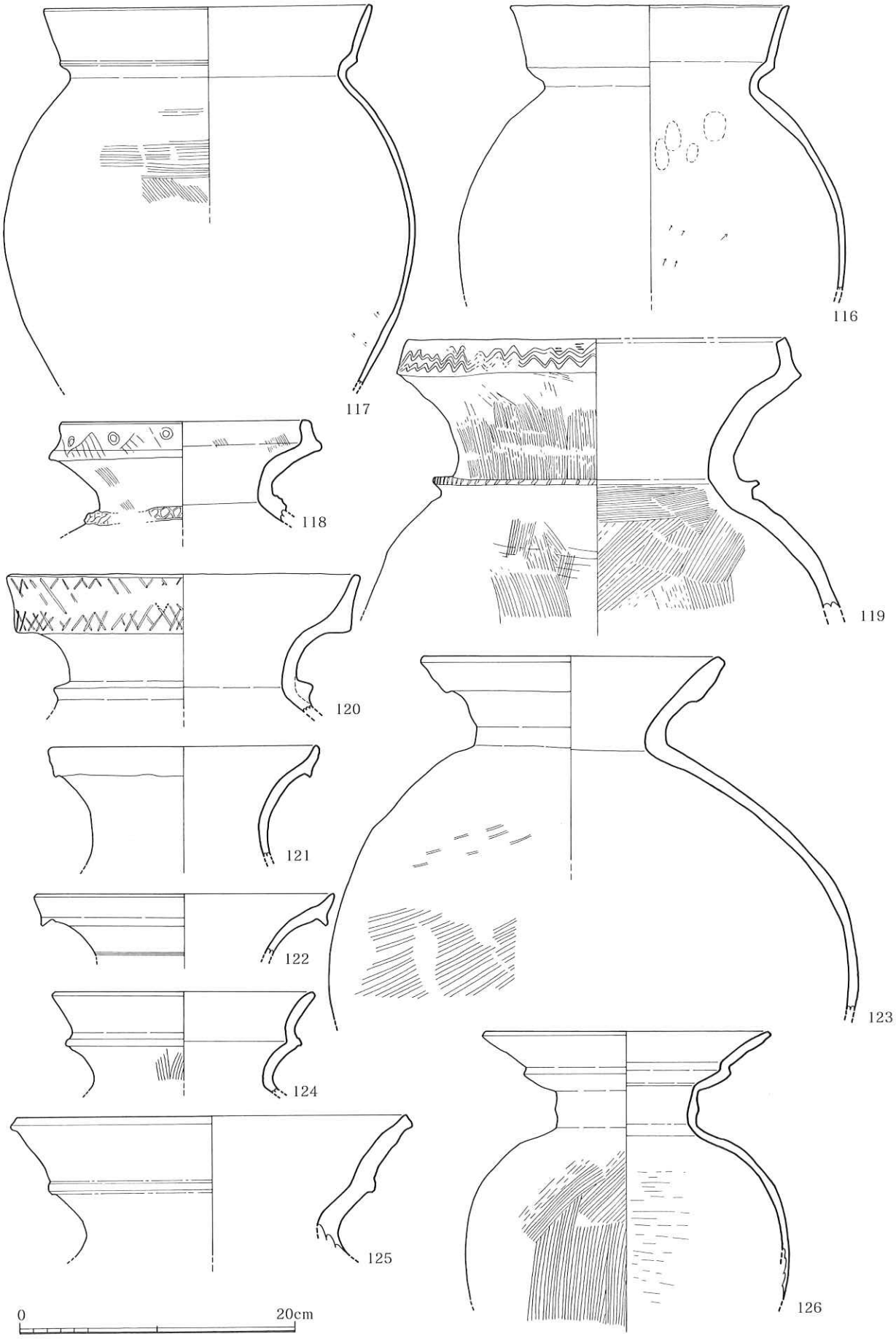


Fig. 37 土器 7

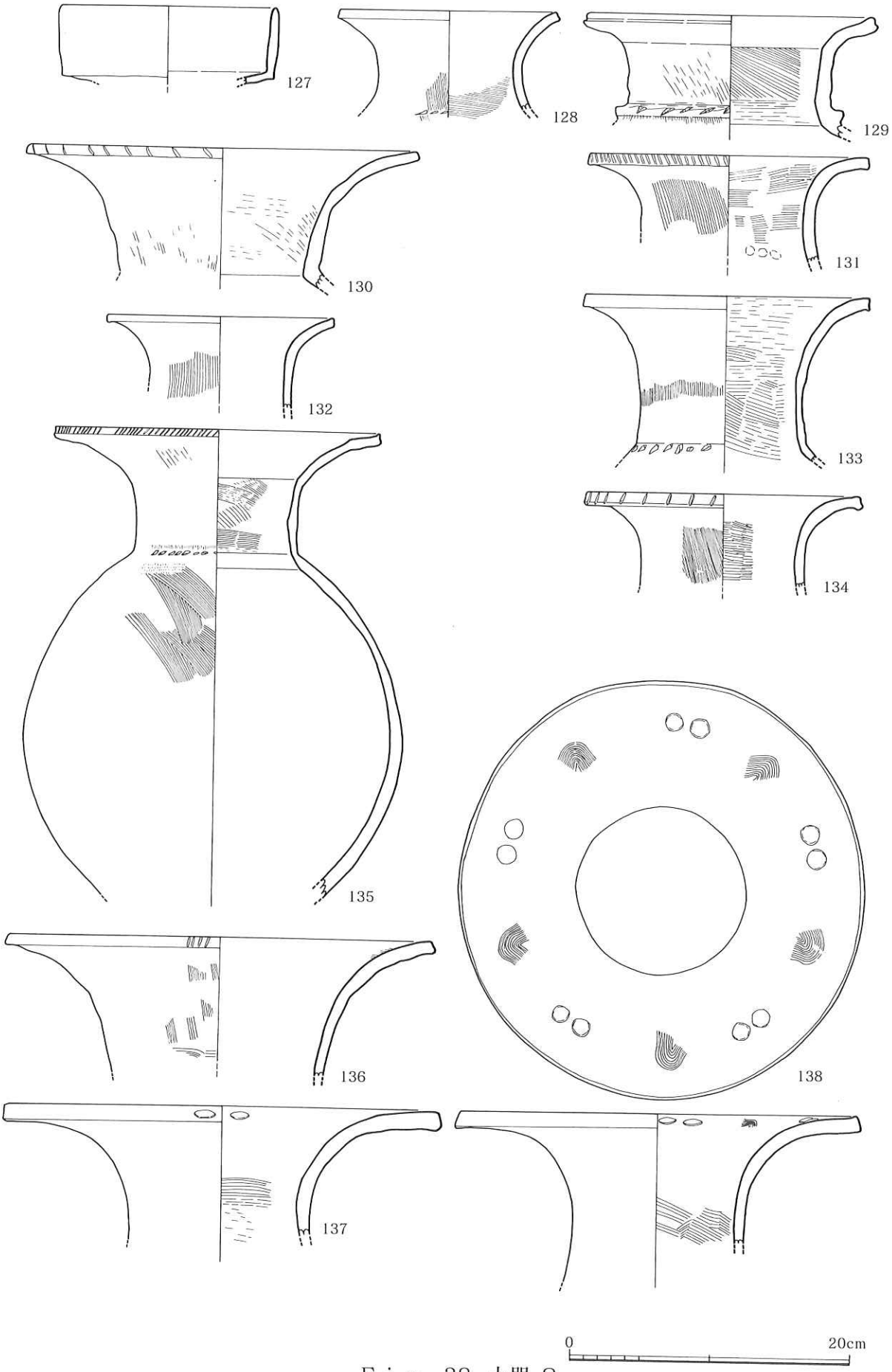


Fig. 38 土器 8

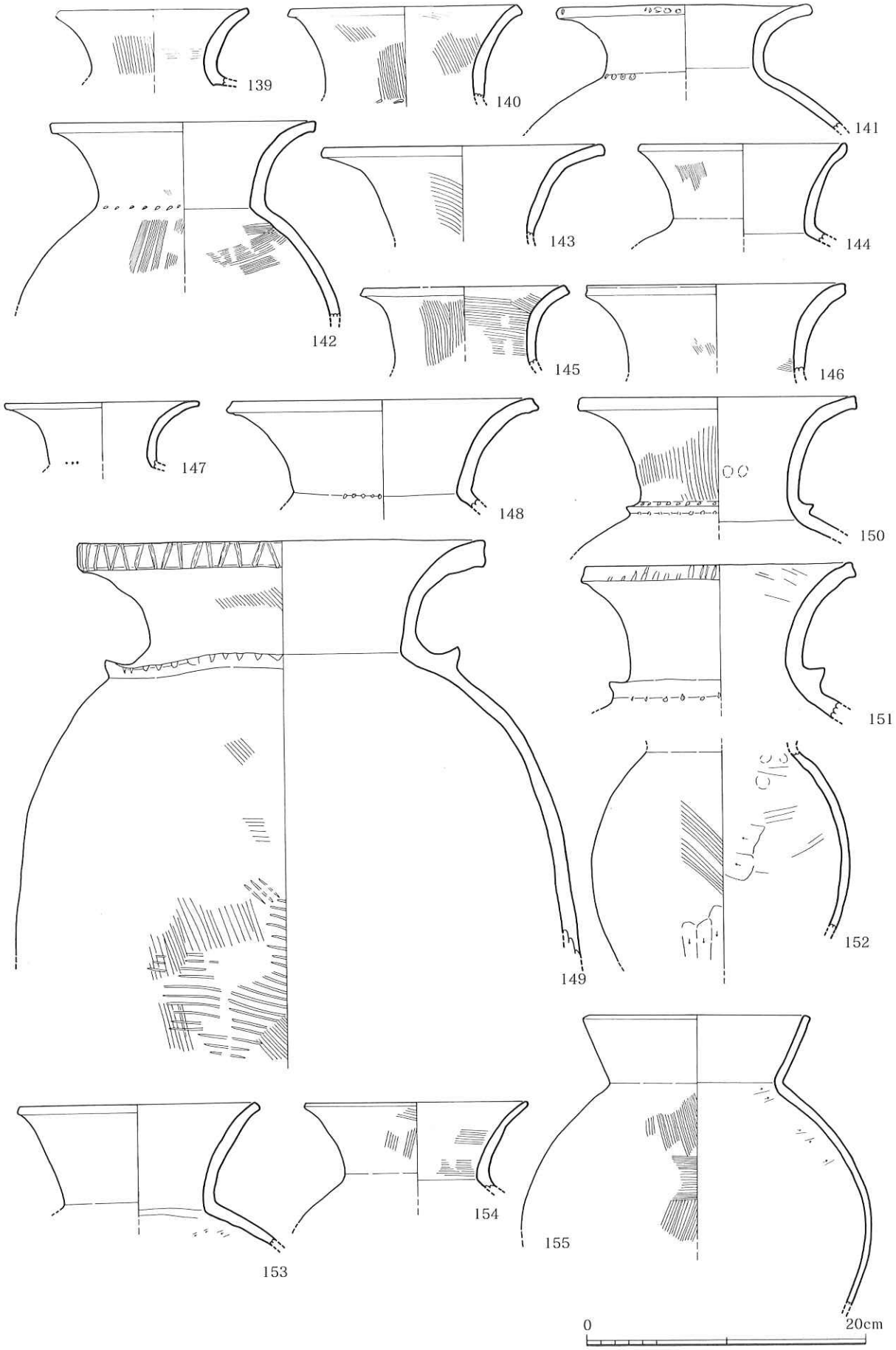

139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
0
20cm

Fig. 39 土器 9

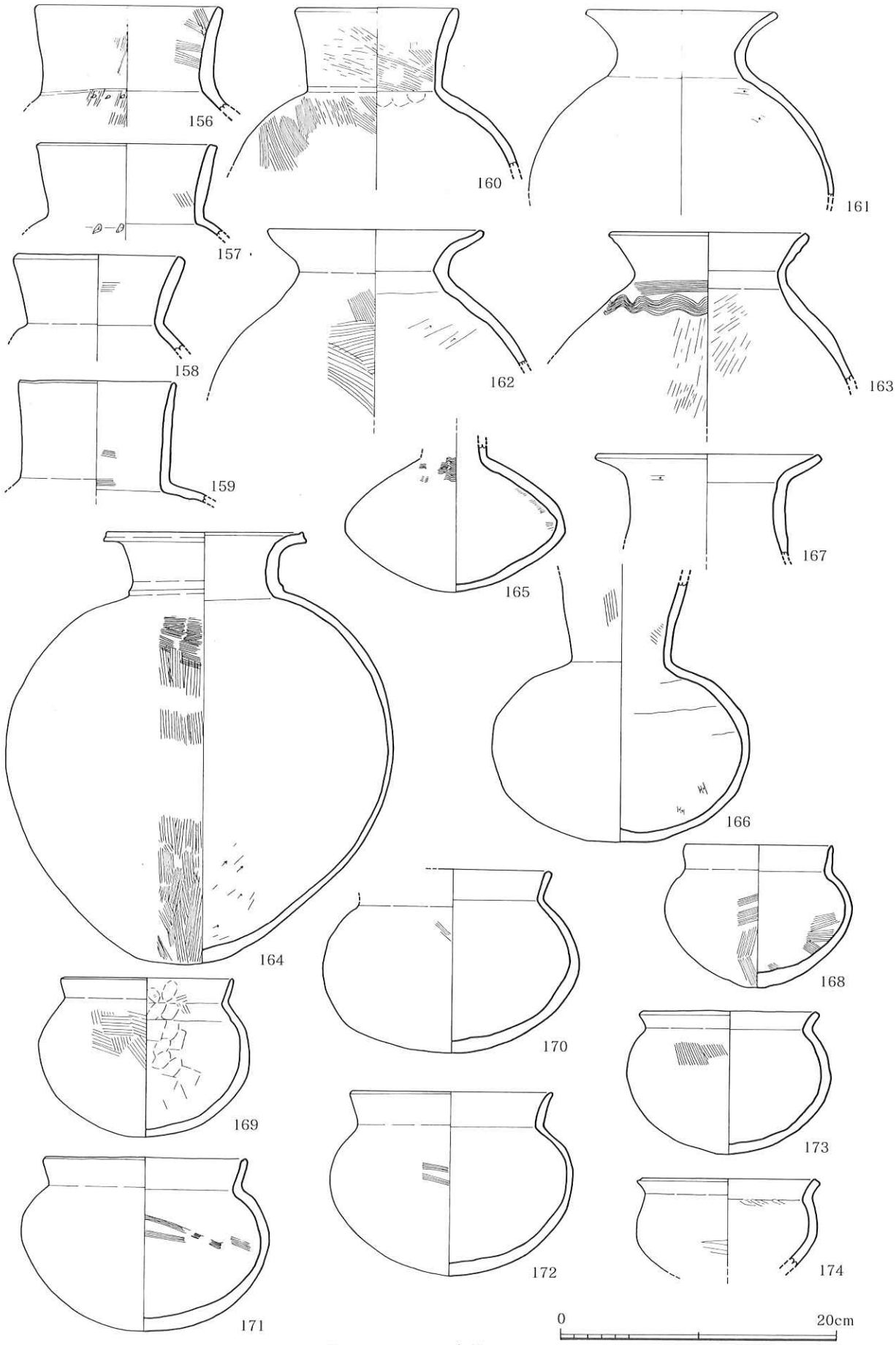

156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
0
20cm

Fig. 40 土器10

味に立ち上がる。１７５はほぼ垂直に立ち上がり、１７６、１７７はやや開き気味である。両者とも端部はやや丸みを帯びる。１７８は口縁部を欠損しているため不明である。１７９は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有する。口縁部は頸部で多少屈曲して外傾気味に開くが、端部は欠損のため不明である。１８０は尖底気味の丸底に、やや扁平な球形の胴部を有する。口縁部は短く直立し端部は丸みを帯びる。１８６は胴部中位以下を欠損しているが、浅く扁平な胴部を有すると思われる。口縁部はくの字に屈曲して短く開き端部は丸みを帯びる。１９９は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有し、口縁部は短く直立し端部はやや丸みを帯びる。２００は丸底の底部に扁平な胴部を有する。最大径を下方に有するためやや下膨れ気味の形状を呈する。口縁部は頸部で多少屈曲し、やや外傾気味に短く開き端部は丸みを帯びる。２０１は丸底の底部に浅く扁平な胴部を有する。口縁部は長く直立し端部は丸みを帯びる。２０３は胴部中位以下を欠損しているが、球形の胴部を有するものと思われる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開き、端部はやや丸みを帯びる。２０５は、底部は平底で胴部は中位やや上に最大径を有する。口縁部は頸部で多少屈曲し、短く外傾気味に開き端部は丸みを帯びる。２０６は底部を欠損しているが尖底気味の丸底を呈するものと思われる。胴部は中位やや上で最大径となり、そこから口縁部に向かってややすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し短く開く。端部は丸みを帯びる。２１５は大型の鉢である。底部は平底で、そこから内湾しながら立ち上がり胴部上位で最大径となる。頸部で多少すぼまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は角張る。２１６は胴部上位以下を欠損している。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は丸みを帯びる。２１８は山陰系の複合口縁鉢である。胴部下位以下を欠損している。２２２は胴部中位以下を欠損しているが、半球形の胴部を有するものと思われる。口縁部は小さく外反する程度で端部は角張る。２２４は胴部下位以下を欠損している。口縁部は胴部から直行してそのまま開き、端部はやや肥厚し丸みを帯びる。２２５は丸底の底部から丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部直下でわずかに外反する。口縁部は端部に向かって薄くなり丸みを帯びる。２２７は平底の底部から丸みを帯びてやや開き気味に浅く立ち上がる。端部は薄くなり丸みを帯びる。２２９は浅い半球形を呈し、端部は角張る。２３０は浅めの半球形を呈し、端部は薄くなり丸みを帯びる。２３７は丸底の底部からやや丸みを帯びながら大きく開く。口縁端部はやや薄くなり丸みを帯びる。２４０は底部を欠損しているが半球形を呈するものと思われる。口縁端部はやや外傾し角張る。２４１は浅い半球形を呈する。胴部中位から端部にかけて薄くなり、端部は外傾し角張る。２４２は丸底の底部から多少丸みを帯びながら開く。端部は外傾し角張る。２４３は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位で最大径となる。そこから端部に向かって丸みを帯びながら多少すぼまる。口縁端部は内傾し角張る。２４４は浅い半球形を呈するが、口縁端部直下でわずかに内傾する。端部はほぼ水平で角張る。２４５は平底気味の底部から多少開きながら立ち上がり、口縁部直下でわずかに開き端部は丸みを帯びる。２４６は丸底の底部から端部に向かって多少開きながら立ち上がる。端部は多少薄くなり丸みを帯びる。２４８は丸底の底部から丸みを帯びながら開き、胴部中位から直立する。端部は丸みを帯びる。２４９は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位からすぼまる。端部は内傾し角張る。２５２から２５５は小型の脚付鉢である。２５２は脚部を欠損している。胴部は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。２５３はハの字に開く短い脚を有し、胴部は多少丸みを帯びやや開きながら立ち上がる。端部は丸みを帯びる。２５４は脚部を欠損して

いる。胴部は半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。２５５は浅い半球形を呈するが口縁部直下でやや外側へ開く。端部は丸みを帯びる。２６０は傾斜した平底から丸みを帯びて立ち上がり、口縁直下で外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。２６１から２７０は大型の脚付鉢の脚部である。２６１から２６７はハの字に短く開き、脚部の裾は外反して開く。外底面と脚部との境は明瞭で、脚端部は角張るか多少丸みを帯びる。２６５には3箇所に円孔が穿たれており、２６１、２６２，２６７は二個一対の円孔が同じく3箇所に穿たれている。２６８から２７０はやや高めの脚で、ハの字に開き裾端部はやや丸みを帯びる。

ＳＤ－０９出土土器（１８１～１８５、１８７～１９８、２０４、２０７～２１１、２１３２１４、２１９～２２１、２１３、２１４、２１９～２２１、２２３、２２６、２２８、２３１、２３４～２３６、２３８、２３９、２５０）

１８１は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開き、端部は丸みを帯びる。１８２から１８５は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がる。胴部上位で最大径となり、そこから頸部に向かって多少すぼまる。口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は薄丸みを帯びる。１８７から１８９はやや尖底気味の丸底から多少丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、頸部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し短く開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。１９０は扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。１９１から１９４は浅い球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し短く開き、端部は丸みを帯びる。１９５は浅く扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに内湾しながら開く。端部は丸みを帯びる。１９６は扁平な球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲しやや外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。１９７は尖底気味の丸底からやや丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位で最大径となり、そこから頸部に向かって多少すぼまる。口縁部はくの字に屈曲し、端部は丸みを帯びる。１９８は尖底気味の丸底からやや丸みを帯びて立ち上がる。胴部上位で最大径となり、そこから頸部に向かって短くすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し、端部は薄くなり角張る。２０４は球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、外反しながら開く。端部は薄くなり丸みを帯びる。２０７は深い半球形を呈し、口縁部直下でわずかに開く。端部は丸みを帯びる。２０８は浅い半球形を呈する。口縁直下でわずかに開き端部は角張る。２０９は尖底気味の丸底で、丸みを帯びながら立ち上がり頸部でわずかにすぼまる。口縁部は多少くの字に屈曲し、内湾しながらやや開き気味に立ち上がる。端部は丸みを帯びる。２１０は半球形の胴部を有し、頸部でわずかにすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。２１１は平底気味の丸底で、胴部は浅く頸部でわずかにすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し開く。端部は丸みを帯びる。２１２は扁平な半球形の胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、端部は丸みを帯びる。２１３は平底気味の丸底で、やや丸みを帯びて立ち上がる。胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってややすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し開き、端部は薄くなり丸みを帯びる。２１４は、丸底の底部から頸部に向かってわずかに丸みを帯びながら直立する胴部を有する。口縁部はそこから外反して短く開く。端部は丸みを帯びる。２１９は山陰系の複合口縁鉢である。２２０、２２１は浅い半球形の胴部を有し、口縁部は外反して開く。２

２１は口縁部がわずかに内湾する。両者とも端部は丸みを帯びる。２２３は半球形の胴部を有し、口縁部は多少外反して開く。端部は丸みを帯びる。２２６は平底の底部から多少外傾しながら立ち上がる胴部を有する。端部は薄くなり角張る。２２８は平底の底部から丸みを帯びて開く浅い胴部を有する。端部は丸みを帯びる。２３１は半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。２３４から２３６は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。２３８は丸底の底部から直線的に開く浅い胴部を有し、端部は丸みを帯びる。２３９は丸底の底部から直線的に立ち上がる胴部を有し、端部は角張る。

２５０はやや尖底気味の丸底からやや外傾気味に立ち上がり、口縁端部直下でわずかにすぼまる。端部は角張る。

ＳＫ－３５出土土器（２０２、２１７、２３２、２３３、２４７、２５６）

２０２は浅い胴部に著しく長大な口縁部を有する。底部は尖底気味の丸底で、胴部中位やや上で最大径となり、そこから頸部に向かってすぼまる。口縁部はやや外傾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。２１７は大型の鉢である。胴部中位以下を欠損しているため胴部の形状は不明である。胴部最大径部から頸部に向かって多少すぼまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。端部は角張る。２３２、２３３は半球形の胴部を有し、端部は薄くなり丸みを帯びる。２４７は平底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。２５６は小型の脚付鉢であるが、脚部は欠損している。胴部は浅い半球形を呈し、端部は丸みを帯びる。

出土地点不明土器（２１２、２５１、２５７～２５９）

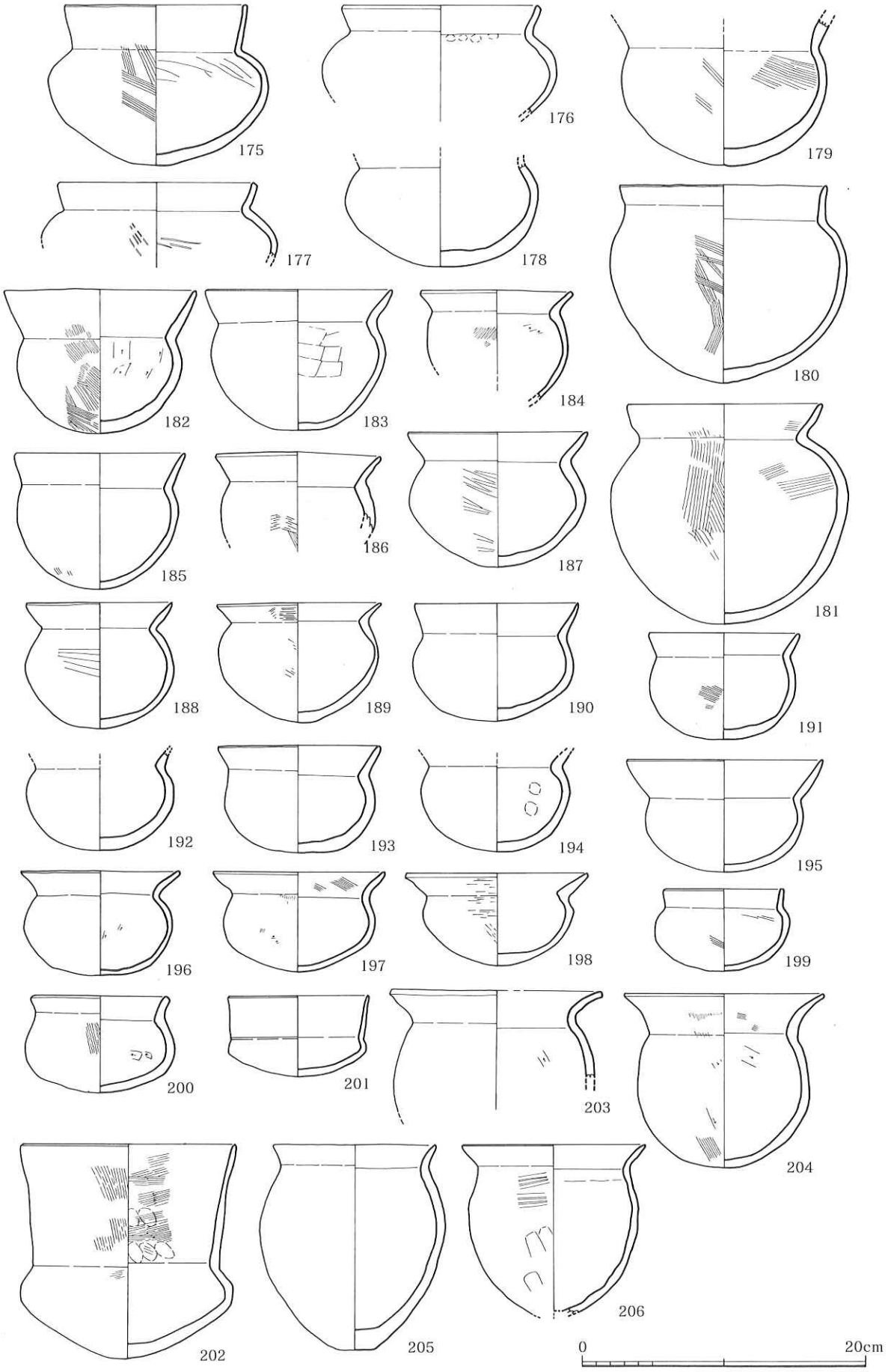
２１２は浅い半球形の胴部を有し、口縁部は外反してわずかに内湾気味に開く。端部は丸みを帯びる。２５１は平底の底部から丸みを帯びて立ち上がり端部は丸みを帯びる。２５７、２５８は小型の脚付鉢である。２５７は短くハの字に開く脚を有し、胴部は半球形を呈する。端部は丸みを帯びる。２５８は脚部を欠損しているが、ハの字に開くやや高めの脚を有するものと思われる。胴部は半球形を呈し、口縁端部はやや薄くなり丸みを帯びる。２５９は高台状の平底を有し、胴部は半球形を呈する。端部は角張る。

高坏（Ｆｉｇ４４～４６　２７１～３０７）

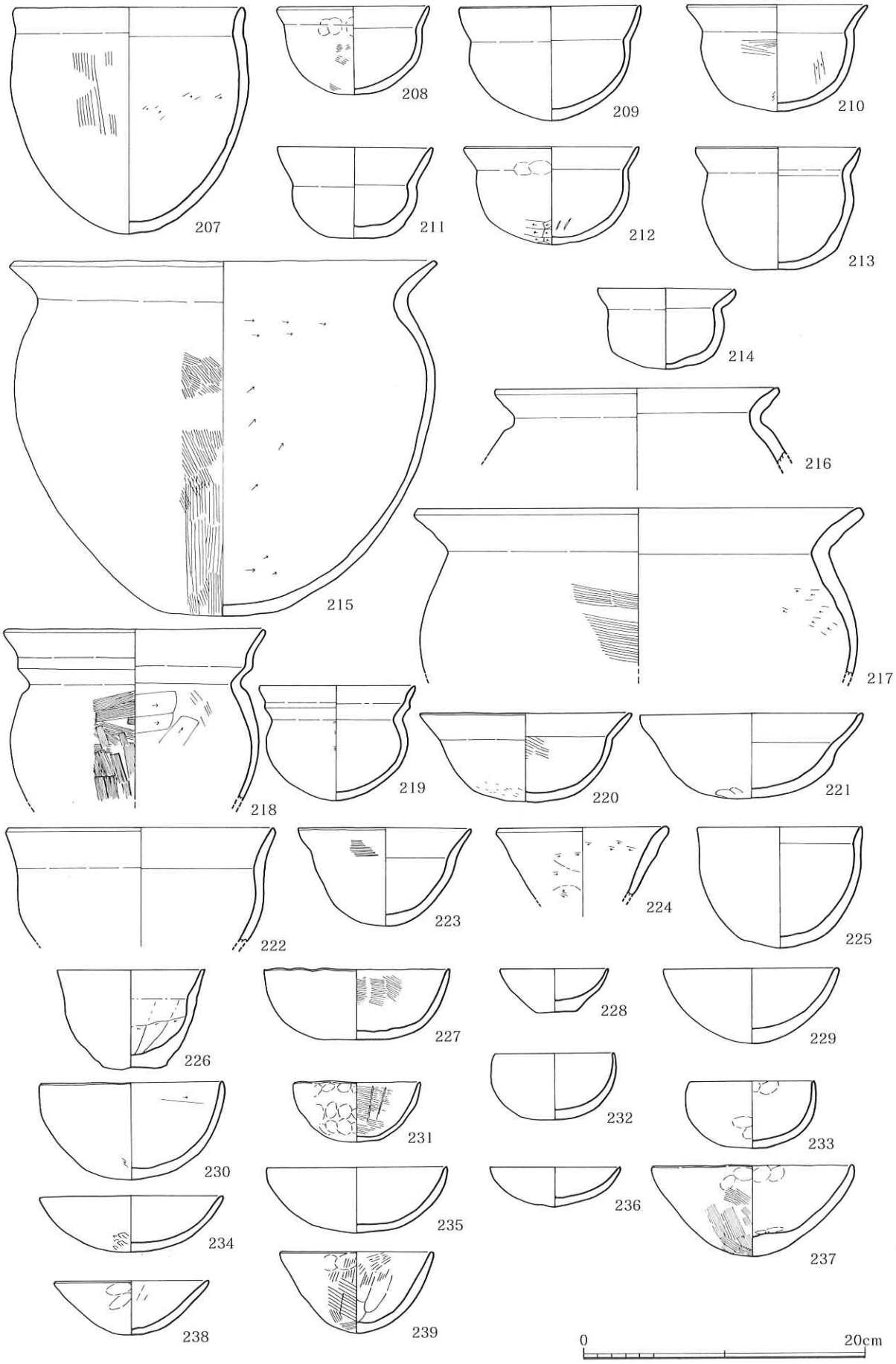
高坏は３７点掲載している。出土地点の内訳は、ＳＤ－０８が２６点、ＳＤ－０９が９点、ＳＤ－３５が２点である。

ＳＤ－０８出土土器（２７１～２７５、２７７～２９５、２９８、３０５）

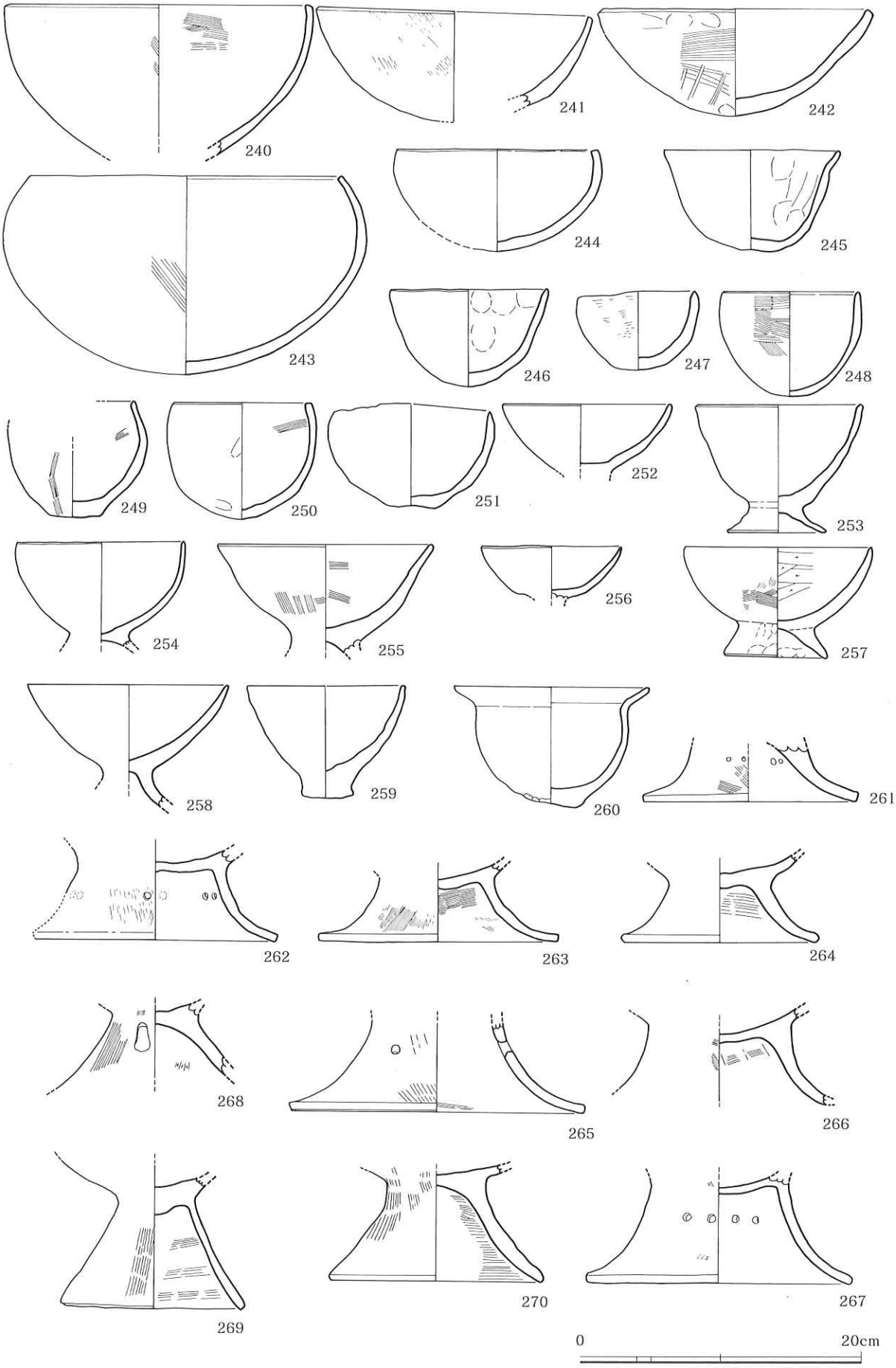
２７１から２７５は大型の高坏である。脚部は、ほぼ直立する筒部に屈曲して拡がる裾部を有し、裾部には円孔が穿たれている。坏部は浅く、口縁部との間に明瞭な段を有し、上半部は外反して開く。口縁部はやや肥厚し丸みを帯びる。脚部は直立する筒部にハの字に開く裾部が付く。裾上部に円孔を有する。２７７、２７８は前者より小型化し、坏部と口縁部の間の段が不明瞭になる。口縁部は端部に向かって薄くなり丸みを帯びる。２７９から２８２は、深めの丸みを帯びた坏部を有し、口縁部はやや屈曲して開き端部は角張る。脚部は欠損しているものが多いが、ハの字に開き端部付近でさらに開く形状を呈し、端部は角張るものと思われる。２８３から２８５は浅い半球形の坏部から口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は角張る。脚部の形状は欠損のため不明である。２８６は坏、脚部ともに段を有する。坏部は脚部から屈曲して開き、その後短くほぼ直立する。口縁部はさらに屈曲して拡がり端部は角張る。脚部は筒部が直立し、裾部は筒部から短く水平に開


175
176
179
177
178
180
182
183
184
185
186
187
181
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
203
204
202
205
206
0
20cm

Ｆｉｇ．41 土器１１


207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
0
20cm

Ｆｉｇ．42 土器１２


240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
0
20cm

Ｆｉｇ．43 土器１３

き、段を形成してそこから内湾しながら拡がる。２８７，２８８は２８６と同様に坏部に段を有するが、脚部については欠損のため不明である。２８９，２９０は２８６と同様に脚部の裾に段を有する。２８９は裾部の下段に、２９０は裾部の上・下段に円孔を有する。２９１から２９４は、丸みを帯びた坏部に大きく開く口縁部を有し、端部は丸みを帯びる。脚部は、裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部の形状は欠損により不明である。２９５は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから外半気味に開き端部は丸みを帯びる。脚部は裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部は欠損のため不明である。２９８は、坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから直線的に大きく開き、端部は丸みを帯びる。

ＳＤ－０９出土土器（２７６、２９６、２９７、２９９、３００、３０２～３０４、３０７）

２７６は大型高坏の脚部である。筒部はほぼ直立し、ハの字に開く裾部が付く。裾上部に円孔を有する。２９６、２９７は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、２９６は口縁端部付で外反して開き２９７は内湾しながら開く。両者とも端部は丸みを帯びる。脚部は裾部に向かって多少開く筒部を有するが、裾部は欠損のため不明である。２９９、３００、３０２は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから屈曲して直線的に大きく開き、端部は丸みを帯びる。脚部は、裾部に向かって多少開く筒部に屈曲して大きく開く浅い裾部が付く。３０３、３０４は前者と同様の脚部である。３０７は脚裾部を欠損している。坏部は丸みを帯びて拡がる底部から内側に屈曲し、内湾しながら立ち上がり、端部は角張る。脚部は裾部に向かってやや内湾気味に開く。坏屈曲部に刻目を連続して施し、その上部に二個一対の円形の貼付文を4箇所に貼付する。また脚の上部には円孔を穿っている。

ＳＫ－３５出土土器（３０１、３０６）

３０１は坏部の上半部と下半部の境が明瞭で、そこから屈曲し大きく開き、端部は丸みを帯びる。

小型丸底壺（Ｆｉｇ４６～４７　３０８～３４０）

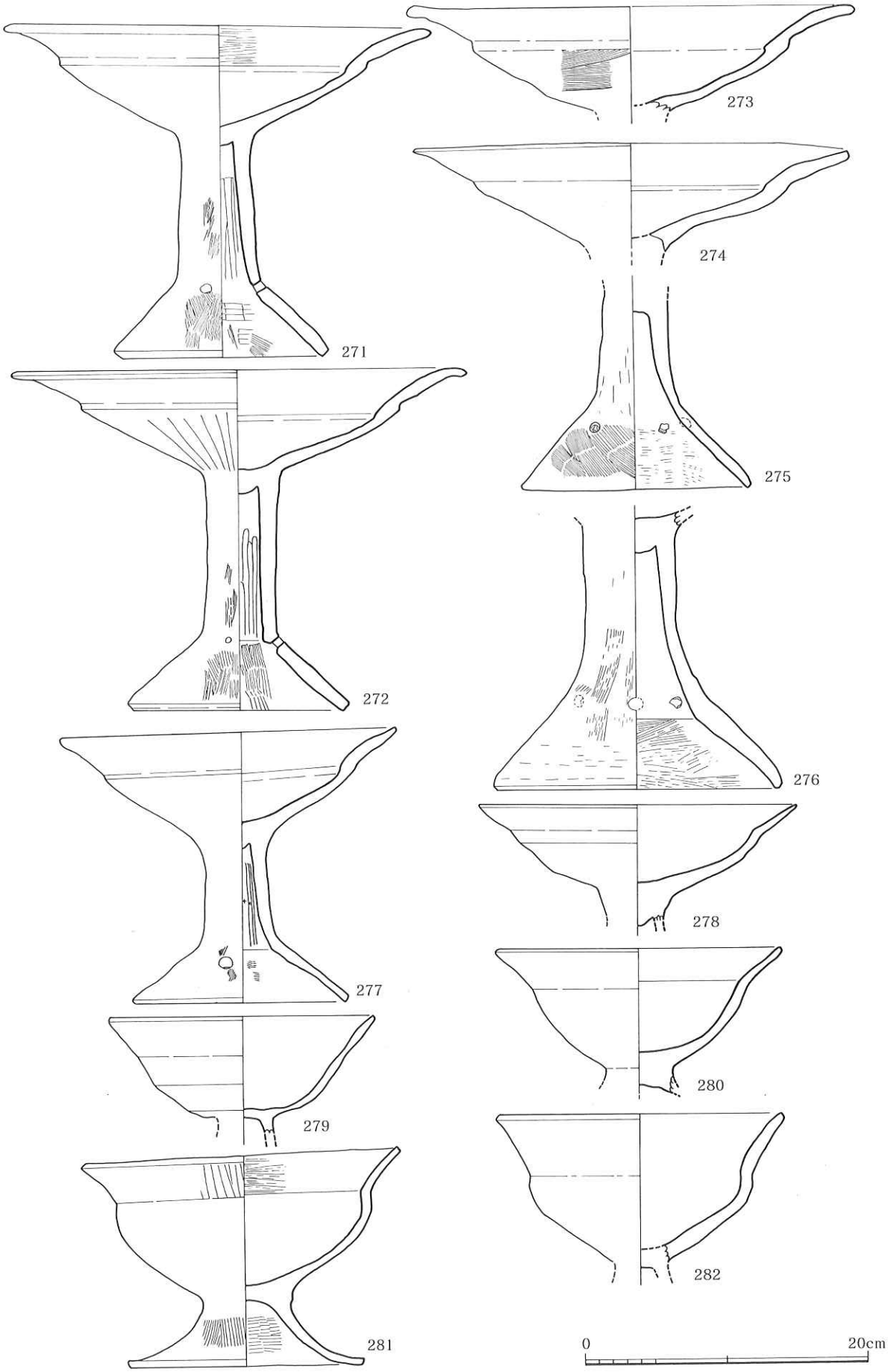
小型丸底壺は３３点掲載している。出土地点の内訳は、ＳＤ－０８が3点、ＳＤ－０９は２６点、ＳＫ－３５が2点、出土地点不明のものが2点である。

ＳＤ－０８出土土器（３１８、３３０、３３１）

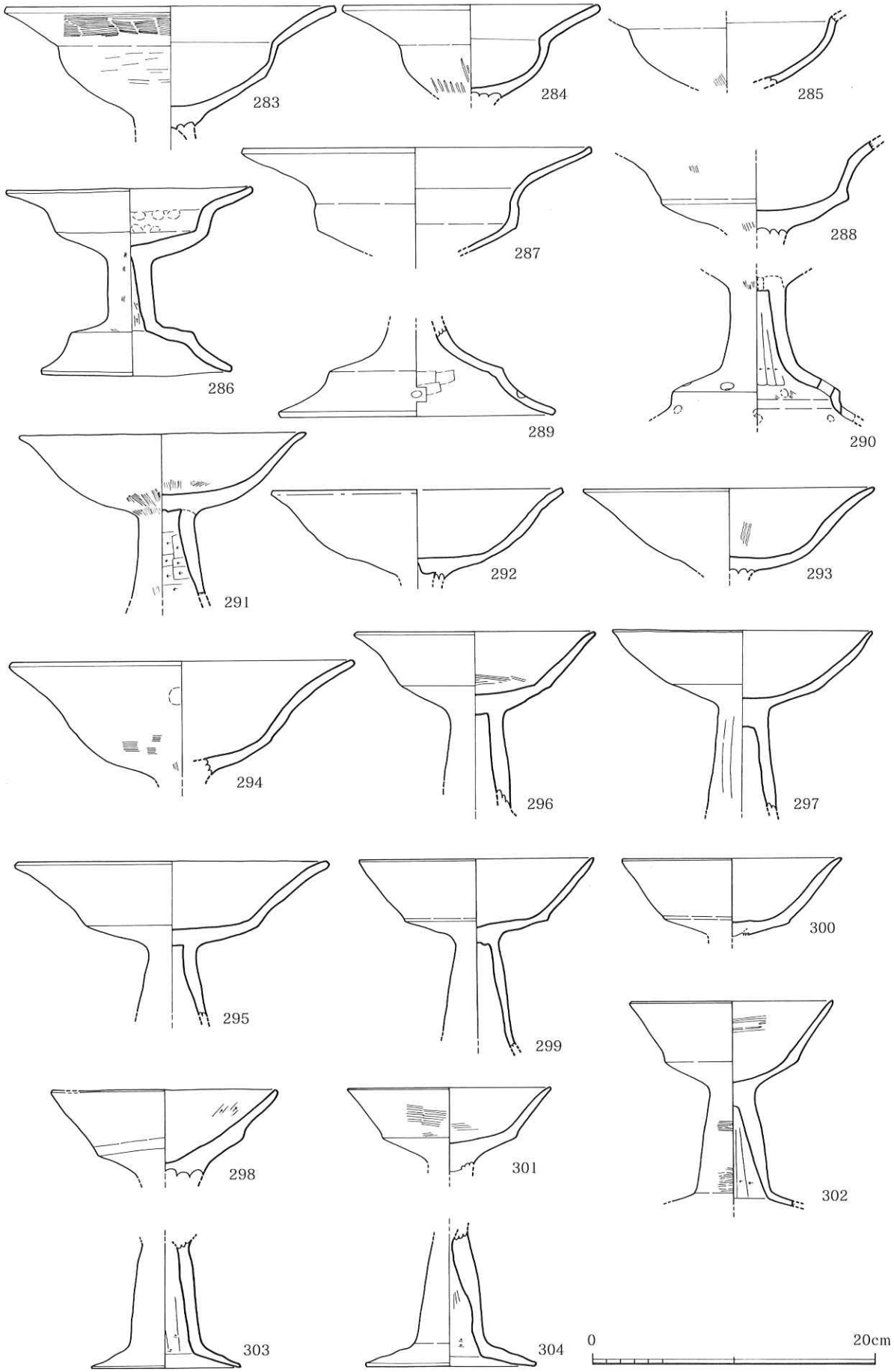
３１８は球形の胴部に平底の底部を有する。頸部はよくしまり、口縁部はくの字に屈曲して開き端部は角張る。３３０は胴部下位以下を欠損している。球形の胴部を有し、頸部はややしまる程度である。口縁部はくの字に屈曲し外反気味に立ち上がり、端部は尖り気味である。３３１は胴部中位以下を欠損している。頸部のしまりが弱く、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。端部は丸みを帯びる。

ＳＤ－０９出土土器（３０８～３１６、３１９～３２６、３２９、３３２～３３５、３３７～３４０）

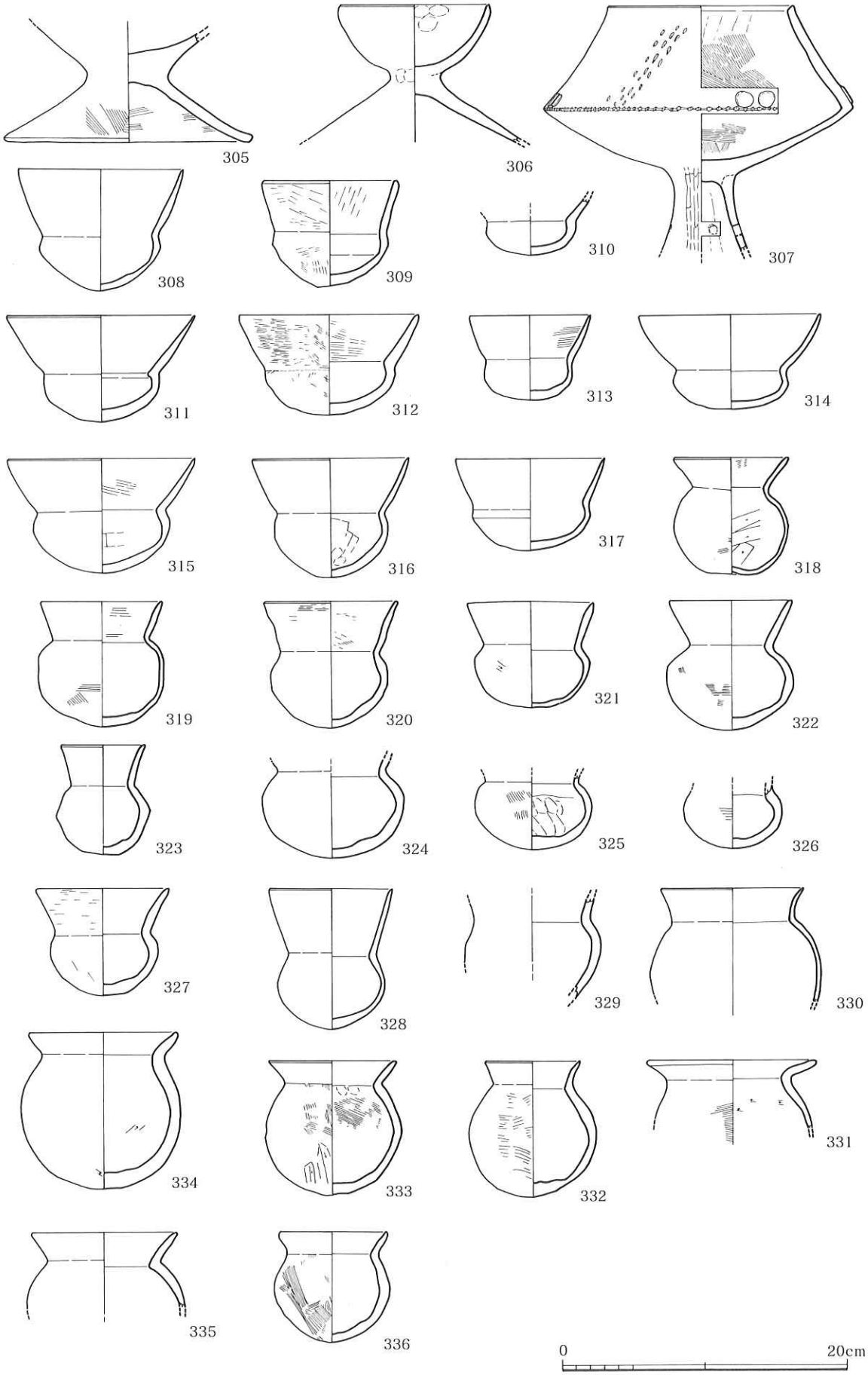
３０８、３０９は、尖底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がり、胴部上位で最も張り出す。頸部はややしまり、口縁部はくの字に屈曲して外傾気味に長く立ち上がる。口縁端部は、３０８が尖り気味で、３０９はやや丸みを帯びる。３１０から３１３は浅い半球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部のしまりは弱く、口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は尖り気味である。３１４から３１６は浅い胴部に丸底の底部を有する。頸部は多少しまり、口縁部はくの字に屈曲し、内湾しなが



Ｆｉｇ．44 土器１４


283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
296
297
295
299
300
298
301
302
303
304
0
20cm

Ｆｉｇ．45 土器１５


305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
0
20cm

Ｆｉｇ．46 土器１６

ら開き、端部は尖り気味である。３１９から３２１はやや扁平な円形の胴部に丸底の底部を有する。頸部は多少しまり、口縁部はくの字に屈曲して外傾気味に立ち上がる。端部は丸みを帯びる。

３２２はやや扁平な胴部に丸底の底部を有する。頸部はよくしまり、口縁部はくの字に屈曲し外傾しながら立ち上がる。端部は丸みを帯びる。３２３は、平底の底部から多少丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位で最も張り出す。頸部はよくしまり、口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。３２４から３２６は口縁部を欠損している。扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。３２９は口縁部及び胴部下位以下を欠損しているが、球形の胴部に尖底気味の丸底を有するものと思われる。頸部はややしまる程度である。３３２から３３５は、球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部はややしまり、口縁部はくの字に屈曲して短く開く。口縁端部は尖り気味若しくは丸みを帯びる。３３７は平底気味の底部からやや丸みを帯びて立ち上がる。頸部はほとんどしまらず、口縁部は短く外反し、端部は丸みを帯びる。３３８は平底の底部から屈曲し外傾しながら立ち上がり、胴部上位で最大径となる。頸部のしまりは弱く、口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は尖り気味である。３３９は、丸みを帯びた扁平な胴部に平底の底部を有するが、底部が多少下方に突出している。頸部のしまりは弱く、口縁部は多少屈曲して外傾気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びる。３４０は丸みを帯びた扁平な胴部に平底の底部を有する。頸部はほとんどしまらず、口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。口縁端部は丸みを帯びる。

ＳＫ－３５出土土器（３２７、３３６）

３２７は浅い球形の胴部に平底気味の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、わずかに外反しながら開く。端部は丸みを帯びる。３３６は球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。口縁部はくの字に屈曲して短く開き、端部は丸みを帯びる。

出土地点不明土器（３１７、３２８）

３１７は浅い胴部に丸底の底部を有する。胴部上位で内側に多少屈曲し頸部にいたる。口縁部は多少外反し、内湾気味に立ち上がる。３２８は球形の胴部に尖底気味の丸底を有する。頸部はややしまり、長い口縁部がやや外傾して立ち上がる。端部は丸みを帯びる。

小型壺（Ｆｉｇ４７　３４１～３５７）

小型壺は１７点掲載している。出土地点の内訳は、ＳＤ－０８が５点、ＳＤ－０９が１０点、ＳＫ－３５が２点である。

ＳＤ－０８出土土器（３４７～３５０、３５７）

３４７から３５０は、尖底気味の丸底で、胴部は中位やや上から上位で最も張り出し、そこから頸部に向かってすぼまる。頸部から口縁部にかけての形状は欠損のため不明である。３５７は扁平な胴部に尖底気味の丸底を有する。胴部中位に最大径を有し、頸部のしまりは強い。口縁部の形状は欠損のため不明である。

ＳＤ－０９出土土器（３４１～３４５、３５１～３５５）

３４１から３４３は、丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位やや上で最大径となる胴部を有する。口縁部はくの字に屈曲し、外傾しながら立ち上がる。口縁端部は、３４１、３４２は丸みを帯び、３４３は内傾する。３４４は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲して開き、口縁端部は丸みを帯びる。３４４は扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁

部はくの字に屈曲して開き、口縁端部は丸みを帯びる。３５１は丸底の底部から丸みを帯びて立ち上がり胴部中位やや上で最も張り出し、そこから頸部に向かってすぼまる。口縁部はくの字に屈曲し外反しながら開くが、端部を欠損しているため形状は不明である。３５２、３５３は球形の胴部に丸底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲して開き、端部は丸みを帯びる。３５４、３５５は複合口縁を有する小型壺である。３５４はやや扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部は屈曲して短くほぼ垂直に立ち上る。一次口縁はほぼ水平に短く開き、二次口縁部はやや外反しながら短く開き、端部は丸みを帯びる。３５５はやや扁平な球形の胴部に丸底の底部を有する。頸部でくの字に屈曲して短く開き、その後内側に屈曲し、丸みを帯びる端部はほぼ直立する。

ＳＫ－３５出土土器（３４６、３５６）

３４６は球形の胴部に平底の底部を有する。口縁部はくの字に屈曲しやや外傾気味に開き、端部は丸みを帯びる。３５６は丸底の底部から丸みを帯びながらほぼ直立し、胴部上位で頸部に向かって屈曲しすぼまる。頸部はやや内傾気味に短く立ち上がる。

ミニチュア土器（Ｆｉｇ４７　３５８～３８８）

ミニチュア土器は３１点掲載している。出土地点の内訳は、ＳＤ－０８が４点、ＳＤ－０９が２５点、ＳＫ－３５が１点、出土地点不明のものが１点である。

ＳＤ－０８出土土器（３７９～３８１）

３７９は脚台を有する鉢状の形状を呈するものと思われる。３８０は浅鉢の形状を呈する。３８１はやや大型で底部は尖底気味である。

ＳＤ－０９出土土器（３５８～３７８、３８２～３８５）

３５８は平底の壺の形状を呈する。３５９から３７４は鉢の形状を呈する。平底あるいは平底気味で口縁部が短く開くもの、平底で胴部から口縁部に向かって直立するもの、丸底あるいは尖底気味の丸底で、底部から口縁部に向かって開くもの、尖底気味の丸底で、口縁部が内傾し、ややすぼまるものが見られる。３７５から３７８は脚付鉢の形状を呈する。３８２から３８５はやや大型であるがミニチュア土器として扱った。３８２と３８５は鉢、３８３と３８４は壺の形状を呈する。

ＳＫ－３５出土土器（３８８）

３８８は壺の形状を呈する。口縁部から頸部にかけて欠損している。

出土地点不明土器（３８７）

３８７は脚付鉢の形状を呈する。胴部は直線的に開き、短い脚を有する。

器台（Ｆｉｇ４８　３８９～４００）

器台は１２点掲載している。出土地点の内訳はＳＤ－０８から７点、ＳＤ－０９から３点、ＳＫ－３５から１点、出土地点不明のものが１点である。

ＳＤ－０８出土土器（３８９～３９１，３９３，３９４，３９８，３９９）

３８９は、口縁部が外反し、筒部は裾部に向かってやや開き気味で、裾部は外反しながらハの字に開く。裾端部がわずかに内湾し端部は丸みを帯びる。３９０は、口縁部が外反し、筒上部のくびれ部から裾部に向かって内湾しながら開く。口縁、裾ともに端部は角張る。３９１は口縁部が短く外反し、筒部は裾部に向かってわずかに内湾しながら開く。裾端部は角張り水平を成す。３９３、３９４は山陰系の鼓形器台で筒部が短い。３９８、３９９は中央部がややくぼむ皿状の受け部に、

ほぼ直立する脚部と屈曲してわずかに内湾しながら開く裾部を有する。受け部、裾部ともに端部は丸みを帯びる。

ＳＤ－０９出土土器（３９５，３９６，４００）

３９５、３９６は直線的に短く開く浅い受け部に、円錐状の台部を有する小型器台である。受け部、台部ともに端部は丸みを帯びる。

ＳＫ－３５出土土器（３９２）

３９２は口縁部がくの字に屈曲して開き、筒部は裾部に向かってわずかに内湾しながら開く。

出土地点不明土器（３９７）

３９７は直線的に短く開く平坦に近い受け部に、低い台部を有する小型器台である。

甑（Ｆｉｇ４８　４０１～４０３）

甑は３点掲載しているが、すべてＳＤ－０８からの出土である。

４０１は胴部中位以上を欠損している。丸底の底部に単孔が穿たれているが、内底面側が盛り上がっていることから、形成段階で外側から穿孔されたと考えられる。４０２はやや尖底気味の丸底から丸みを帯びて立ち上がり、胴部中位やや上で最大径となる。端部はやや内傾し丸みを帯びる。底部に単孔が穿たれているが、外底面側がやや突出していることから、形成段階で内底面側から穿孔されたと考えられる。４０３は胴部下位以上を欠損している。丸底の底部に単孔が穿たれているが、外底面側の周辺部がくぼんでいることから、形成段階で内側から穿孔しその際の突出部を除去したものと考えられる。

特殊土器（Ｆｉｇ４８　４０４）

口縁部及び脚部と思われる部分を欠損している。特殊な器形をしており、何らかの祭祀用の土器と思われる。

ジョッキ形土器（Ｆｉｇ４８　４０５～４０８）

ジョッキ形土器はＳＤ－０８から１点、ＳＤ－０９から２点出土しており、出土地点不明のものが１点所在する。

ＳＤ－０８出土土器（４０５）

４０５はジョッキ形土器の底部片である。胴部のくびれが強く、底部は鋭く屈曲してシャープな稜を持つ。

ＳＤ－０９出土土器（４０６，４０７）

４０６は口縁部を欠損している。底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後わずかに外傾しながら立ち上がる。把手を有する。４０７は底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後外反して開く。把手は付かない。

出土地点不明土器（４０８）

４０８は口縁部を欠損している。底部から鋭く屈曲し、強くくびれた後外反して開く。把手が付き、底面に焼成後に穿たれた円孔を有する。

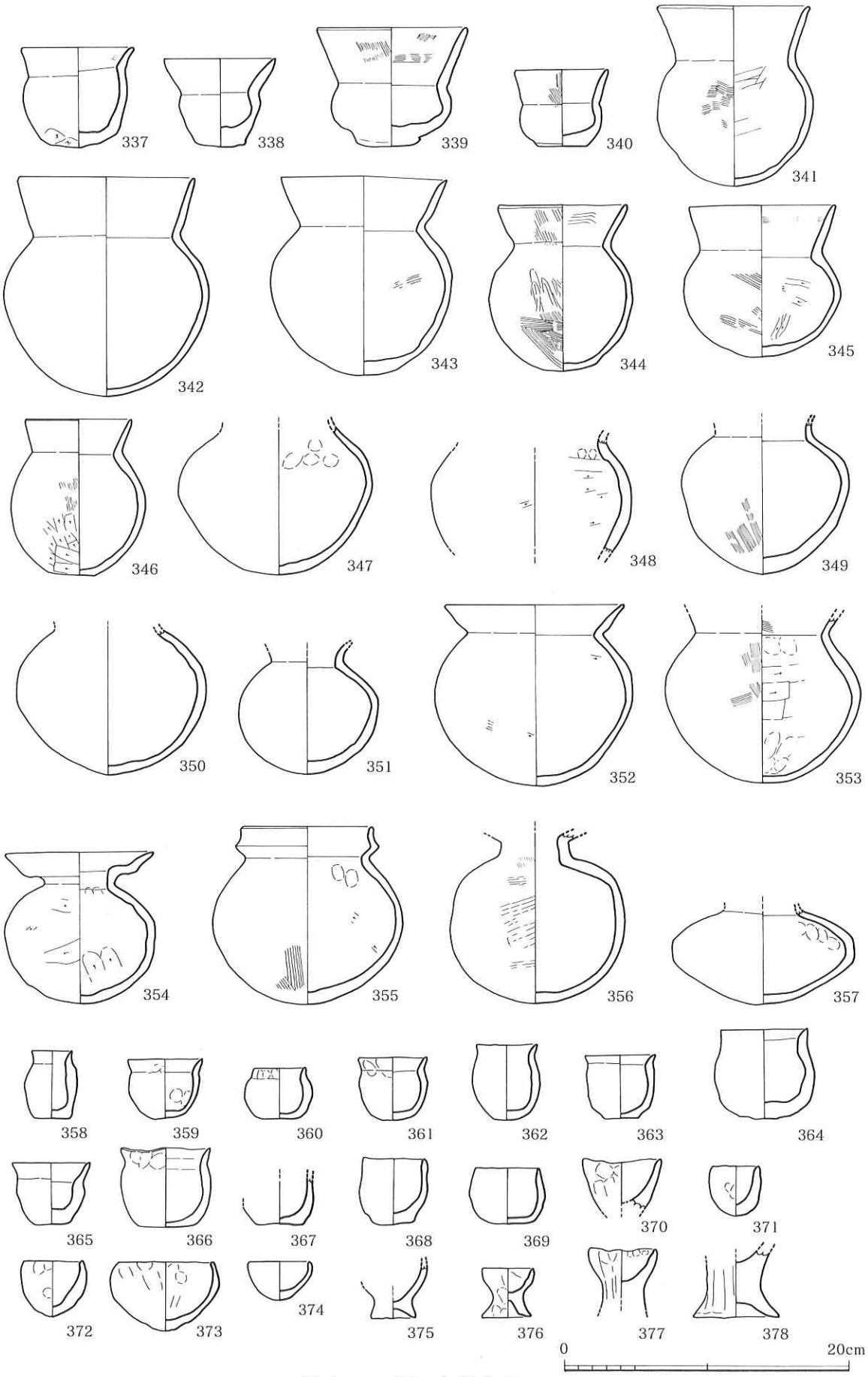
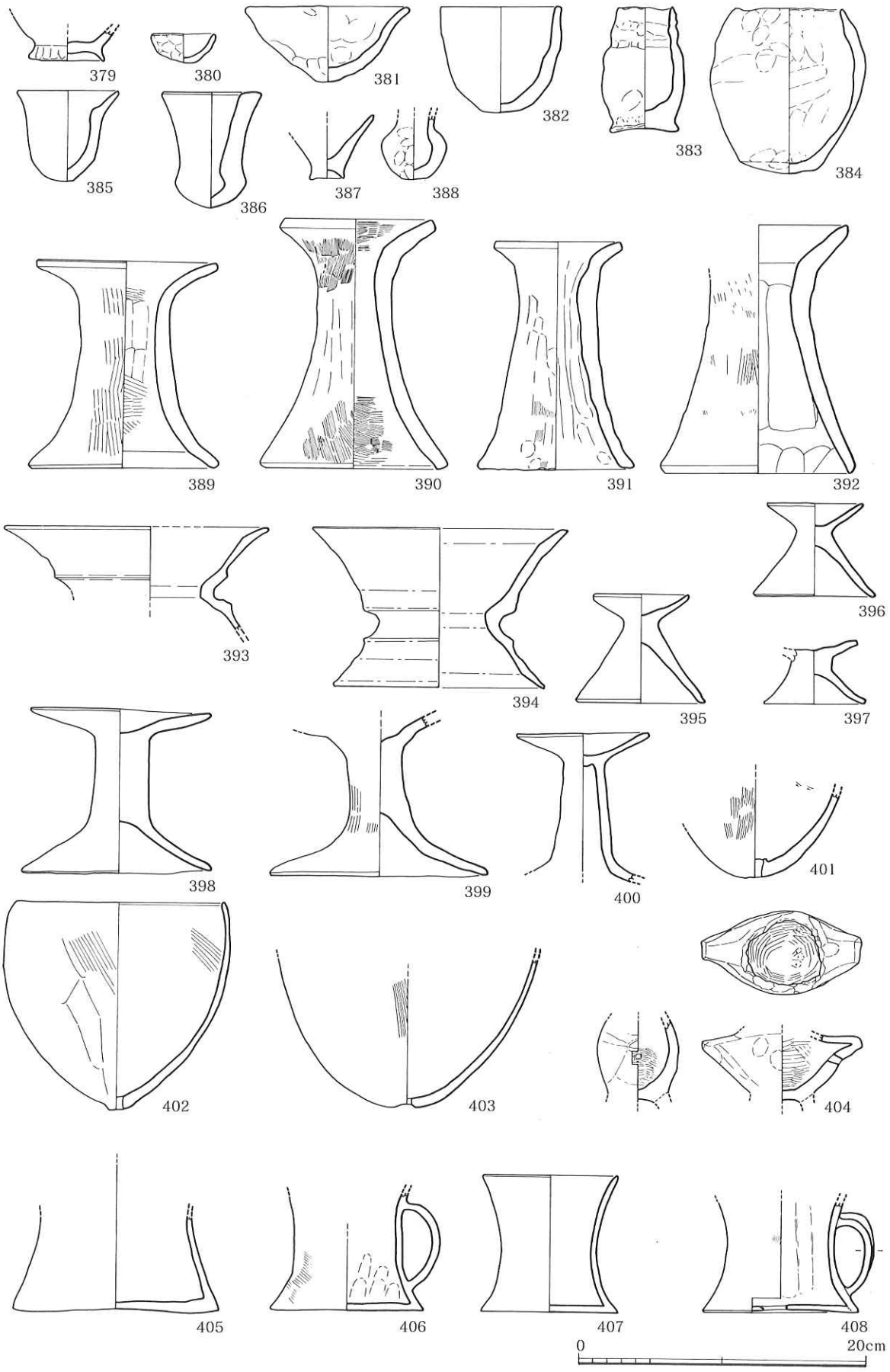

337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
0
20cm

Fig. 47 土器17


379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
0
20cm

Ｆｉｇ．48 土器１８

3　時期不明の遺構

その他の遺構としては、土坑、溝、ピットが確認されている。遺物の大部分を紛失しているため、これらの遺構の時期は不明であるが、一部出土地点不明の中世代の土師器、白磁、青磁の小片が残存しており、おそらくその時期の遺構ではないかと思われる。

第４章　考　察

Ⅰ　弥生時代中期

弥生時代中期の遺構としては４２基の甕棺墓群があげられる。遺跡が大きく削平を受けているため切り合い関係がはっきりしないが、その形体から北部九州の須玖式と在地系の黒髪式が混在していると考られる。時期としては弥生時代中期前葉から中期中葉にかけてのものと考えられる。

Ⅱ　弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構としては、木棺墓２基、石棺墓１基、大型溝２本、大型の土坑１基が挙げられる。これらの内、木棺墓２基と大型溝２本は墳丘墓に伴うものである可能性が考えられる。

２基の木棺墓が主体部となり、大型溝２基が周溝としてその周囲をめぐっていると考えられる。

主体部と考えられる木棺墓２基は、周溝部（ＳＤ－０８）際に両者並んで位置している。切り合いについては、先にも述べたとおり土層断面図がまったく無いため不明であるが、平面図から推測しておそらくＳＭ－０２がＳＭ－０１を切っているものと思われる。両者とも攪乱が激しく副葬品が残存していないが、周溝と考えられる大型溝内から大量の土器片及び葺石状の集石部が確認されている。弥生時代後期菊池川流域の在地系土器及び古式土師器が確認されており、器種構成は、甕、壺、高坏、鉢、器台、小型丸底壺、ミニチュア土器、ジョッキ型土器等多種多様である。出土層位が不明であるため、これらの土器が同一時期のものかそうでないのかについての明確な根拠は無い。しかし他の調査事例から考えて、これらの土器が同時期に所在するとは考えにくいことから、この墳丘墓は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、ある程度時期幅をもって利用されたものと考えられる。しかし、溝内からの異常なまでの土器片の出土、墳丘が全くといって良いほど残存していないにもかかわらず木棺墓が残存している、木棺墓の位置が周溝に近すぎる、といったことからこれらの遺構はそれぞれ別の遺構であった可能性も考えられる。

Ⅲ　おわりに

今回調査を行った東南大門遺跡は、弥生時代中期の甕棺墓群にはじまり、その後弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、それらを一部破壊する形で墳丘墓が造営された可能性が考えられる。また、中世に段階においても多くの遺構が所在していると考えられる。しかし、調査が不十分であることや、遺物の管理不備による紛失、あるいは筆者の力不足により遺跡の全体像を把握出来ない不十分な報告となってしまった。これらについては今後の課題としたい。

末筆になりましたが、当遺跡の調査及び報告書の作成に対してご指導、ご協力いただきました皆様方にお礼を申し上げます。

甕棺観察表1

遺構番号	挿図番号	器種 部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	色調	焼成	調整		備考
									内面	外面	
K－01	Fig.13-1	鉢・上棺	29.3	43.3	10.8	-	橙色		不明	不明	口縁直下突帯一部刻目
	Fig.13-2	甕・下棺	-	49	-	48.9	黄橙色	普	ハケメ	ハケメ後ナデ	口縁直下刻目突帯二条、口縁端部刻目
K－02	Fig.13-3	鉢・上棺	32.4	44.8	11.2	-	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ後ナデ	口縁直下に突帯
	Fig.13-4	甕・下棺	-	43.6	-	44.8	にぶい黄橙色		不明	不明	口縁直下に突帯
K－03	Fig.13-5	甕・上棺	-	43.0	-	45.4	橙色	普	ハケメ	ナデ	口縁直下に突帯二条
	Fig.13-6	甕・下棺	74.1	46.4	7.3	46.3	橙色	やや良	ハケメ後一部ナデ	不明	口縁直下に突帯
K－04	Fig.13-7	鉢・上棺	24.7	40.0	10.5	-	にぶい黄橙色		不明	不明	口縁直下に突帯
	Fig.13-8	不明・下棺	-	-	7.4	-	明黄褐色		不明	不明	
K－05	Fig.14-9	鉢・上棺	21.4	37.6	10.7	-	にぶい黄橙色		不明	不明	口縁直下に突帯
	Fig.14-10	不明・下棺	-	-	12.5	-	橙色	普	ナデ	ナデ	胴部上位に突帯、胴部上位以上打ち欠き
K－06	Fig.14-11	甕・上棺	73.6	43.7	9.4	48.2	橙色	普	ハケメ後ナデ	ハケメ	口縁直下に突帯二条
	Fig.14-12	甕・下棺	76.6	47.3	9.8	48.7	橙色	普	ナデ及びハケメ後ナデ	ハケメ	口縁直下に突帯
K－07	Fig.14-13	甕・上棺					橙色	良	ナデ	ナデ	
	Fig.14-14	甕・下棺					橙色	良	ナデ	ハケメ後ナデ	
K－08	Fig.15-15	甕・不明	70.2	40.0	11.0	54.5	黄橙色	やや良	ナデ	ナデ	胴部中位刻み目突帯
K－09	Fig.15-16	甕・上棺	-	32.0	-	-	にぶい橙色	普	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	口縁直下に突帯
	Fig.15-17	甕・下棺	74.9	.35.1	10.8	58.6	にぶい褐色	やや良	ナデ	ハケメ	胴部中位刻目突帯
K－10	Fig.15-18	壺・単棺	67.0	31.8	10.0	51.6		良	ナデ	ナデ	胴部上位に突帯
K－11	Fig.15-19	甕・下棺	-	32.6	-	-	明褐色		不明	不明	
K－12	Fig.15-20	甕・上棺	43.0	28.4	6.1	28.0	橙色		不明	不明	
	Fig.15-21	甕・下棺	-	30.1	-	30.9	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	口縁直下に突帯
K－13	Fig.16-22	甕・上棺	-	42.4	-	43.4	にぶい黄橙色	普	ナデ	ハケメ後ナデ	口縁直下に突帯
	Fig.16-23	甕・下棺	-	-	8.8	-	黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
K－15	Fig.16-24	壺・不明	68.4	26.6	8.6	52.8	明赤褐色	普	不明	不明	胴部中位やや上突帯
K－16	Fig.16-25	甕・不明					浅黄橙色	普	ナデ	ナデ	
K－17	Fig.16-26	甕・不明	41.4	25.6	6.9	25.0	灰白色	普	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	
K－18	Fig.16-27	甕・上棺	-	24.9	-	34.4	にぶい橙色		不明	不明	胴部中位やや上に突帯
	Fig.16-28	甕・下棺	-	-	6.0	35.6	浅黄橙色		不明	不明	胴部中位やや上突帯、胴部上位以上打ち欠き
K－19	Fig.17-29	甕・上棺	73.1	43.2	7.3	44.8	にぶい黄橙色	普	ナデ	ハケメ後ナデ	口縁直下突帯
	Fig.17-30	甕・下棺	77.9	50.9	9.5	51.9	にぶい黄橙色	普	ナデ	ハケメ	口縁直下突帯二条
K－20	Fig.17-31	甕・上棺	77.7	44.0	8.7	45.6	明黄褐色	普	ハケメ後ナデ	ハケメ	口縁直下突帯
	Fig.17-32	甕・下棺	67.9	44.7	7.3	50.0	橙色	普	ハケメ	ハケメ後ナデ	胴部中位突帯・平底
K－21	Fig.18-33	甕・上棺	-	48.6	-	52.8	浅黄橙色	良	ハケメ及びナデ	ハケメ後ナデ	口縁直下突帯二条
	Fig.18-34	甕・下棺	80.7	54.0	9.4	57.1	浅黄橙色	普	不明	不明	胴部中位やや下突帯
K－22	Fig.18-35	甕・上棺	-	66.3	-	-	にぶい黄橙色	良	ナデ	ナデ	
	Fig.18-36	甕・下棺	97.2	65.7	12.2	64.2	浅黄橙色	やや良	ナデ・ハケメ後ナデ	不明	胴部中位見かけ二条突帯
K－23	Fig.18-37	鉢・上棺	-	53.4	-	-	浅黄橙色		不明	不明	口縁直下に突帯
	Fig.18-38	甕・下棺	62.5	35.6	8.7	38.6	にぶい橙色		不明	不明	口縁直下に突帯

甕棺観察表２

遺構番号	挿図番号	器種 部位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	胴部最大径(cm)	色調	焼成	調整		備考
									内面	外面	
K－２４	Fig.19-39	不明・上棺	-	-	-	57.6	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	胴部中位やや上突帯、胴部上位以上打ち欠き
	Fig.19-40	甕・下棺	100.5	62.5	13.9	65.5	橙色	普	ハケメ後ナデ	不明	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－２５	Fig.19-41	甕・不明	103.2	72.8	12.0	72.4	明黄褐色	普	ナデ	ハケメ後ナデ	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－２６	Fig.19-42	甕・不明	96.8	64.3	11.2	64.4	橙色	やや良	ハケメ、ナデ	ヘラミガキ	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－２７	Fig.20-43	甕・上棺	50.0	36.2	7.8	37.0	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	口縁直下突帯
	Fig.20-44	甕・下棺	-	48.0	-	49.0	黄橙色	普	ナデ	ナデ	口縁直下刻目突帯二条
K－２８	Fig.20-45	壺・上棺	-	-	10.5	63.4	浅黄橙色	普	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	胴部上位突帯、胴部上位以上打ち欠き
	Fig.20-46	甕・下棺	98.3	63.2	11.7	64.7	浅黄橙色	やや良	ハケメ・ハケメ後ナデ	不明	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－２９	Fig.20-47	甕・不明	84.8	41.3	9.1	63.8	浅黄橙色	普	ナデ・ハケメ	ヘラミガキ	胴部中位やや上刻目突帯
K－３０	Fig.21-48	甕・不明	100.6	72.4	12.3	70.0		良	ナデ	ナデ	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－３１	Fig.21-49	不明・上棺	-	-	11.7	52.5	橙色	普	ナデ	ナデ	胴部上位見かけ二条突帯、胴部上位以上打ち欠き
	Fig.21-50	甕・下棺	68.1	35.0	18.2	52.3	浅黄橙色	普	ハケメ後ナデ	ミガキ	胴部上位突帯
K－３２	Fig.21-51	甕・不明	-	38.6	-	55.0	浅黄橙色	普	不明	ハケメ	胴部中位やや下刻目突帯
K－３３	Fig.21-52	不明・不明	-	-	6.8	69.0	浅黄橙色		ナデ	ナデ	胴部上位突帯、
K－３４	Fig.22-53	甕・上棺	36.9	29.9	4.2	28.4		普	ナデ	ミガキ	胴部中位刻目突帯二条、口縁端部刻目、上面に鋸歯文
	Fig.22-54	甕・下棺	50.0	31.1	6.45	32.6		普	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	口縁直下突帯
K－３５	Fig.22-55	不明・上棺	-	-	10.6	57.4	黄橙色		不明	不明	胴部上位見かけ二条突帯、胴部上位以上打ち欠き
	Fig.22-56	甕・下棺	97.6	69.0	10.9	71.9	橙色	やや良	ナデ	ナデ	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－３６	Fig.22-57	甕・上棺	37.8	28.1	6.5	27.0	浅黄橙色		不明	不明	
K－３７	Fig.23-58	甕・上棺	82.9	50.1	12.8	55.0		良	ナデ	ミガキ	胴部中位突帯
	Fig.23-59	甕・下棺	75.6	49.3	10.0	52.1		良	ナデ	ナデ	口縁直下突帯二条
K－３８	Fig.23-60	甕・不明	60.5	30.2	7.2	35.3	橙色		不明	不明	口縁直下突帯
K－３９	Fig.23-61	鉢・上棺	20.4	31.0	9.4	-	にぶい黄橙色	普	ハケメ後ナデ	ナデ	口縁直下刻目突帯
	Fig.23-62	壺・下棺	-	-	9.2	55.2	橙色	普	ハケメ後ナデ	ナデ	胴部上位突帯、胴部上位以上打ち欠き
K－４０	Fig.24-63	甕・単棺	105.5	65.6	15.0	67.6	橙色	やや不良	不明	不明	胴部中位やや下見かけ二条突帯
K－４２	Fig.24-64	鉢・上棺	31.6	43.8	10.4	-	橙色		不明	不明	口縁直下刻目突帯、口縁端部刻目
	Fig.24-65	甕・下棺	51.6	30.9	7.0	32.7	橙色		不明	不明	口縁直下突帯

石製品観察表

No.	挿図番号	器種	出土地点	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備考
1	Fig.25-1	磨製石剣	K-30	安山岩	11.2	3.6	1.4	一部欠損
2	Fig.25-2	磨製石剣	K-30	安山岩	10.8	3.7	1.4	一部欠損
3	Fig.25-3	磨製石剣	K-30	安山岩	2.0	1.9	0.6	先端部のみ
4	Fig.25-4	磨製石剣	K-30	安山岩	1.9	1.9	0.5	先端部のみ
5	Fig.25-5	磨製石剣	K-30	安山岩	9.9	2.4	1.3	一部欠損
6	Fig.25-6	磨製石剣	K-37	安山岩	23.2	4.1	0.9	完形

鉄製品観察表

No.	挿図番号	器種	出土地点	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）
1	Fig26-1	鉄剣	K-05	22.0	2.8	0.6
2	Fig26-2	鉄剣	K-05	15.0	2.6	0.6

土器観察表　1

No.	挿図番号	器種	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
1	Fig.31-1	甕	ほぼ完形	SD-08	25.5	16.4	8.4	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
2	Fig.31-2	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.4	—	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	タタキ後ハケメ	普
3	Fig.31-3	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	18.6	—	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普
4	Fig.31-4	甕	胴下位～脚部	SD-08	—	—	12.4	黄橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
5	Fig.31-5	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.4	—	にぶい赤褐色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普
6	Fig.31-6	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	18.1	—	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ	タタキ後ハケメ	普
7	Fig.31-7	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	19.8	—	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ナデ	普
8	Fig.31-8	甕	頸部～胴中位	SD-08	—	—	—	赤色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	普
9	Fig.31-9	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.6	—	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	普
10	Fig.31-10	甕	胴中位～胴下位	SD-08	—	—	—	にぶい赤褐色	脚付甕	ハケメ後ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
11	Fig.31-11	甕	胴上位～胴下位	SD-08	—	—	—	橙色	脚付甕	ハケメ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
12	Fig.31-12	甕	完形	SD-08	38.8	16.5	13.7	橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普
13	Fig.31-13	甕	脚部	SD-08	—	—	12.6	赤色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普
14	Fig.31-14	甕	脚部	SD-08	—	—	12.1	にぶい赤褐色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
15	Fig.31-15	甕	脚部	SD-08	—	—	11.0	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
16	Fig.32-16	甕	完形	SD-08	31.1	18.0	3.0	橙色	脚付甕	ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
17	Fig.32-17	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	15.5	—	赤橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	タタキ後ハケメ	普
18	Fig.32-18	甕	脚部	SD-08	—	—	10.4	明褐灰色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
19	Fig.32-19	甕	脚部	SD-08	—	—	11.2	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
20	Fig.32-20	甕	胴下位～底部	SD-08	—	—	5.4	赤色	平底	ハケメ	ナデ	普
21	Fig.32-21	甕	脚部	SD-08	—	—	11.8	にぶい赤褐色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
22	Fig.32-22	甕	脚部	SD-08	—	—	9.2	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
23	Fig.32-23	甕	脚部	SD-08	—	—	10.8	にぶい赤褐色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
24	Fig.32-24	甕	脚部	SD-08	—	—	10.5	にぶい橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
25	Fig.32-25	甕	脚部	SD-08	—	—	10.4	明褐灰色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
26	Fig.32-26	甕	脚部	SD-08	—	—	10.8	明褐灰色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ナデ	普
27	Fig.32-27	甕	脚部	SD-08	—	—	12.2	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
28	Fig.32-28	甕	胴下位～脚部	SD-08	—	—	10.7	橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
29	Fig.32-29	甕	脚部	SD-08	—	—	13.4	明褐灰色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
30	Fig.32-30	甕	脚部	SD-08	—	—	10.2	にぶい橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
31	Fig.32-31	甕	脚部	SD-08	—	—	12.0	明褐灰色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
32	Fig.32-32	甕	脚部	SD-08	—	—	13.0	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
33	Fig.32-33	甕	脚部	SK-35	—	—	11.6	浅黄橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普

土器観察表　2

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
34	Fig.32-34	甕	脚部	SD-08	—	—	11.5	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
35	Fig.32-35	甕	脚部	SK-35	—	—	12.4	橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
36	Fig.32-36	甕	脚部	SD-08	—	—	10.8	にぶい橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
37	Fig.32-37	甕	脚部	SD-08	—	—	11.8	橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
38	Fig.32-38	甕	脚部	SD-08	—	—	12.3	明褐灰色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
39	Fig.32-39	甕	脚部	SD-08	—	—	12.6	橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
40	Fig.32-40	甕	胴下位～脚部	SD-08	—	—	—	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ	普
41	Fig.32-41	甕	脚部	SD-08	—	—	11.6	にぶい橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
42	Fig.32-42	甕	脚部	SD-08	—	—	11.6	明褐灰色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
43	Fig.32-43	甕	脚部	SD-08	—	—	11.6	橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ナデ	普
44	Fig.32-44	甕	脚部	SD-08	—	—	10.6	明褐灰色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ナデ	普
45	Fig.32-45	甕	胴下位～底部	SD-08	—	—	12.8	橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
46	Fig.33-46	甕	脚部	SD-08	—	—	10.5	灰褐色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
47	Fig.33-47	甕	脚部	SD-08	—	—	11.8	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
48	Fig.33-48	甕	脚部	SD-08	—	—	10.6	にぶい橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ	普
49	Fig.33-49	甕	脚部	SD-08	—	—	12.6	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
50	Fig.33-50	甕	胴下位～脚部	SD-08	—	—	11.6	赤橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
51	Fig.33-51	甕	脚部	SD-08	—	—	11.6	浅黄橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
52	Fig.33-52	甕	脚部	SD-08	—	—	10.6	にぶい橙色	脚付甕	ハケメ	ナデ	普
53	Fig.33-53	甕	脚部	SD-08	—	—	12.8	黄橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
54	Fig.33-54	甕	脚部	SD-08	—	—	10.4	黄橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
55	Fig.33-55	甕	脚部	SD-08	—	—	11.6	浅黄橙色	脚付甕	ハケメ	ナデ	普
56	Fig.33-56	甕	脚部	SD-08	—	—	14.0	黄橙色	脚付甕	ナデ	ハケメ後ナデ	普
57	Fig.33-57	甕	胴下位～脚部	SD-08	—	—	10.7	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
58	Fig.33-58	甕	脚部	SD-08	—	—	11.2	浅黄橙色	脚付甕	ハケメ後ナデ	ナデ	普
59	Fig.33-59	甕	脚部	SD-08	—	—	13.2	橙色	脚付甕	ハケメ	ハケメ	普
60	Fig.33-60	甕	脚部	SD-08	—	—	7.8	橙色	脚付甕	ナデ	ナデ	普
61	Fig.33-61	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	18.8	—	赤色		ハケメ後ナデ	タタキ	普
62	Fig.33-62	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	19.0	—	橙色		ハケメ	タタキ	普
63	Fig.33-63	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	15.9	—	明橙色		ハケメ	タタキ	普
64	Fig.33-64	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	14.4	—	暗赤色		ハケメ	タタキ後ハケメ	普
65	Fig.33-65	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	19.9	—	赤色		ナデ	タタキ	普
66	Fig.33-66	甕	頸部～胴中位	SD-08	—	—	—	橙色		ハケメ	タタキ	普

土器観察表　3

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
67	Fig.34-67	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	15.4	—	にぶい橙色		ハケメ	タタキ後ハケメ	普
68	Fig.34-68	甕	頸部～底部	SD-08	—	—	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
69	Fig.34-69	甕	ほぼ完形	SD-08	16.4	15.8	—	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ	普
70	Fig.34-70	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	13.4	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
71	Fig.34-71	甕	ほぼ完形	SD-09	16.8	15.0	—	にぶい橙色		ハケメ	タタキ後ナデ	普
72	Fig.34-72	甕	口縁～底部	SD-08	15.2	13.0	—	淡橙色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
73	Fig.34-73	甕	口縁～底部	SD-08	—	15.2	—	淡橙色		ヘラケズリ後ハケメ	ハケメ後ナデ	普
74	Fig.34-74	甕	口縁～胴下位	SD-09	—	14.0	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
75	Fig.34-75	甕	ほぼ完形	SD-08	28.0	18.7	—	赤橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
76	Fig.34-76	甕	ほぼ完形	SD-08	21.9	15.6	—	橙色		ヘラケズリ後ハケメ	ハケメ後ナデ	普
77	Fig.34-77	甕	ほぼ完形	SD-08	21.8	15.3	—	橙色		ヘラケズリ	タタキ後ナデ	普
78	Fig.34-78	甕	ほぼ完形	SD-08	30.5	22.4	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
79	Fig.35-79	甕	ほぼ完形	SD-08	22.6	14.4	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
80	Fig.35-80	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	15.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
81	Fig.35-81	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	16.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
82	Fig.35-82	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	14.5	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
83	Fig.35-83	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	18.0	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
84	Fig.35-84	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	15.4	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
85	Fig.35-85	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	16.6	—	にぶい赤褐色		ヘラケズリ	ナデ	普
86	Fig.35-86	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	13.7	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
87	Fig.35-87	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	15.6	—	灰褐色		ヘラケズリ	ハケメ	普
88	Fig.35-88	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	17.2	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
89	Fig.35-89	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	18.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
90	Fig.35-90	甕	口縁～底部	SD-08	15.8	14.0	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
91	Fig.35-91	甕	ほぼ完形	SD-08	15.1	10.8	—	明赤褐色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
92	Fig.35-92	甕	口縁～胴下位	SD-08	15.8	12.7	—	明赤褐色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
93	Fig.35-93	甕	ほぼ完形	SK-35	13.4	12.6	—	橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
94	Fig.35-94	甕	ほぼ完形	SK-35	14.3	13.0	—	黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
95	Fig.35-95	甕	ほぼ完形	SK-35	16.5	15.2	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
96	Fig.35-96	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	16.2	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
97	Fig.35-97	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	14.2	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
98	Fig.35-98	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
99	Fig.35-99	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	13.5	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普

土器観察表　4

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
100	Fig.36-100	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	13.2	—	灰白色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
101	Fig.36-101	甕	口縁～胴下位	SD-09	—	12.8	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
102	Fig.36-102	甕	頸部～底部	SD-09	—	—	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
103	Fig.36-103	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	16.2	—	淡橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
104	Fig.36-104	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.6	—	淡橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
105	Fig.36-105	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
106	Fig.36-106	甕	ほぼ完形	SD-08	15.6	13.0	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
107	Fig.36-107	甕	口縁～胴部中位	SD-09	—	15.3	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
108	Fig.36-108	甕	口縁～胴下位	SD-09	—	16.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
109	Fig.36-109	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	14.4	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ	普
110	Fig.36-110	甕	口縁～胴中位	SD-09	—	15.0	—	淡黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
111	Fig.36-111	甕	ほぼ完形	SD-09	14.3	11.8	—	黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
112	Fig.36-112	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	23.3	—	橙色		ヘラケズリ後ハケメ	タタキ後ハケメ	普
113	Fig.36-113	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	21.7	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ハケメ	ハケメ	普
114	Fig.36-114	甕	口縁～胴上位	SD-08	—	23.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
115	Fig.36-115	甕	口縁～胴下位	SD-08	—	24.0	—	褐灰色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
116	Fig.37-116	甕	口縁～胴中位	SD-08	—	20.6	—	にぶい橙色		摩耗のため不明	摩耗のため不明	普
117	Fig.37-117	甕	口縁～胴中位	SK-35	—	24.2	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
118	Fig.37-118	壺	口縁～頸部	SD-08	—	17.5	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
119	Fig.37-119	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	27.8	—	淡黄橙色		ハケメ	タタキ後ナデ後ハケメ	普
120	Fig.37-120	壺	口縁～頸部	SD-08	—	26.0	—	にぶい赤褐色		ナデ	ハケメ	普
121	Fig.37-121	壺	口縁～頸部	SD-08	—	19.4	—	淡橙色		ナデ	ナデ	普
122	Fig.37-122	壺	口縁部	SD-08	—	22.2	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
123	Fig.37-123	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	21.2	—	灰黄褐色		ケズリ	タタキ	普
124	Fig.37-124	壺	口縁～頸部	SD-08	—	18.9	—	橙色		ナデ	ナデ	普
125	Fig.37-125	壺	口縁～頸部	SD-08	—	28.6	—	黄橙色		ナデ	ナデ	普
126	Fig.37-126	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	20.2	—	明褐灰色		ナデ	ハケメ	普
127	Fig.38-127	壺	口縁部	SD-08	—	15.4	—	明褐灰色		ナデ	ナデ	普
128	Fig.38-128	壺	口縁～頸部	SD-08	—	15.5	—	赤橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
129	Fig.38-129	壺	口縁～頸部	SD-08	—	21.3	—	橙色		ハケメ	ハケメ	普
130	Fig.38-130	壺	口縁～頸部	SD-08	—	28.4	—	明褐灰色		ハケメ	ハケメ後ナデ	普
131	Fig.38-131	壺	口縁～頸部	SD-08	—	10.1	—	橙色		ナデ後ハケメ	ナデ後ハケメ	普
132	Fig.38-132	壺	口縁部	SD-08	—	16.4	—	にぶい黄橙色		ナデ	ハケメ	普

土器観察表　5

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
133	Fig.38-133	壺	口縁～頸部	SD-08	—	19.9	—	明赤褐色		ハケメ	ハケメ	普
134	Fig.38-134	壺	口縁部	SD-08	—	20.2	—	橙色		ハケメ	ハケメ	普
135	Fig.38-135	壺	口縁～胴下位	SD-08	—	23.0	—	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ	普
136	Fig.38-136	壺	口縁部	SD-09	—	30.5	—	橙色		ナデ	ハケメ	普
137	Fig.38-137	壺	口縁～頸部	SD-09	—	21.8	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
138	Fig.38-138	壺	口縁～頸部	SD-09	—	28.6	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
139	Fig.39-139	壺	口縁～頸部	SD-08	—	13.8	—	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ	普
140	Fig.39-140	壺	口縁～頸部	SD-08	—	16.4	—	橙色		ハケメ	ハケメ	普
141	Fig.39-141	壺	口縁部	SD-08	—	17.6	—	橙色		ナデ	ナデ	普
142	Fig.39-142	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	19.3	—	赤色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
143	Fig.39-143	壺	口縁～頸部	SD-08	—	19.8	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
144	Fig.39-144	壺	口縁～肩部	SD-08	—	14.8	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
145	Fig.39-145	壺	口縁～頸部	SD-08	—	14.6	—	赤橙色		ハケメ	ハケメ	普
146	Fig.39-146	壺	口縁～頸部	SD-08	—	18.6	—	淡黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
147	Fig.39-147	壺	口縁～頸部	SD-08	—	13.9	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
148	Fig.39-148	壺	口縁～頸部	SD-08	—	21.8	—	淡赤橙色		ナデ	ナデ	普
149	Fig.39-149	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	29.4	—	にぶい赤褐色		ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
150	Fig.39-150	壺	口縁～肩部	SK-35	—	20.0	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
151	Fig.39-151	壺	口縁～肩部	不明	—	19.4	—	橙色		ナデ	ナデ	普
152	Fig.39-152	壺	頸部～胴中位	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
153	Fig.39-153	壺	口縁～肩部	SD-09	—	17.0	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
154	Fig.39-154	壺	口縁～肩部	SD-09	—	16.0	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
155	Fig.39-155	壺	口縁～胴中位	SD-09	—	15.6	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
156	Fig.40-156	壺	口縁～肩部	SD-08	—	13.2	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
157	Fig.40-157	壺	口縁～肩部	SD-08	—	12.0	—	明赤褐色		ナデ	ナデ	普
158	Fig.40-158	壺	口縁～肩部	SD-08	—	11.7	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
159	Fig.40-159	壺	口縁～肩部	SD-08	—	11.2	—	にぶい赤褐色		ハケメ後ナデ	ナデ	普
160	Fig.40-160	壺	口縁～胴上位	SD-08	—	12.1	—	橙色		ナデ	ハケメ	普
161	Fig.40-161	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	橙色		ヘラケズリ	ナデ	普
162	Fig.40-162	壺	口縁～胴中位	SD-08	—	15.6	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
163	Fig.40-163	壺	口縁～胴上位	SD-08	—	14.8	—	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ	普
164	Fig.40-164	壺	ほぼ完形	SD-08	31.5	14.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
165	Fig.40-165	壺	頸部～胴下位	SD-09	—	—	—	橙色		ハケメ後ナデ	ナデ後ヘラミガキ	普

土器観察表　6

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
166	Fig.40-166	壺	頸部～胴下位	SD-09	—	—	—	橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
167	Fig.40-167	壺	口縁～頸部	SD-09	—	16.2	—	浅黄橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
168	Fig.40-168	鉢	ほぼ完形	SD-08	10.2	10.8	—	にぶい橙色		ナデ後ハケメ	ハケメ	普
169	Fig.40-169	鉢	完形	SD-08	11.4	12.1	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
170	Fig.40-170	鉢	ほぼ完形	SD-08	13.3	13.3	—	橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
171	Fig.40-171	鉢	ほぼ完形	SD-08	12.5	14.6	—	橙色		ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
172	Fig.40-172	鉢	完形	SD-08	13.2	14.7	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
173	Fig.40-173	鉢	ほぼ完形	SD-08	—	12.2	—	赤橙色		ナデ	ハケメ	普
174	Fig.40-174	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	12.7	—	にぶい橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
175	Fig.41-175	鉢	ほぼ完形	SD-08	11.2	13.1	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ後ハケメ	普
176	Fig.41-176	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	淡橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
177	Fig.41-177	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	14.0	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
178	Fig.41-178	鉢	頸部～底部	SD-08	—	—	—	橙色		ナデ	ナデ	普
179	Fig.41-179	鉢	頸部～底部	SD-08	—	—	—	淡赤橙色		ハケメ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
180	Fig.41-180	鉢	ほぼ完形	SD-08	14.1	14.3	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
181	Fig.41-181	鉢	口縁～胴中位	SD-09	—	13.8	—	淡赤橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
182	Fig.41-182	鉢	ほぼ完形	SD-09	10.1	13.6	—	淡赤橙色		ヘラケズリ後ナデ	ケズリ後ハケメ後ナデ	普
183	Fig.41-183	鉢	完形	SD-09	9.8	13.0	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
184	Fig.41-184	鉢	口縁～胴中位	SD-09	—	10.6	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	普
185	Fig.41-185	鉢	口縁～胴下位	SD-09	—	12.0	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
186	Fig.41-186	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	11.7	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
187	Fig.41-187	鉢	ほぼ完形	SD-09	9.5	12.8	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
188	Fig.41-188	鉢	ほぼ完形	SD-09	8.7	10.4	—	明褐灰色		ナデ	ナデ	普
189	Fig.41-189	鉢	完形	SD-09	8.4	11.8	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
190	Fig.41-190	鉢	ほぼ完形	SD-09	8.2	11.7	—	にぶい橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
191	Fig.41-191	鉢	ほぼ完形	SD-09	7.5	10.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
192	Fig.41-192	鉢	頸部～底部	SD-09	—	—	—	橙色		ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	普
193	Fig.41-193	鉢	ほぼ完形	SD-09	7.6	11.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	普
194	Fig.41-194	鉢	頸部～胴下位	SD-09	—	—	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
195	Fig.41-195	鉢	ほぼ完形	SD-09	7.9	13.8	—	黄橙色		不明	不明	普
196	Fig.41-196	鉢	完形	SD-09	7.4	11.4	—	黄橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
197	Fig.41-197	鉢	ほぼ完形	SD-09	7.0	12.3	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
198	Fig.41-198	鉢	完形	SD-09	6.5	13.2	—	黄橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普

土器観察表　7

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
199	Fig.41-199	鉢	完形	SD-08	5.8	8.3	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
200	Fig.41-200	鉢	口縁～底部	SD-08	6.8	9.4	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
201	Fig.41-201	鉢	ほぼ完形	SD-08	5.7	9.8	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
202	Fig.41-202	鉢	完形	SK-35	15.0	14.9	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
203	Fig.41-203	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	15.0	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
204	Fig.41-204	鉢	口縁～胴下位	SD-09	—	14.5	—	橙色		ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
205	Fig.41-205	鉢	ほぼ完形	SD-08	14.4	11.7	—	橙色		ナデ	ナデ	普
206	Fig.41-206	鉢	口縁部から胴部下位	SD-08	12.1	12.5	—	赤橙色		ナデ	タタキ後ハケメ後ナデ	普
207	Fig.42-207	鉢	口縁部から底部	SD-09	15.9	16.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
208	Fig.42-208	鉢	完形	SD-09	6.2	10.6	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ	普
209	Fig.42-209	鉢	ほぼ完形	SD-09	8.0	13.0	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
211	Fig.42-210	鉢	口縁～胴下位	SD-09	—	13.0	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
210	Fig.42-211	鉢	ほぼ完形	SD-09	6.4	11.0	—	橙色		ナデ	ナデ	普
212	Fig.42-212	鉢	ほぼ完形	不明	6.9	12.3	—	淡赤橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
214	Fig.42-213	鉢	ほぼ完形	SD-09	8.6	11.9	—	浅黄橙色		ナデ	ヘラケズリ	普
213	Fig.42-214	鉢	ほぼ完形	SD-09	5.7	9.8	—	淡赤橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
215	Fig.42-215	鉢	ほぼ完形	SD-08	25.0	30.9	—	淡赤橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
216	Fig.42-216	鉢	口縁～胴上位	SD-08	—	20.4	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ヘラケズリ後ナデ	普
217	Fig.42-217	鉢	口縁～胴中位	SK-35	—	31.4	—	浅黄橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
218	Fig.42-218	鉢	口縁～胴中位	SD-08	—	19.0	—	橙色		ヘラケズリ	ハケメ	普
219	Fig.42-219	鉢	口縁～胴中位	SD-09	—	11.0	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
220	Fig.42-220	鉢	完形	SD-09	6.2	15.3	—	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ナデ	普
221	Fig.42-221	鉢	ほぼ完形	SD-09	6.0	16.0	—	明褐灰色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
222	Fig.42-222	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	18.8	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
223	Fig.42-223	鉢	ほぼ完形	SD-09	6.9	12.4	—	にぶい橙色		ナデ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
224	Fig.42-224	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	12.0	—	にぶい橙色		ヘラケズリ	ヘラケズリ	普
225	Fig.42-225	鉢	口縁～底部	SD-08	8.5	11.8	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
226	Fig.42-226	鉢	完形	SD-09	6.9	10.5	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
227	Fig.42-227	鉢	ほぼ完形	SD-08	4.9	13.4	—	橙色		ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
228	Fig.42-228	鉢	胴中位～底部	SD-09	—	—	—	黄橙色	底に木葉スタンプ	ナデ	ナデ	普
229	Fig.42-229	鉢	ほぼ完形	SD-08	5.3	12.4	—	黄橙色		ナデ	ナデ	普
230	Fig.42-230	鉢	ほぼ完形	SD-08	6.8	13.0	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
231	Fig.42-231	鉢	ほぼ完形	SD-09	4.4	8.9	—	黄橙色		ハケメ後ナデ	ナデ	普

土器観察表　8

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
232	Fig.42-232	鉢	ほぼ完形	SK-35	4.7	8.6	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
233	Fig.42-233	鉢	ほぼ完形	SK-35	4.7	8.8	—	浅黄橙色		不明	不明	普
234	Fig.42-234	鉢	ほぼ完形	SD-09	4.0	13.0	—	橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
235	Fig.42-235	鉢	口縁～胴下位	SD-09	4.6	12.8	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
236	Fig.42-236	鉢	ほぼ完形	SD-09	2.8	9.4	—	にぶい橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
237	Fig.42-237	鉢	ほぼ完形	SD-08	6.4	14.1	—	浅黄橙色		ナデ	ヘラケズリ後ハケメ	普
238	Fig.42-238	鉢	ほぼ完形	SD-09	3.8	10.8	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
239	Fig.42-239	鉢	ほぼ完形	SD-09	5.7	10.7	—	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
240	Fig.43-240	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	21.2	—	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
241	Fig.43-241	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	19.8	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ	普
242	Fig.43-242	鉢	ほぼ完形	SD-08	7.5	19.1	—	赤橙色		ナデ	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	普
243	Fig.43-243	鉢	完形	SD-08	14.0	22.4	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
244	Fig.43-244	鉢	ほぼ完形	SD-08	7.2	14.6	—	黄橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
245	Fig.43-245	鉢	ほぼ完形	SD-08	6.9	12.5	—	淡橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
246	Fig.43-246	鉢	ほぼ完形	SD-08	6.9	11.0	—	橙色		ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
247	Fig.43-247	鉢	完形	SK-35	5.6	8.5	—	き		ナデ	ハケメ	普
248	Fig.43-248	鉢	口縁部	SD-08	—	9.4	—	灰色		不明	ハケメ	普
249	Fig.43-249	鉢		SD-08	—	—	3.5	明褐灰色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
250	Fig.43-250	鉢	口縁部	SD-09	—	9.8	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
251	Fig.43-251	鉢		不明		11.2	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
252	Fig.43-252	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	12.8	—	にぶい橙色	脚付鉢	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
253	Fig.43-253	鉢	完形	SD-08	9.0	12.0	7.0	橙色	脚付鉢	ナデ	ナデ	普
254	Fig.43-254	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	12.0	—	浅黄橙色	脚付鉢	ナデ	ナデ	普
255	Fig.43-255	鉢	口縁～胴下位	SD-08	—	15.4	—	にぶい橙色	脚付鉢	ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ハケメ	普
256	Fig.43-256	鉢	口縁～胴下位	SK-35	—	10.0	—	淡橙色	脚付鉢	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
257	Fig.43-257	鉢	ほぼ完形	不明	7.8	13.0	7.1	浅黄橙色	脚付鉢一部赤彩	ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
258	Fig.43-258	鉢	口縁～胴下位	不明	—	14.5	—	にぶい橙色	脚付鉢	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
259	Fig.43-259	鉢	ほぼ完形	不明	7.9	11.3	3.6	浅黄橙色	脚付鉢	ナデ	ナデ	普
260	Fig.43-260	鉢	口縁～底部	SD-08	8.2	14.0	3.7	にぶい橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
261	Fig.43-261	鉢	脚部	SD-08	—	—	15.2	にぶい橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
262	Fig.43-262	鉢	脚部	SD-08	—	—	17.6		脚付鉢	ナデ	ハケメ後ナデ	普
263	Fig.43-263	鉢	脚部	SD-08	—	—	17.2	橙色	脚付鉢	ハケメ	ハケメ	普
264	Fig.43-264	鉢	脚部	SD-08	—	—	13.8	浅黄橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普

土器観察表　9

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
265	Fig.43-265	鉢	脚部	SD-08	—	—	20.6	浅黄橙色	脚付鉢	ハケメ	ハケメ	普
266	Fig.43-266	鉢	脚部	SD-08	—	—	—	橙色	脚付鉢	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
267	Fig.43-267	鉢	脚部	SD-08	—	—	18.8	浅黄橙色	脚付鉢	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
268	Fig.43-268	鉢	脚部	SD-08	—	—	—	赤橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
269	Fig.43-269	鉢	胴下位～脚部	SD-08	—	—	13.2	黄橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
270	Fig.43-270	鉢		SD-08		—	15.2	黄橙色	脚付鉢	ヘラケズリ後ハケメ後ナデ	ハケメ	普
271	Fig.44-271	高坏	完形	SD-08	19.2	23.4	15.0	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
272	Fig.44-272	高坏	坏部	SD-08	—	32.0	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
273	Fig.44-273	高坏	坏部	SD-08	—	31.1	—	赤橙色		ナデ	ナデ	普
274	Fig.44-274	高坏	完形	SD-08	23.2	30.8	14.2	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
275	Fig.44-275	高坏	坏部	SD-08	—	22.4	—	赤橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
276	Fig.44-276	高坏	脚部	SD-08	—	—	16.4	浅黄橙色	一部赤彩	ハケメ	ハケメ後ナデ	普
277	Fig.44-277	高坏	完形	SD-08	23.9	32.9	15.0	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ後ナデ	普
278	Fig.44-278	高坏	脚部	SD-09	—	—	20.4	浅黄橙色		ハケメ	ハケメ	普
279	Fig.44-279	高坏	坏部	SD-08	—	18.8	—	灰白色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
280	Fig.44-280	高坏	坏部	SD-08	—	20.5	—	橙色		ナデ	不明	普
281	Fig.44-281	高坏	完形	SD-08	25.0	21.7	16.1	赤橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
282	Fig.44-282	高坏	坏部	SD-08	—	20.0	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
283	Fig.45-283	高坏	坏部	SD-08	—	23.1	—	赤色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
284	Fig.45-284	高坏	坏部	SD-08	—	18.0	—	にぶい橙色		ナデ	タタキ	普
285	Fig.45-285	高坏	坏部	SD-08	—	—	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
286	Fig.45-286	高坏	ほぼ完形	SD-08	13.0	17.6	13.4	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
287	Fig.45-287	高坏	坏部	SD-08	—	24.5	—	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
288	Fig.45-288	高坏	坏部	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
289	Fig.45-289	高坏	脚部	SD-08	—	—	19.2	浅黄橙色		ヘラケズリ	不明	普
290	Fig.45-290	高坏	脚部	SD-08	—	—	—	浅黄橙色	穿孔あり	ヘラケズリ	ハケメ後ナデ	普
291	Fig.45-291	高坏	ほぼ完形	SD-08		20.6		橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
292	Fig.45-292	高坏	坏部	SD-08	—	20.7	—	橙色		ナデ	ハケメ	普
293	Fig.45-293	高坏	坏部	SD-08	—	20.7	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	普
294	Fig.45-294	高坏	坏部	SD-08	—	24.2	—	灰白色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
295	Fig.45-295	高坏	ほぼ完形	SD-08	—	21.9	—	橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
296	Fig.45-296	高坏	ほぼ完形	SD-09		16.7		明褐灰色		ハケメ後ナデ	ナデ	普
297	Fig.45-297	高坏	ほぼ完形	SD-09	—	9.3	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普

土器観察表　１０

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
298	Fig.45-298	高坏	坏部	SD-08	—	16.3	—	にぶい橙色		ヘラケズリ後ナデ	ナデ	普
299	Fig.45-299	高坏	ほぼ完形	SD-09	—	16.8	—	鈍い橙色		ナデ	ナデ	普
300	Fig.45-300	高坏	坏部	SD-09	—	15.3	—	橙色		不明	不明	普
301	Fig.45-301	高坏	坏部	SK-35	—	14.4	—	橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
302	Fig.45-302	高坏	ほぼ完形	SD-09		14.2		浅黄橙色		ヘラケズリ後ナデ	へらミガキ	普
303	Fig.45-303	高坏	脚部	SD-09	—	—	10.6	にぶい橙色		ケズリ後ナデ	ナデ	普
304	Fig.45-304	高坏	脚部	SD-09	—	—	12.0	灰白色		ケズリ後ナデ	ナデ	普
305	Fig.46-305	高坏	坏部下位～脚部	SD-08	—	—	17.4	橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
306	Fig.46-306	高坏	ほぼ完形	SK-35	9.6	10.3	—	橙色		不明	不明	普
307	Fig.46-307	高坏	坏部～脚部中位	SD-09	—	13.0	—	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
308	Fig.46-308	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09			—	橙色		ナデ	ナデ	普
309	Fig.46-309	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	8.4	11.7	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
310	Fig.46-310	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.2	9.8	—	灰白色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
311	Fig.46-311	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.3	13.3	—	にぶい黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
312	Fig.46-312	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.0	12.8	—	にぶい橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
313	Fig.46-313	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	5.9	8.6	—	橙色		ケズリ後ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
314	Fig.46-314	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	6.6	12.8	—	浅黄橙色		ケズリ後ナデ	ヨコナデ	普
315	Fig.46-315	小型丸底壺	胴上位～底部	SD-09	7.9	13.0	—	鈍い橙色		ハケメ後ナデ	ヨコナデ	普
316	Fig.46-316	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	8.3	11.0	—	橙色		ナデ	不明	普
317	Fig.46-317	小型丸底壺	ほぼ完形	不明	6.5	10.4	—	橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
318	Fig.46-318	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-08	8.2	7.9	3.2	橙色		ケズリ	ハケメ後ナデ	普
319	Fig.46-319	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	8.6	8.7	—	赤褐色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ハケメ後ナデ	普
320	Fig.46-320	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	8.8	17.6	—	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	普
321	Fig.46-321	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.4	9.0	—	明赤褐色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
322	Fig.46-322	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	9.0	8.6	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
323	Fig.46-323	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.5	6.0	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
324	Fig.46-324	小型丸底壺	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	明赤褐色		ナデ	ナデ	普
325	Fig.46-325	小型丸底壺	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
326	Fig.46-326	小型丸底壺	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	にぶい黄橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
327	Fig.46-327	小型丸底壺	ほぼ完形	SK-35	7.5	9.6	—	にぶい黄橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
328	Fig.46-328	小型丸底壺	ほぼ完形	不明	9.7	8.5	—	暗褐色		不明	不明	普
329	Fig.46-329	小型丸底壺	胴上位～胴中位	SD-09	—	—	—	にぶい橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
330	Fig.46-330	小型丸底壺	口縁～胴中位	SD-08	—	10.1	—	にぶい褐色		ケズリ後ナデ	ナデ	普

土器観察表　１１

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
331	Fig.46-331	小型丸底壺	口縁～胴上位	SD-08	—	11.9	—	にぶい褐色		ケズリ	ハケメ後ナデ	普
332	Fig.46-332	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	9.5	6.8	—	にぶい褐色		ナデ	ハケメ	普
333	Fig.46-333	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	9.3	9.0	—	にぶい黄橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
334	Fig.46-334	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	10.9	10.4	—	にぶい褐色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
335	Fig.46-335	小型丸底壺	口縁～胴上位	SD-09	—	10.2	—	浅黄橙色		ケズリ後ナデ	ヨコナデ	普
336	Fig.46-336	小型丸底壺	ほぼ完形	SK-35	7.7	7.8	—	明赤褐色		ナデ	ハケメ	普
337	Fig.47-337	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	7.0	7.8	—	褐色		ナデ	ナデ	普
338	Fig.47-338	小型丸底壺		SD-09	6.1	8.0	3.4	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	普
339	Fig.47-339	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	8.3	10.6	—	橙色		ケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
340	Fig.47-340	小型丸底壺	ほぼ完形	SD-09	5.3	6.6	3.4	褐灰色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
341	Fig.47-341	小型壺	ほぼ完形	SD-09	12.6	11.0	—	にぶい褐色		ケズリ	ハケメ	普
342	Fig.47-342	小型壺	ほぼ完形	SD-09	15.1	12.4	—	橙色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
343	Fig.47-343	小型壺	ほぼ完形	SD-09	13.9	11.9	—	橙色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
344	Fig.47-344	小型壺	完形	SD-09	11.5	9.0	—	明赤褐色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
345	Fig.47-345	小型壺	ほぼ完形	SD-09	10.6	10.4	—	にぶい橙色		ケズリ	ケズリ後ハケメ後ナデ	普
346	Fig.47-346	小型壺	完形	SK-35	10.9	7.3	3.2	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
347	Fig.47-347	小型壺	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
348	Fig.47-348	小型壺	胴上位～胴中位	SD-08	—	—	—	にぶい黄橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
349	Fig.47-349	小型壺	ほぼ完形	SD-08			—	浅黄橙色		ナデ	ハケメ	普
350	Fig.47-350	小型壺	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	浅黄橙色		ナデ	ケズリ後ヨコナデ	普
351	Fig.47-351	小型壺	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	にぶい赤褐色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
352	Fig.47-352	小型壺	口縁部	SD-09	—	12.8	—	にぶい橙色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
353	Fig.47-353	小型壺	胴上位～底部	SD-09	—	—	—	橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
354	Fig.47-354	小型壺	ほぼ完形	SD-09	10.6	10.6	—	にぶい橙色		ナデ	ケズリ後ミガキ	普
355	Fig.47-355	小型壺	ほぼ完形	SD-09	12.4	9.2	—	明赤褐色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ハケメ	普
356	Fig.47-356	小型壺	胴上位～底部	SK-35	—	—	—	灰白色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
357	Fig.47-357	ミニチュア	胴上位～底部	SD-08	—	—	—	灰白色		ナデ	ナデ	普
358	Fig.47-358	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	4.7	2.8	2.5	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
359	Fig.47-359	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	4.1	5.3	—	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
360	Fig.47-360	ミニチュア	完形	SD-09	3.5	3.6	—	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
361	Fig.47-361	ミニチュア	完形	SD-09	4.4	4.7	—	橙色		ナデ	ナデ	普
362	Fig.47-362	ミニチュア	口縁～胴中位	SD-09	—	4.3	—	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	普
363	Fig.47-363		口縁～底部	SD-09	4.4	5.0	2.5	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普

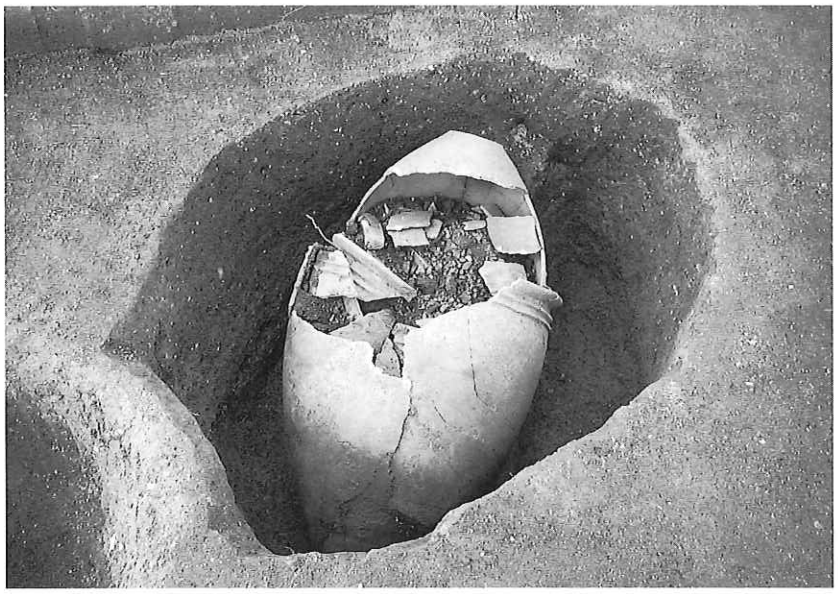
土器観察表　１２

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
364	Fig.47-364	ミニチュア	口縁～底部	SD-09	6.2	6.2	―	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
365	Fig.47-365	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	4.3	5.6	―	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
366	Fig.47-366	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	5.5	6.2	4.0	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
367	Fig.47-367	ミニチュア	頸部～底部	SD-09	―	―	3.2	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
368	Fig.47-368	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	4.6	4.3	―	橙色		ナデ	ナデ	普
369	Fig.47-369	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	3.9	4.6	―	橙色		ナデ	ナデ	普
370	Fig.47-370	ミニチュア	口縁～胴下位	SD-09	―	5.5	―	橙色		ナデ	ナデ	普
371	Fig.47-371	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	3.5	3.2	―	橙色		ナデ	ナデ	普
372	Fig.47-372	ミニチュア	完形	SD-09	3.9	4.3	―	橙色		ナデ	ナデ	普
373	Fig.47-373	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	4.8	6.7	―	にぶい褐色		ナデ	ナデ	普
374	Fig.47-374	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	2.7	4.3	―	橙色		ナデ	ナデ	普
375	Fig.47-375	ミニチュア	胴下位～底部	SD-09	―	―	3.0	黄橙色		ナデ	ナデ	普
376	Fig.47-376	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	3.5	3.6	3.5	橙色		ナデ	ナデ	普
377	Fig.47-377	ミニチュア	口縁～胴下位	SD-09	―	4.6	―	灰褐色		ナデ	ナデ	普
378	Fig.47-378	ミニチュア	胴下位～底部	SD-09	―	―	6.2	灰黄褐色		ナデ	ナデ	普
379	Fig.48-379	ミニチュア	胴下位～底部	SD-08	―	―	5.2	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
380	Fig.45-380	ミニチュア	完形	SD-08	2.0	4.2	―	浅黄橙色		ハケメ後ナデ	ケズリ後ナデ	普
381	Fig.48-381	ミニチュア	ほぼ完形	SD-08	5.25	11.0	―	橙色		ナデ	ケズリ	普
382	Fig.48-382	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	7.3	8.5	―	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
383	Fig.48-383	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	8.3	3.8	4.5	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
384	Fig.48-384	ミニチュア	完形	SD-09	11.4	7.4	6.8	黄橙色		ナデ	ナデ	普
385	Fig.48-385	ミニチュア	ほぼ完形	SD-09	6.3	7.0	―	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
386	Fig.48-386	ミニチュア	完形									普
387	Fig.48-387	ミニチュア	口縁部	不明	―	7.0	―	黄橙色		ナデ	ナデ	普
388	Fig.48-388	ミニチュア	胴上位～底部	SK-35	4.4	―	1.8	にぶい黄橙色		ナデ	ナデ	普
389	Fig.48-389	器台	ほぼ完形	SD-08	14.3	12.3	12.5	橙色		ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
390	Fig.48-390	器台	完形	SD-08	17.2	11.0	13.2	にぶい橙色		ハケメ	ハケメ	普
391	Fig.48-391	器台	ほぼ完形	SD-08	15.7	8.8	10.6	にぶい橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
392	Fig.48-392	器台	ほぼ完形	SK-35	17.0	―	13.7	にぶい橙色		ナデ	ハケメ	普
393	Fig.48-393	器台	口縁～胴中位	SD-08	―	18.5	―	橙色	鼓形器台	不明	不明	普
394	Fig.48-394	器台	口縁～底部	SD-08	10.8	18.0	14.8	浅黄橙色	鼓形器台	不明	不明	普
395	Fig.48-395	器台	ほぼ完形	SD-09	7.4	6.6	9.2	灰白色		ナデ	ナデ	普
396	Fig.48-396	器台	ほぼ完形	SD-09	6.3	6.8	8.4	灰白色		ナデ	ナデ	普

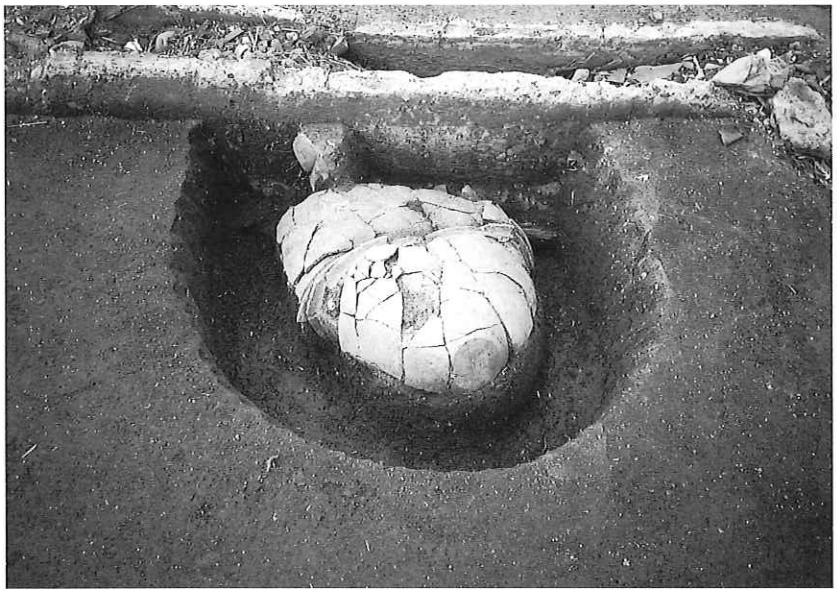
土器観察表　１３

No.	挿図番号	器種・分類	部位	出土地点	器高	口径	底径	色調	備考	調整		焼成
										内面	外面	
397	Fig.48-397	器台	ほぼ完形	不明		3.75	7.0	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普
398	Fig.48-398	器台	ほぼ完形	SD-08	11.3	12.6	13.4	浅黄橙色		ナデ	ケズリ後ナデ	普
399	Fig.48-399	器台	脚部	SD-08	—	—	15.2	黄橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
400	Fig.48-400	器台	胴上位～胴中位	SD-09	—	9.3	—	橙色		ナデ	ナデ	普
401	Fig.48-401	甕	胴中位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ケズリ後ナデ	ケズリ後ハケメ	普
402	Fig.48-402	甕	胴中位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
403	Fig.48-403	甕	胴中位～底部	SD-08	—	—	—	にぶい橙色		ケズリ後ナデ	ハケメ後ナデ	普
404	Fig.48-404	不明土製品	不明	不明	—	—	—	浅黄橙色		ハケメ	ナデ	普
405	Fig.48-405	ジョッキ形土器	胴中位～底部	SD-08	—	—	14.4	にぶい橙色		ナデ	ナデ	普
406	Fig.48-406	ジョッキ形土器	胴上位～底部	SD-09	—	—	10.5	にぶい橙色		ナデ	ハケメ後ナデ	普
407	Fig.48-407	ジョッキ形土器	ほぼ完形	SD-09	9.4	9.4	9.7	灰白色		ナデ	ナデ	普
408	Fig.48-408	ジョッキ形土器	胴中位～下位	不明	7.6	—	10.6	浅黄橙色		ナデ	ナデ	普

写 真 図 版



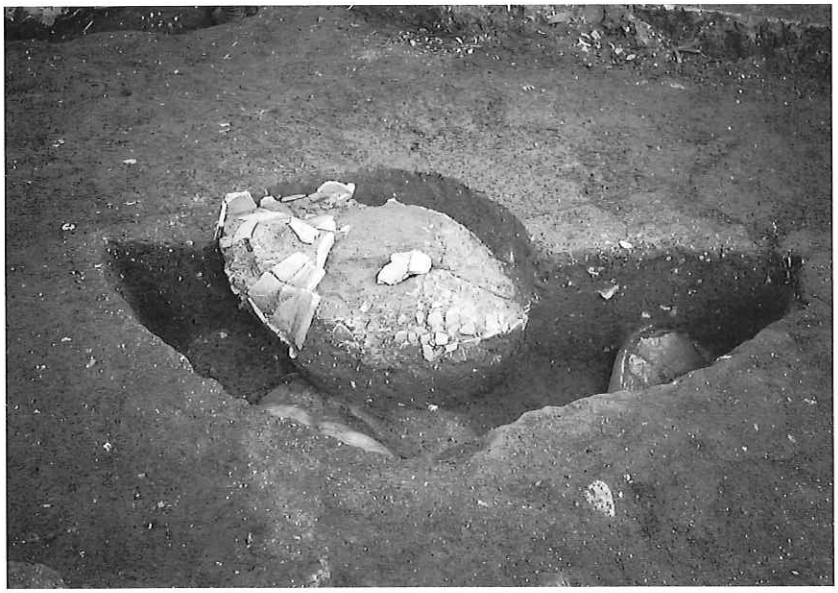
K－01甕棺墓



K－02甕棺墓

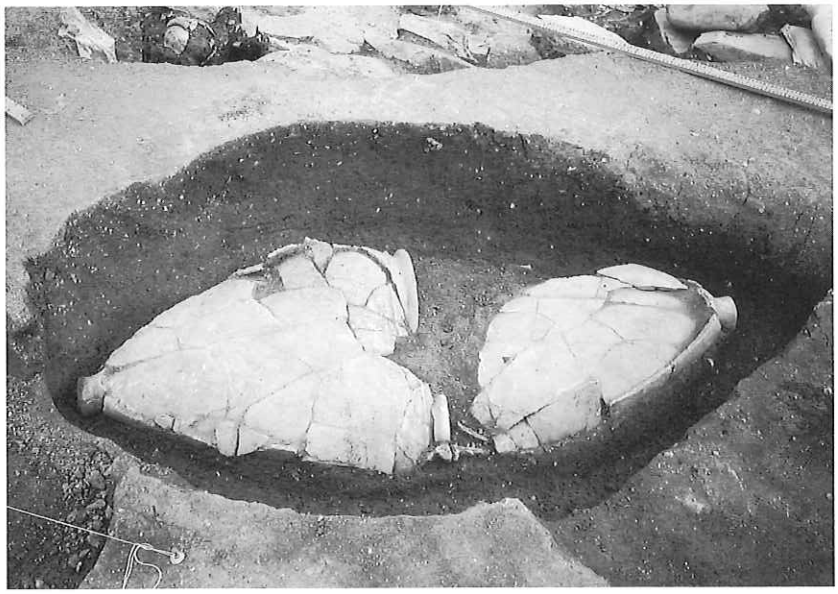
K－03甕棺墓

PL. 1 K－01・02・03甕棺墓



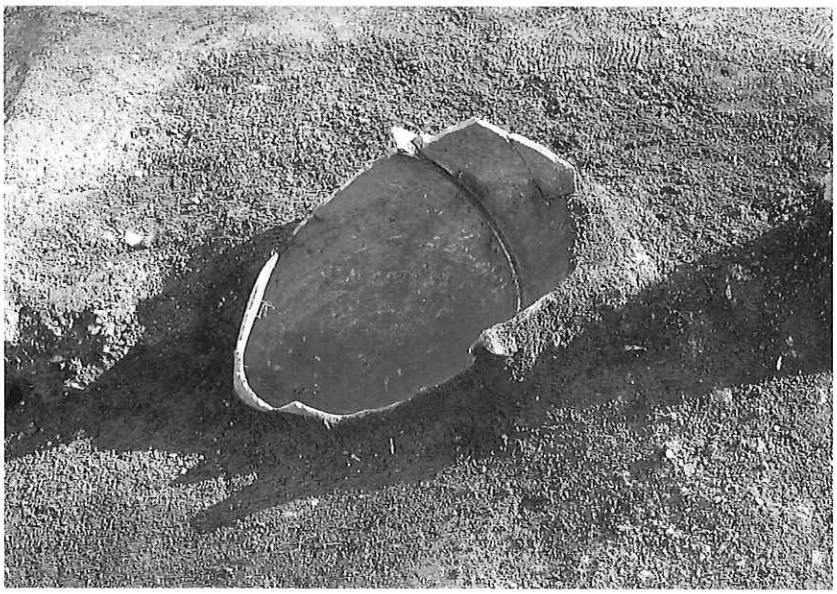
K－04甕棺墓

K－05甕棺墓



K－06甕棺墓

PL. 2 K－04・05・06甕棺墓



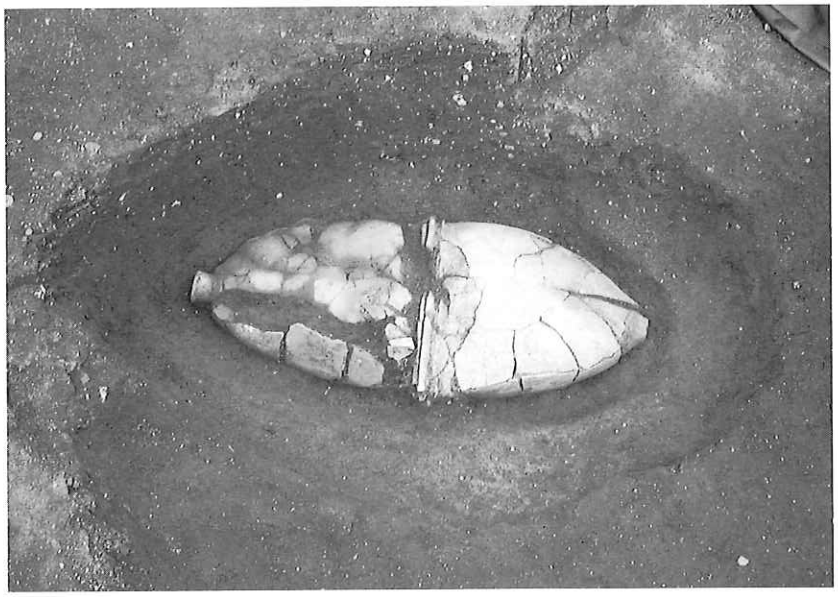
K－07甕棺墓

K－09甕棺墓

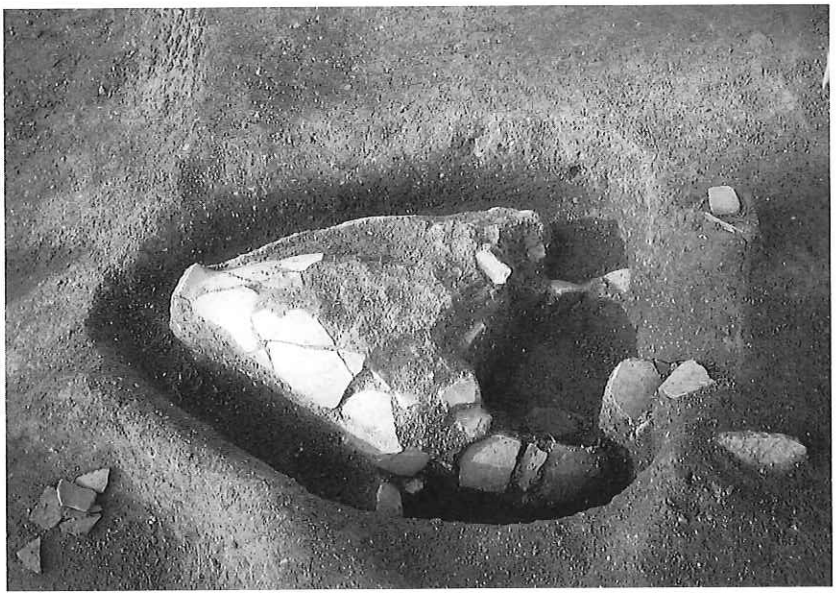
K－10甕棺墓

PL. 3 K－07・09・10甕棺墓

K－11甕棺墓

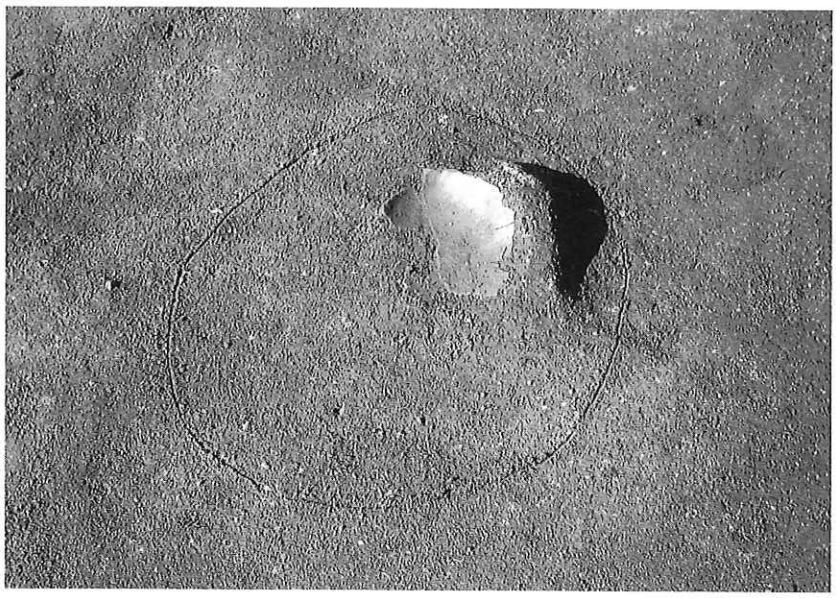


K－12甕棺墓

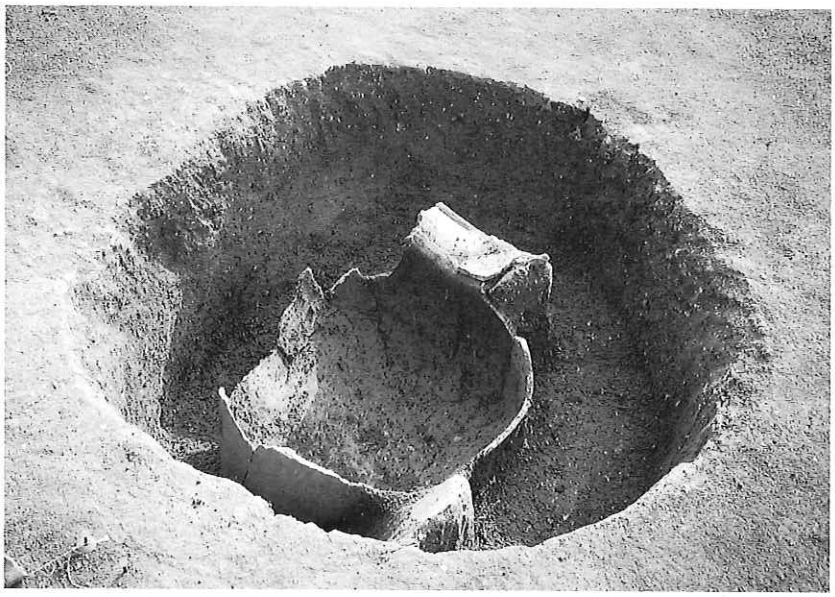


K－13甕棺墓

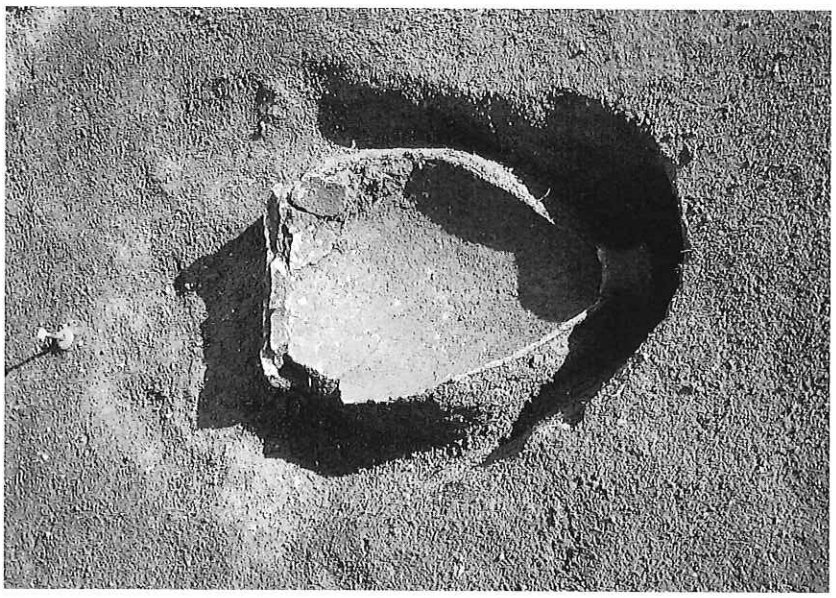
PL. 4 K－11・12・13甕棺墓



K－14甕棺墓



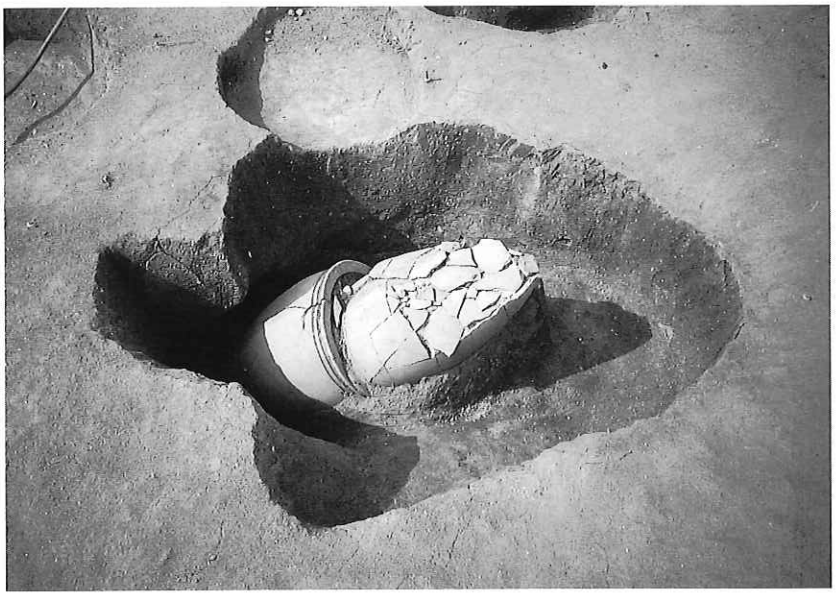
K－15甕棺墓



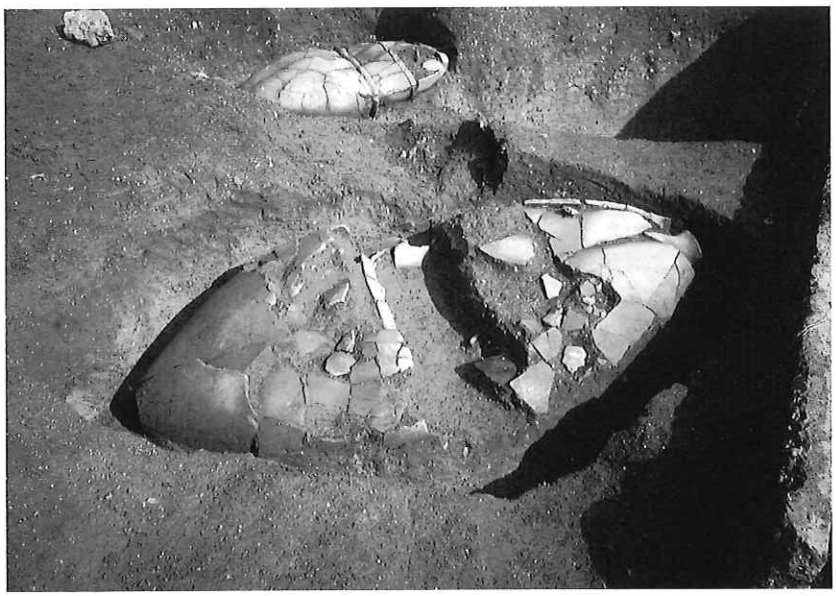
K－16甕棺墓

PL. 5 K－14・15・16甕棺墓

K－17甕棺墓



K－19甕棺墓

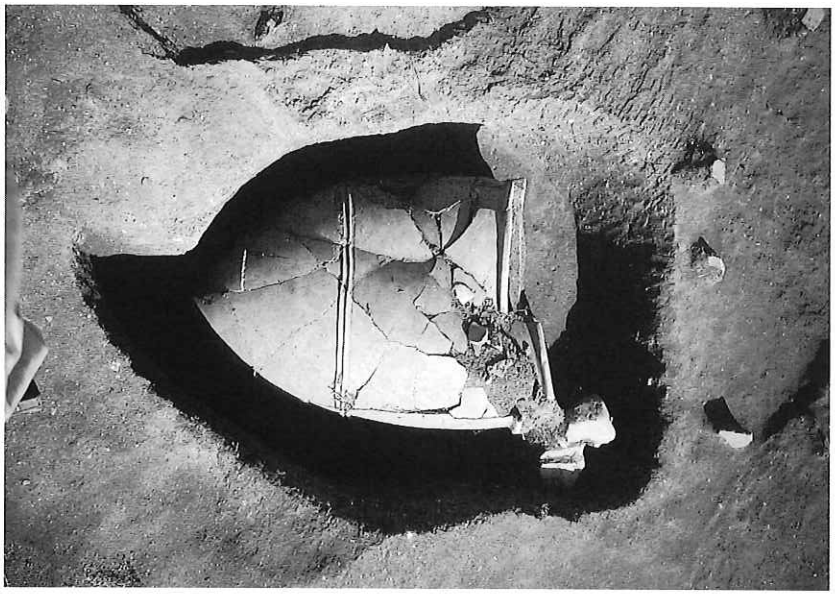


K－21甕棺墓

PL. 6 K－17・19・21甕棺墓

K－22甕棺墓

K－23.24.25甕棺墓



K－26甕棺墓

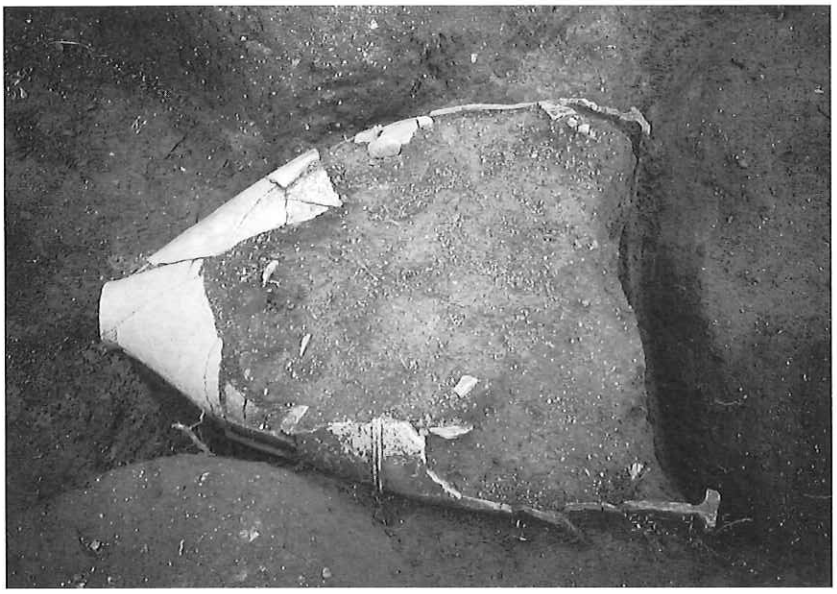
PL. 7 K－22・23. 24. 25・26甕棺墓

K－27甕棺墓

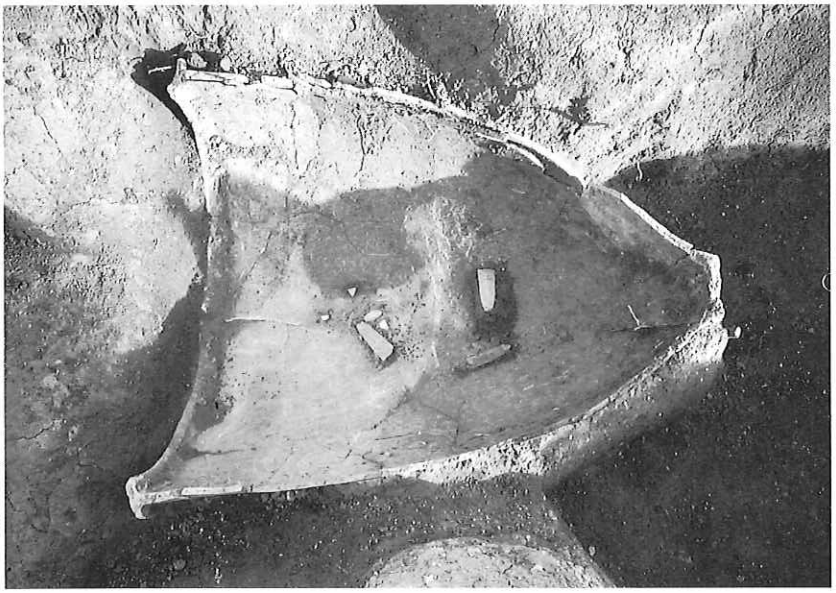
K－28甕棺墓

K－29甕棺墓

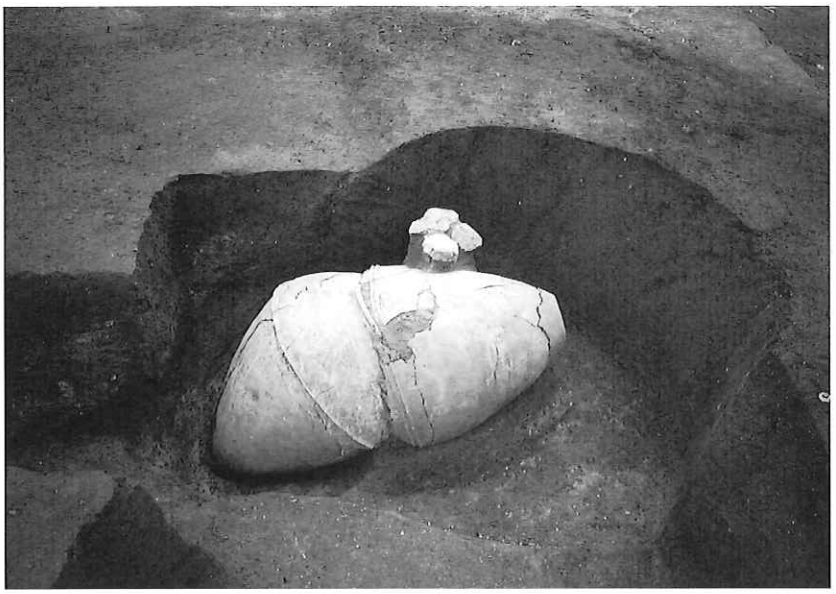
PL. 8 K－27・28・29甕棺墓



K－30甕棺墓



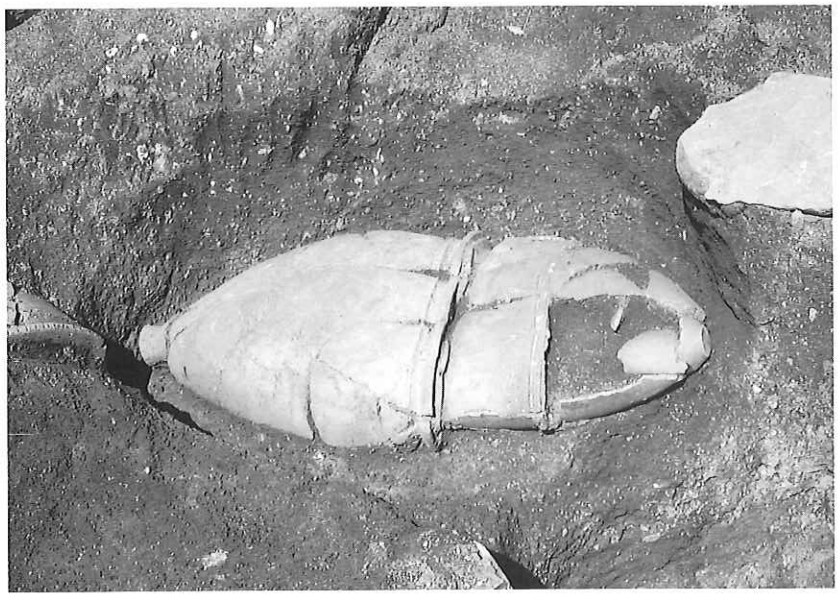
K－30甕棺墓副葬品出土状況



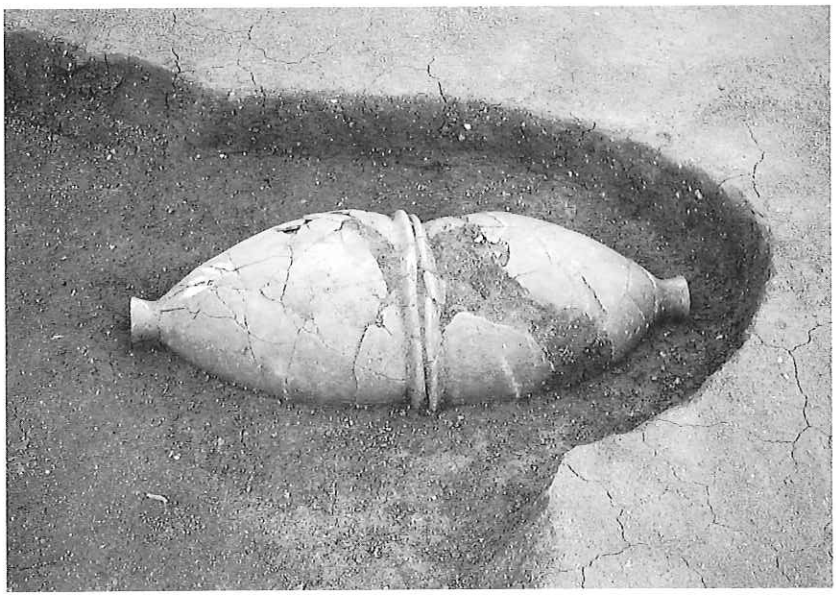
K－31甕棺墓

ＰＬ．９　Ｋ－３０甕棺墓・Ｋ－３０甕棺墓副葬品出土状況・Ｋ－３１甕棺墓

K－32甕棺墓



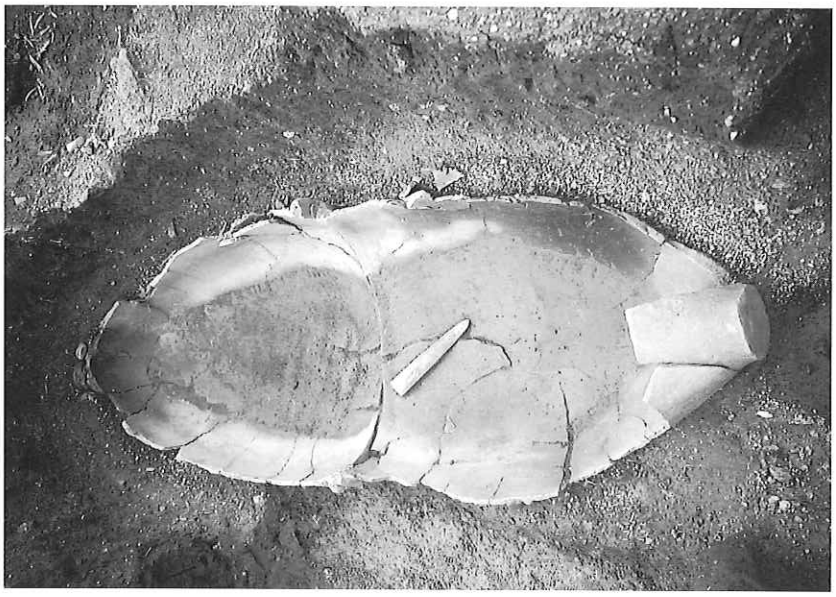
K－34甕棺墓



K－36甕棺墓

PL. 10 K－32・34・36甕棺墓

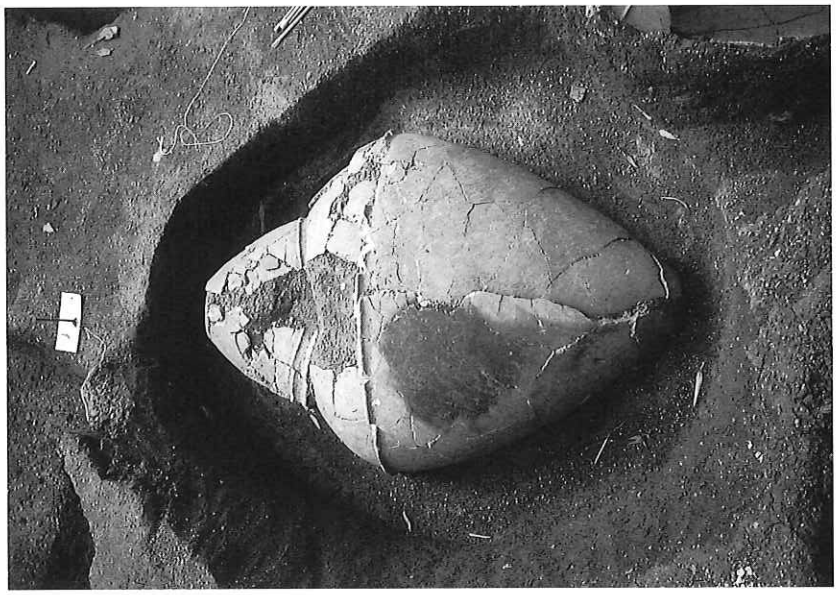
K－37.40甕棺墓



K－37副葬品出土状況

K－38甕棺墓

ＰＬ．11　Ｋ－３７．４０甕棺墓・Ｋ－３７副葬品出土状況・Ｋ－３８甕棺墓



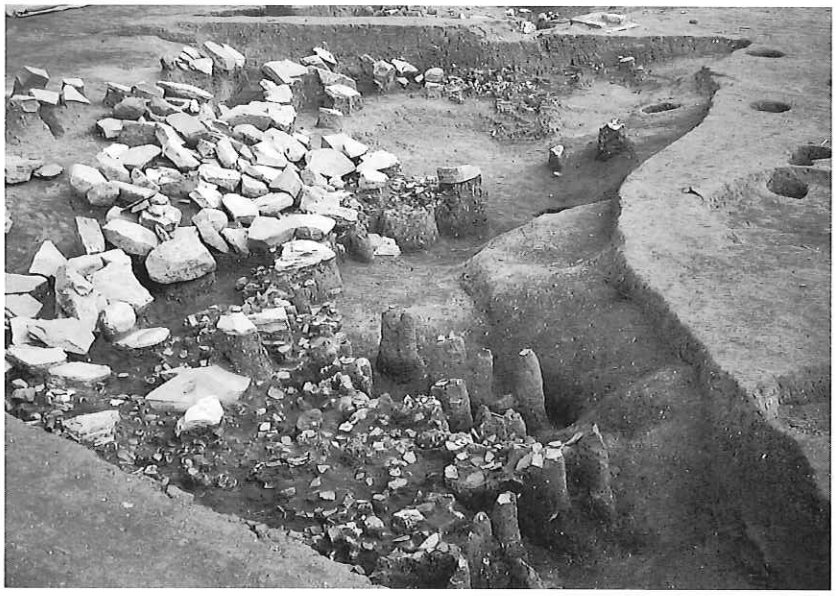
K－39甕棺墓

K－40甕棺墓

K－41甕棺墓

PL. 12 K－39・40・41甕棺墓

ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況
西より

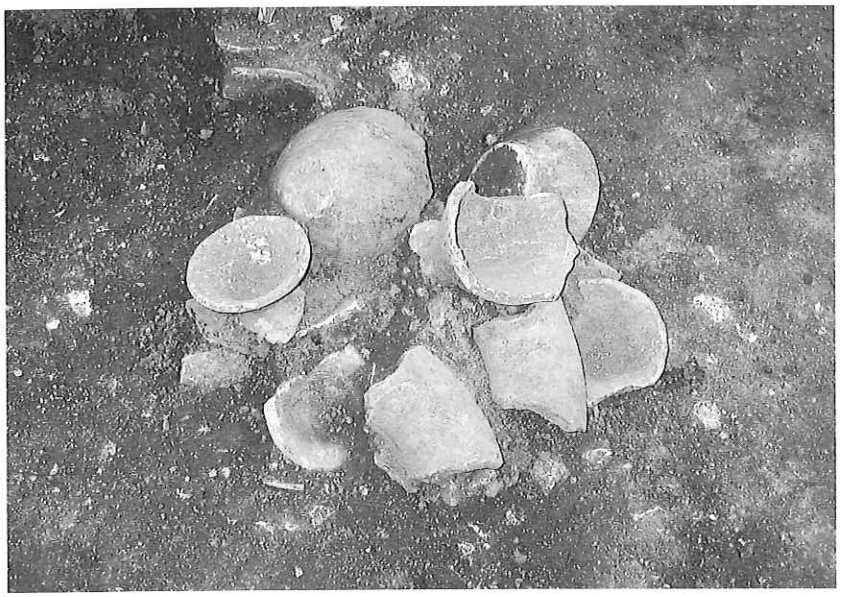


ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況
東より

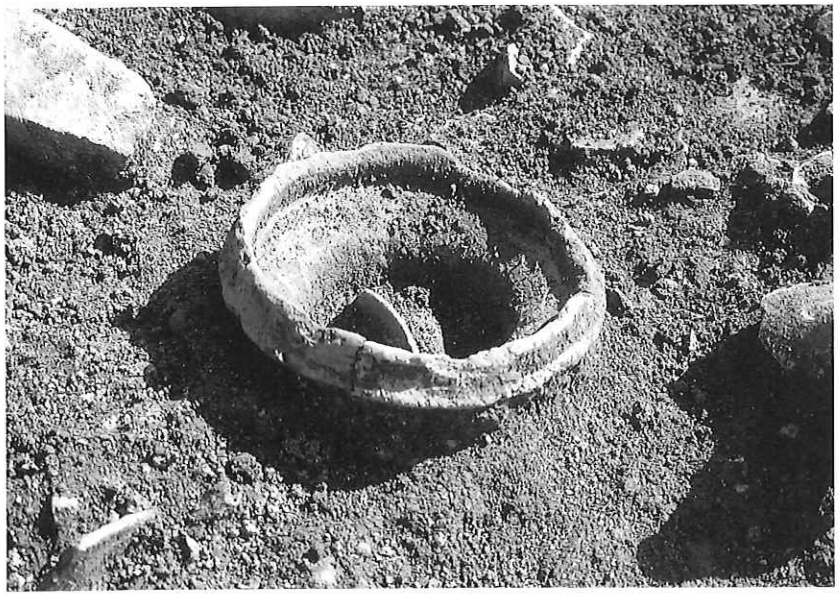
ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況
南より

ＰＬ．13　ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況１

ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況



ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況



ＳＤ－08大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．14　ＳＤ－０８大型溝内遺物出土状況２

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．17　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況１

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．18　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況２

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．19　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況３

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．20　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況４

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

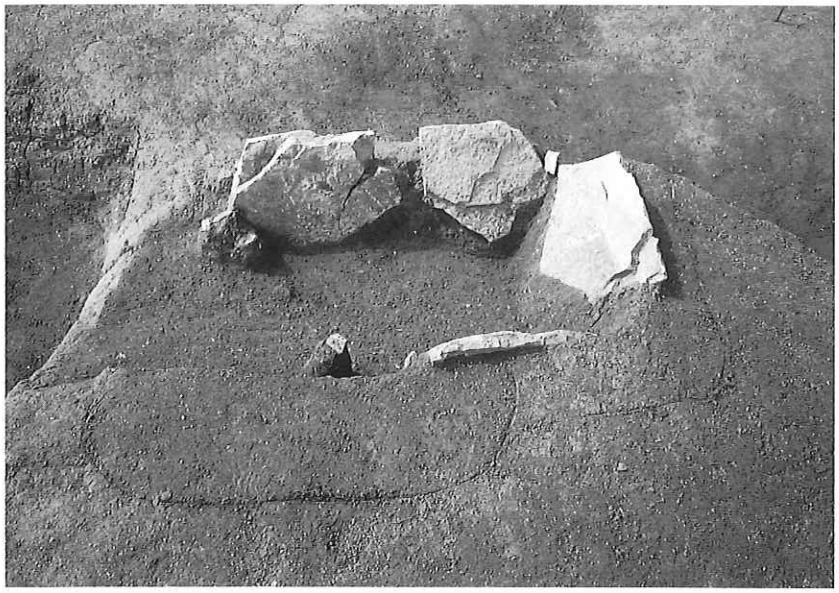
ＰＬ．21　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況５

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＳＤ－09大型溝内遺物出土状況

ＰＬ．22　ＳＤ－０９大型溝内遺物出土状況６



SC－01石棺墓検出状況

M－02木棺墓検出状況

発掘調査作業風景

PL. 25　SC－01石棺墓検出状況・M－02木棺墓検出状況・発掘調査作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしなんだいもんいせき
書名	東南大門遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	玉名市文化財調査報告
シリーズ番号	第８集
編著者名	田中康雄・末永崇・中尾健照　玉名市教育委員会
編集機関	玉名市教育委員会
所在地	〒865-0051　熊本県玉名市繁根木88-1
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ひがしなんだいもんいせき 東南大門遺跡	くまもとけん 熊本県 たまなし 玉名市 ついじ 築地	43206	221	32° 55′ 41″	130° 32′ 25″	1994年10月11日 ～ 1995年3月10日	2,800	市営住宅建設工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東南大門遺跡	甕棺墓	弥生時代中期 弥生時代後期 ～ 古墳時代初頭	甕棺墓 木棺墓、大型溝、土坑	甕棺、鉄製品、石製品 弥生土器、土師器	

玉名市文化財調査報告　第8集

東南大門遺跡

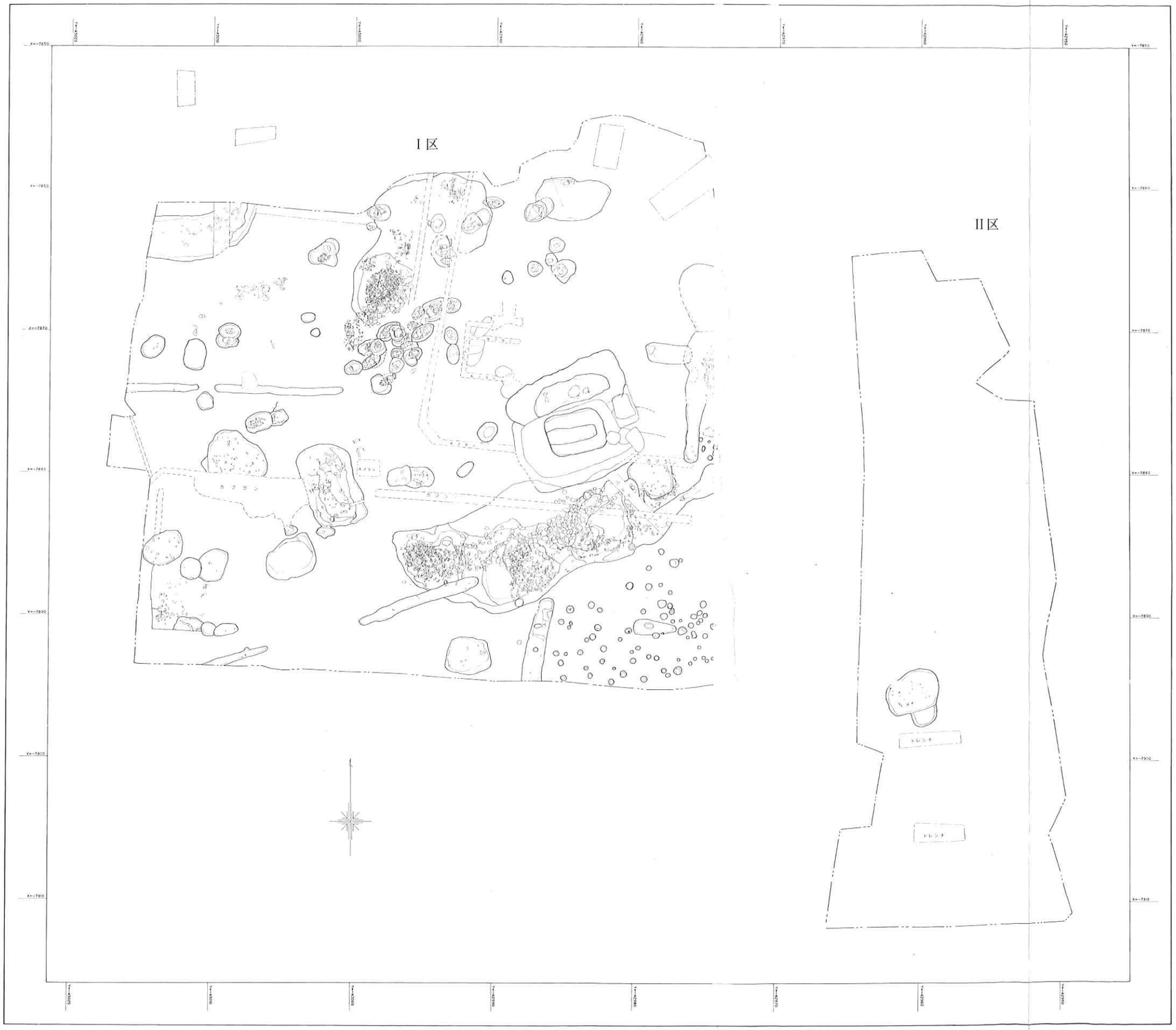
市営住宅南大門団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成12年3月29日印刷

平成12年3月31日発行

編集発行　玉名市教育委員会
〒865-0051　玉名市繁根木88-1

印　　刷　株式会社　有明印刷
〒865-0022　熊本県玉名市寺田123-1
TEL0968-73-2055



Ｆｉｇ．３　東南大門遺跡遺構配置図（全体）　S=1／300

Ｆｉｇ．４　調査Ｉ区遺構配置図　　S=1／150